新式圍碁寶典

第一

漢乾碁書

202
437

202-437
1200800104832

五段鈴木為次郎著

新式

圍碁寶典

科學的解釋

五段鈴木為次郎著

新式圍碁寶典

科學的解釋

大正
5. 5. 24
内交

鈴木五段と（朝報社の贈賞）十戰十捷記念書棚

鈴木五段と（朝報社賞贈の）十戰十捷記念書棚

凡例

古今碁經の刊行頗る多く其類も殆んど數十に上つて居りますが、然し之等は大抵四五目以上を標準として皆高遠の理を論じ至難の變化を説いたものゝみでありまして、時として段以上でなければ了解する事の出來ざる程の者も多くあります、故に全くの初心者は碁經によりて其門に入らんとする事は甚だ困難でありまして若し初めから碁を學ばんとするには已むを得ず父兄又は朋友より不完全ながらも其道を習ひ漸くに之を知るの外は無いのであります、然し斯くして長い間に折角覺へた碁も正しい筋道のものではなく所謂我流の素人筋でありまして其上達を見るには實に遲々たるものであります。

本書は之等の缺點を補はんが爲に、著はしたもので著者が**多年實驗上**或る原理を捕へ且つ之に先輩大家の説を加へ、又廣く碁書を參考として漸くにし完全したものであります。

而して本書は組織的に之を分類し、漸次に**易より難**に及ぼしてあるので全く碁を知らぬ人にても又は多少打ち方を知つて居る人は勿論本書に依れば内容

が全部科學的解釋に成つて居りますから完全に碁道を通觀し得られ、又既に碁を心得居れる人が本書に依りて本手筋を學び能く會得せらるれば、一躍して五六目の上達は疑ひ無く策戰自在にして、必勝を計る事が容易であります。

本書の分類法は之を區別して、戰爭と布石の二種とし戰爭は石提り、石を逃ぐるの二種に分ち更に之を分つて着手の活力、死、活、刧、攻合、盤、二十五目より十一目までの實戰等となし、布石は地取り、地を破るの二種とし更に之を分つて石の活動、地と駄目、締、掛、拓、夾、九目より先までの布石等となしたのであります。且つ最終は定石と打碁を加へたのでありまして、定石は手筋及び形を明にし打碁は戰爭、布石を明快に説明してあります。

大正五年五月　　著者しるす

新式圍碁寶典 第一

目次

○圍碁之沿革附歷代本因坊系統……一
○對局之作法……五
○碁器　碁盤、碁石、碁笥……六
○手合、二十五目より互先まで　自入門第一圖至第三圖……九
○局面解說　入門第四圖……一五
○碁とは如何なるもの？　自入門第五圖至第六圖……一八
○碁は何から習ひ初めるを宜しとするか(戰爭と布石)……二一

戰爭之部

○着手之活力　自入門第七圖至第九圖……二四
○四つ目殺し(其一)　自入門第十圖至第十三圖……二九
○石の連續と切斷　自入門第十四圖至第十五圖……三五

○四つ目殺し(其二)　自入門第十六圖至第十七圖……三八
○提り　自入門第十八圖至第十九圖……四二
○逃及び粘　自入門第二十圖至第二十二圖……四五
○四つ目殺し、提、逃、粘の實例　自入門第二十三圖至第二十六圖……五〇
○提返しと打替　自入門第二十七圖至第二十九圖……五七
○征(其二)　自征第一圖至第二圖……六二
○攻合(其一)　自攻合第一圖至第四圖……六五
○征(其三)　自征第三圖至第六圖……七二
○門　自門第一圖至第二圖……七八
◎二十五目置碁の實戰　自實戰第一圖至第九圖……八一

目次終

新式圍碁寶典第一

圍碁の沿革

碁の原始に關しては、世の説紛々として一つでは無い、邯鄲淳の藝經には博局の戯は六著十二碁なり古烏曹博を作るとある、或は堯圍碁を作りて丹朱に教ゆともあり、又舜王其子商均の愚なるを以て圍碁を作りて之を教ゆともある、斯の如く種々の説があつて其何れによるを正當とするかは分りにくい處であるが要するに初めは博と云つて周の世以前既に此碁に類したものがあつたと云ふ事は疑を容るるの餘地は無い。

説郛と云ふ書物に、棋局各々十七道合して二百八十九道黒白の石各々一百九十枚とあるから目今の碁局は勿論疇昔のものと異つて居るが、然し漢魏に至つては今のものと大差は無い樣である、現今の十九道三百六十一路は唐時代に流行したもので晋時代に至つて最も盛に行はれたものゝ樣である。

我國に渡來せしは何時の時代かと云ふと、天正の御宇遣唐使吉備公、彼國より齎

らして來たのが初めてゞ之れより漸次流行し後には殆んど唐人を壓する樣な名人高手も出でたと云ふ、彼の有名なる日蓮上人も碁は六段の手合であつたと云ひ傳へられて居る、ばかりでなく現に上人の打たれし棋譜も存して居る。

其後に奈良朝時代から碁師と云ふものを設けて圍碁を學ばせ、其中巧なるものを官職に登用して遣唐使に附隨せしめられたとある、伴の勝雄、紀の夏井など此職に居て最も高手の聞へあつた。

其から星移り物換り、天正年中に至つて京都の日蓮宗寂光寺の住職、日海上人は頗る斯技に堪能であつた、依て此技を以て織田信長公に召され後豐太閤を經て猶德川家の碁所預りとなり法印の位に任ぜられた、之れ卽ち、有名なる初代本因坊算砂である、算砂は猶將棋を能くし將棋所を預つて居たが後に將棋は大橋宗桂に讓り碁は二世本因坊算悅に讓つたのである。

又此時代には高手甚だ多く、中村道碩、安井算知など、其中で最も優なるものであつた、其後に至つては道節、道知の樣な名人も續出して居るが後世獨り碁聖と仰がれて居るのは實に四世本因坊道策である。

是より曩幕府では碁所なるものを設けて當時の名手を蒐め碁師として祿を賜はり

年々一回づゝ吉日を擇んで御城に於て手合をなさしめ斯道を奬勵せられた、之れを御城碁と云つて今猶存して居る之れに由つて見るも當時の隆昌が卜知せらるゝのである。

德川三百年十五代慶喜公に至つて大政奉還、王政維新となつて世は爭亂のために斯道は非常に衰頽し又昔日の觀は無かつた。

時に八段村瀨秀甫、斯技の萎靡振はざるを憤慨して同志を集め方圓社を創立して雜誌を發行し、一方世の普及を計ると共に各自の研究に供した、明治十九年秀甫沒し二代目八段中川龜三郎代り次に八段巖埼健造を經て今の七段(二代目)中川龜三郎に至つたのである。

又一方本因坊は、十九代名人秀榮の沒後秀元を經て今の二十一代本因坊秀哉立つたのである、而して大正三年の春名人に進み其技量は當時天下に敵なしと稱せられて居る。

今左に歷代本因坊の系統を揭げ以て碁の一般盛衰を知らんと思ふ。

初代　本因坊算砂（名人）

二代　本因坊算悅（上手）

三代　本因坊道悦（名人）
四代　本因坊道策（名人）
五代　本因坊道知（名人）
六代　本因坊知伯（六段）
七代　本因坊秀伯（六段）
八代　本因坊伯元（六段）
九代　本因坊察元（名人）
十代　本因坊烈元（八段）
十一代　本因坊元丈（八段）
十二代　本因坊丈和（名人）
十三代　本因坊丈策（七段）
十四代　本因坊秀和（八段）
十五代　本因坊秀悦（六段）
十六代　本因坊秀元（當時三段）
十七代　本因坊秀榮（當時五段）

十八代　本因坊秀甫（八段）
十九代　本因坊秀榮（名人）
二十代　本因坊秀元（四段）
二十一代　本因坊秀哉（名人）

對局の作法

碁は君子の戯れと古人の申されし如く總ての遊戯の中で最も高尚で且最も理屈詰である、沈思默考の中に限りなき妙味あつて互に石を下し其意志を叙べるので古來趣向するを、又手談すると云はれて居る、手談と云ふから口の談しで無く手を以て談ずるのである、故に彼の喧囂を極めたり又は胡座して對局するが如きは甚だ愼まねばならぬ事で、又之迄の實驗に徴して見るも胡座して對局せし碁に勝ちし例はあまり聞かないのである。

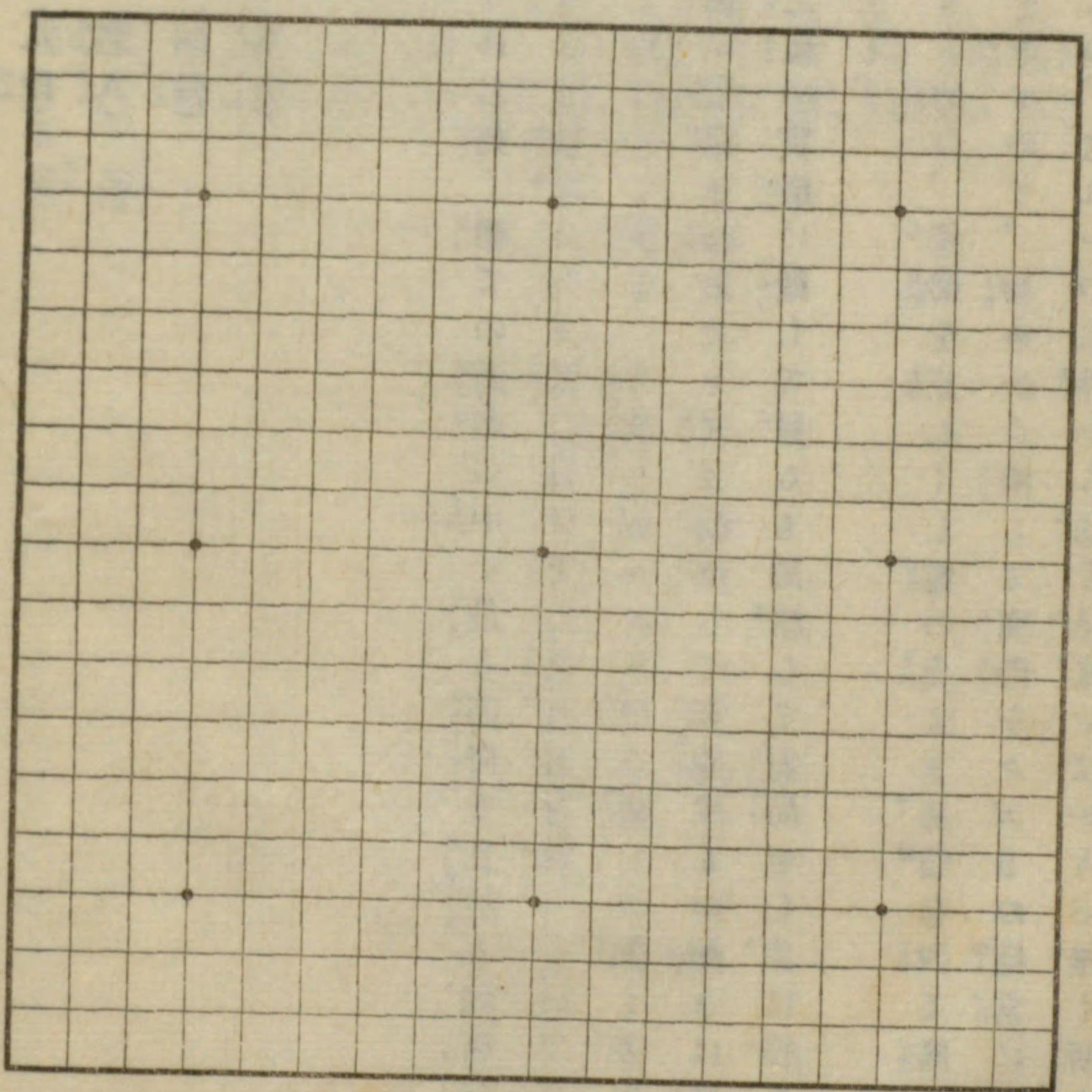
故に先づ碁を打ち初めんとする時は、姿勢を正しくし盤の上より碁笥を取て膝の中央に置き初めて盤上に石を下すので、初めから決して姿勢をクズさぬ樣常に正しく構へて打たなければならぬ、之れ一つは外から見て見宜いばかりで無く斯く

姿勢を正しくする事は、又随つて善い考への出る基となるからである。

碁器

碁器には碁盤、碁石、碁笥の三種あつて其大略は先づ左の如くである。

碁盤、形は下圖に示した通り表面に縱横各十九づつの線を引き其間に黑點九つを劃く、之れは置碁の時其置き場所を明かにするのであつて、又一つには之れによつて斯く廣



漠なる盤面を區劃したのである。

碁笥、云ふまでも無く碁石を入れる器であつて其大さに至つては石の厚薄により一様では無い。

碁石、黑は紀州那智の瀧附近でとれるものを上等とし、下等は多く石版石で作られてある、又白は蛤或は硨磲の貝等で作られてあつて蛤の三分五厘以上厚さのあるものは最上の品としてある、猶今之れを細説すれば。

碁盤

幅、盤面縱横の長さは一様で無い、長いもの或は短いものもあるが先づ普通は、縱、曲尺の一尺四寸五分乃至一尺五寸、横は、一尺三寸五分乃至一尺四寸と云ふのが一般に用ゐられて居る。

丈、盤の厚さは先づ普通三寸五分位であつて五寸以上のものは最上等の部に屬する、又足の長さは約四寸で此長さは何れの盤も大差は無い、又前述の盤の厚薄も一定の寸法とては無く薄いのは一寸五分、二寸、或は一寸八分のものもあるが之等は重に獨習用或は旅行用等輕便を主とする時に用ゐらるゝものである。

然し實際對局するに、厚薄何れが宜いかと云ふと、薄い盤の輕燥なるより厚い盤の壯重なるを宜しとするのである。

用材、榧を最上とし銀杏、桂之れに次ぐのである、猶此外に櫻、樅、欅なぞも往往見受けるが之等はあまり木の質が堅きに過ぎ盤としては適當では無い、又時に檜で作られたものを見受けるが之れは榧と同じく盤として宜い方である。

碁石

種類、黑白二種であつて古へ之れは天地陰陽に象つて作られたものであると云ひ傳へられてある。

數、黑白合して三百六十一、盤面の數と同じであつて其中黑百八十一、白は百八十で黑の方が一つ多い。

大さ、直徑七分乃至七分五厘を普通とし時には六分位のものもある。

厚さ、一分位から三分、四分位迄もある、尤も之れは原料の如何によるのであつて若し白が蛤の時は一分、或は一分五厘を普通とし若し三分五厘以上となると隨分高價のもので石だけでも二百圓或は三百圓以上のものもある、猶此外に時として硝子で作られたものもあつて價は先づ二圓から五圓位までゞあるが此硝子は輕過ぎて甚だ打ち惡いのである。

碁笥

種類、大別すれば木地のものと漆器のものとの二種である。

形、形は千差萬別であつて別に之れと云つて極まつては居ない、或は中の膨らんだもの瓢簞形のもの、鐵鉢形のもの、其他種々あるが之等は皆人の好き〲によるもので別に何れが宜いとも決まつては居ない。

手合

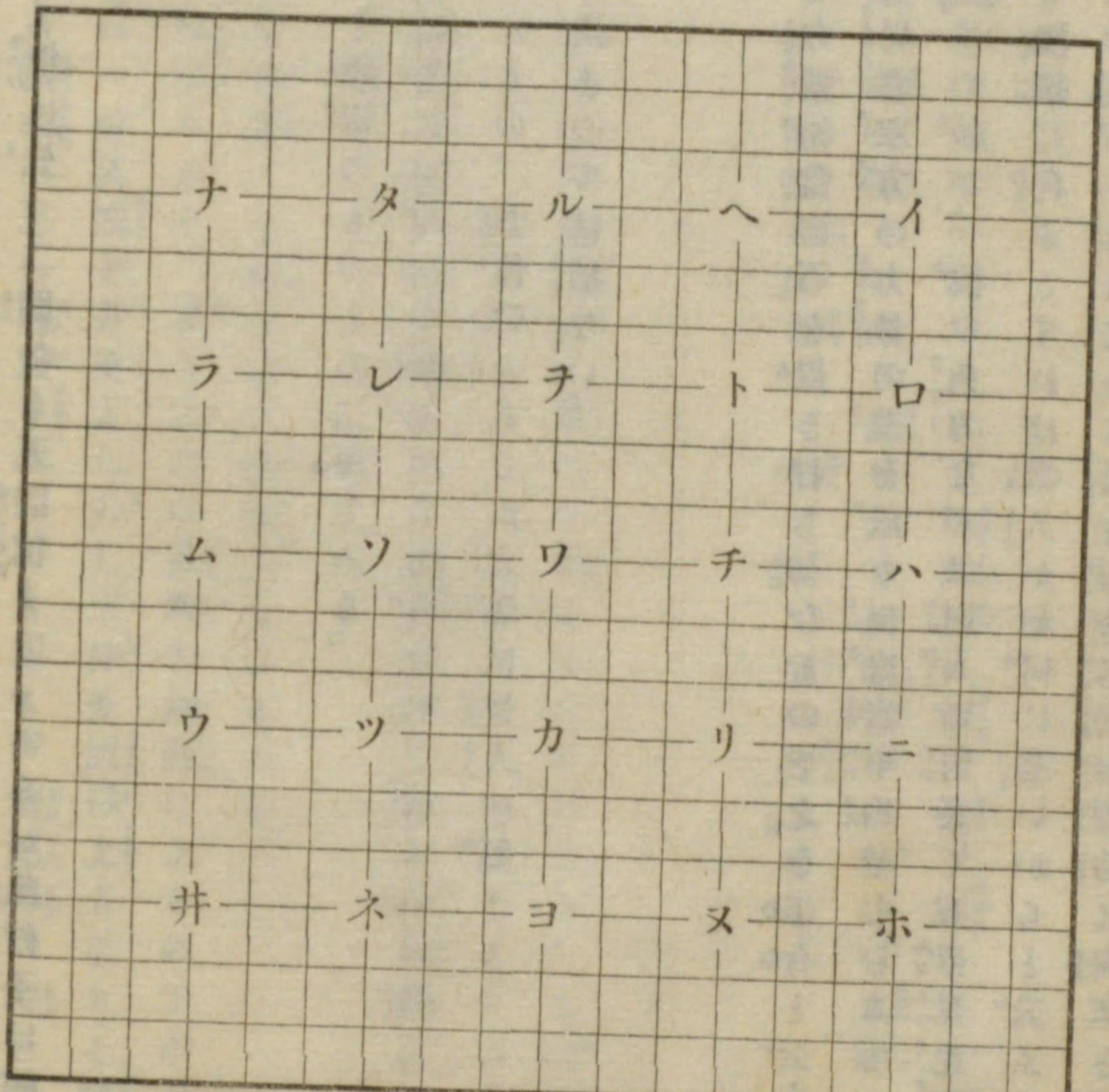
局に對して弱者は强者に對し力量相當に石を置き打ち初むるので之を手合と云ふ。

此手合と云ふのは一面には對局者双方の力量の差を或る程度迄平均せしむるものであつて此點は他の遊戲と異つて居る、彼の角力なぞは何人に對しても皆互先即ち對局の手合であつて若しも橫綱に向ふとすれば素人が如何に强いからと云ふも到底勝つ事は出來ぬのである。然るに碁は之れと異り假令名人本因坊に向ふとも

其れに相當す可き手合で打てば容易に敗するものでは無い。

又此手合には色々の置方があるが先づ二十五目より互先までを普通とする猶之を分類すれば左の如くである。

二十五目置碁、全く初心の人が多少心得のある人に向はんとするには先づ之れ丈は置いてかゝるのであつて、其置方は、圖の如くイ以下井まで順に二十五目置を普通とする。

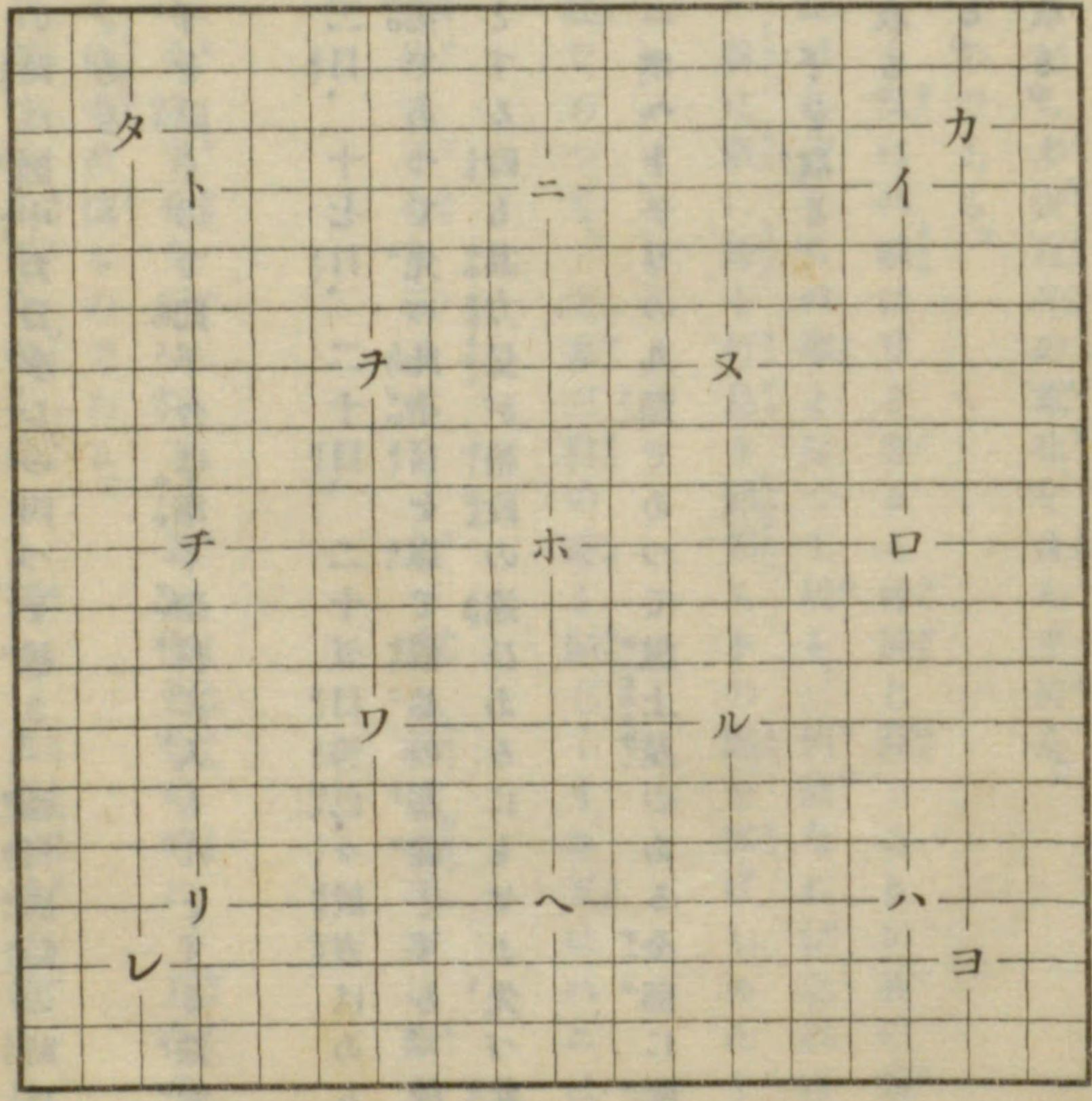


入門　第一圖

二十目置碁、前の二十五目と稍同じであつて、其置方は第一圖(**イロハニホ**)と(**ナラムウ**井)は其儘であるが中の三行を二行に減ずるので、即ち**ヘ**行を一路左に寄せ**タ**行を一路右に寄せ而して中の**ル**行を除くのである。

十七目、俗に之を聖目中目風鈴と云ふ、其置方は**イロ**以下**レ**まで第二圖に於ける全部である。

十三目、俗に聖目中目と云ひ、又置方によつては



入門　第二圖

聖目風鈴と云ふ卽ち聖目中目の時は圖中(カ、ヨ、タ、レ)の四つを拔き、聖目風鈴の時は圖中(ヌ、ル、ヲ、ワ)の四つを拔くのである。

十一目、十三目よりヲ、ルの二子を除くので此手合は漸く聖目に入らんとする豫備の手合である。

九目、普通聖目と云ふ前述十三目、十七目、二十目、二十五目等色々置方はあるけれども其等は極く初心の中丈であつて先づ此聖目を以て置碁の基礎とする、故に或る碁打に初めて對局せんとする時も其力量が格段の違ひあるにもせよ先づ此聖目を以て止りとする。

而して其置方は第二圖(イ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、チ、リ)の九點であつて盤上星のある全部に配置するのである。

八目、其置方は聖目よりホの一子を取る。

七目、聖目よりニ、ヘの二子を取る。

六目、七目よりホの一子を取る。

五目、七目よりロ、チの二子を取る。

四目、五目よりホの一子を取る。

以上、四目までを純粹の置碁と稱するので以下三目二目に至つては隅に於ける一子或は二子を取て打つ事となるから多少互先の意味を含んで居る。

三目、四目よりトの一子を取るのである。

而して此一子の取方はイに取るも又はハ或はリと取るも皆同じ譯であるが碁の規則として必ずトの一點を明けなければならぬ事となつて居る、何故なれば之れは強者に對する禮として初めの一着は敵に最も打易き點(卽ちトの點)を擇ばしめんとするにあるからである。

二目、置方は第三圖イ、ロの二點であつて、之亦三目の時と同じくイ、ニ又はハ、ニは不可である。

定先、常に黑を持ち常に先と打出す手合を云ふので、先づ第一着は必ずホに據る事に決まつて居る。

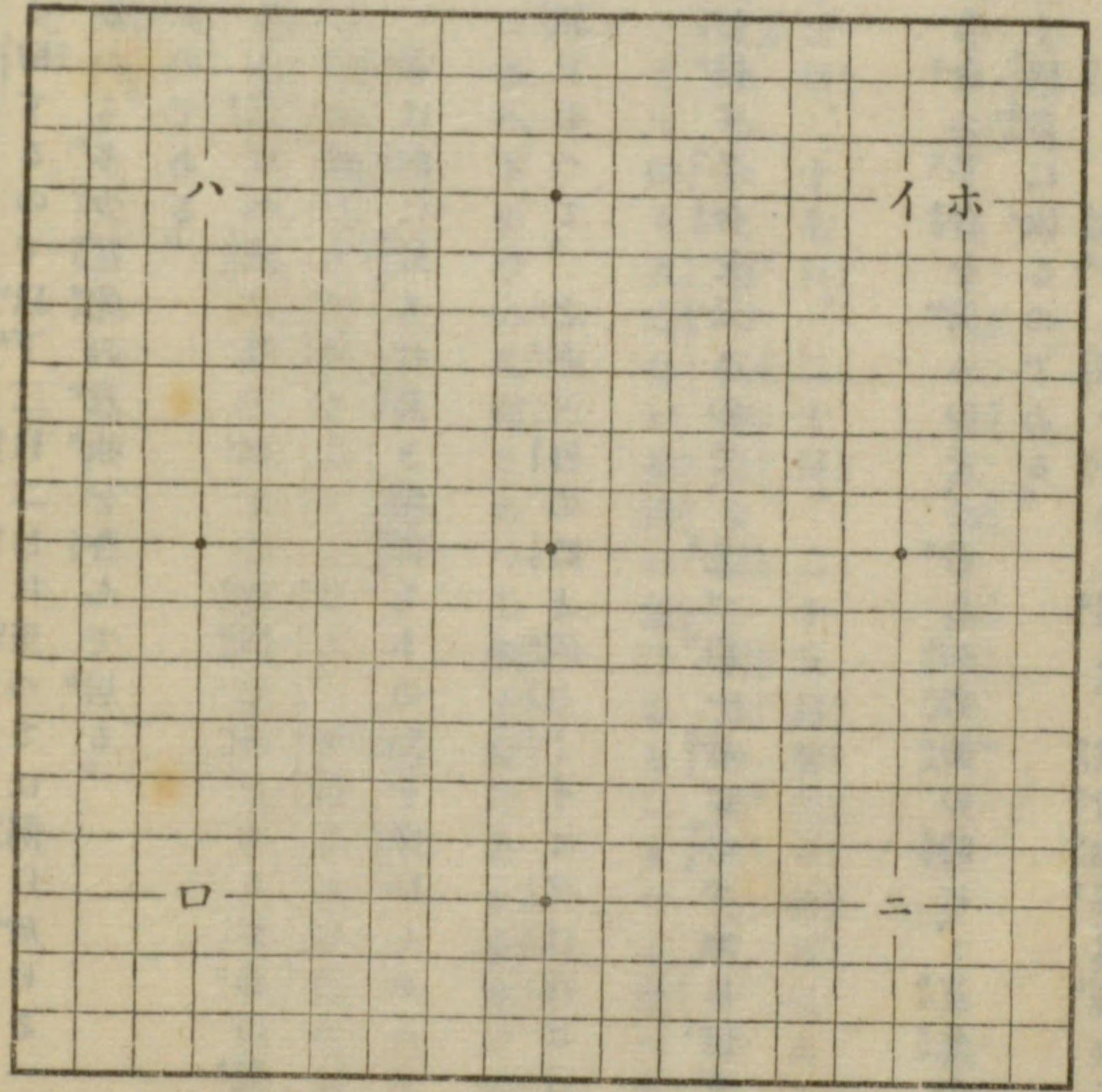
(此理も三目の時と同じ)

互先、白、黑互に代る〳〵持ち合ふ手合を云ふので、若し初對面の時に、互先の黑白を決めんとするには、多く偶奇に依るのである。

卽ち其方法は、先づ任意に石を握つて相手に偶か奇かと問ふ、其時相手は假りに

「奇で先」と答へたとする、其時に若し握つて居た石が、七個卽ち奇數であつたとすれば、相手は先づ黑を持つのである、其代り其次の局には相手は白を持ち我は黑を持つのである、只偶奇で決めるのは初めの一回のみであつて、其後は何時までも交るがはる黑と白を取換へて打つのである。

以上手合は、皆素人本位のものであつて、若し之れが專門家となると、猶



入門第三圖

細くなつて居る、何故なれば專門家の手合は其力量の差が極く微細となつて居るのであつて、若し一目の違ひがあれば全く其勝敗は決して居るからである。

假りにこゝに、三段と六段と對局するとせんに、其時三段の方で二子を置けば必勝であるものを若し先の時は必ず敗に歸すると云ふ事はあへて珍らしく無い、斯かる時には先と二目の交り、卽ち先二つの手合で對局するのである。

局面解說

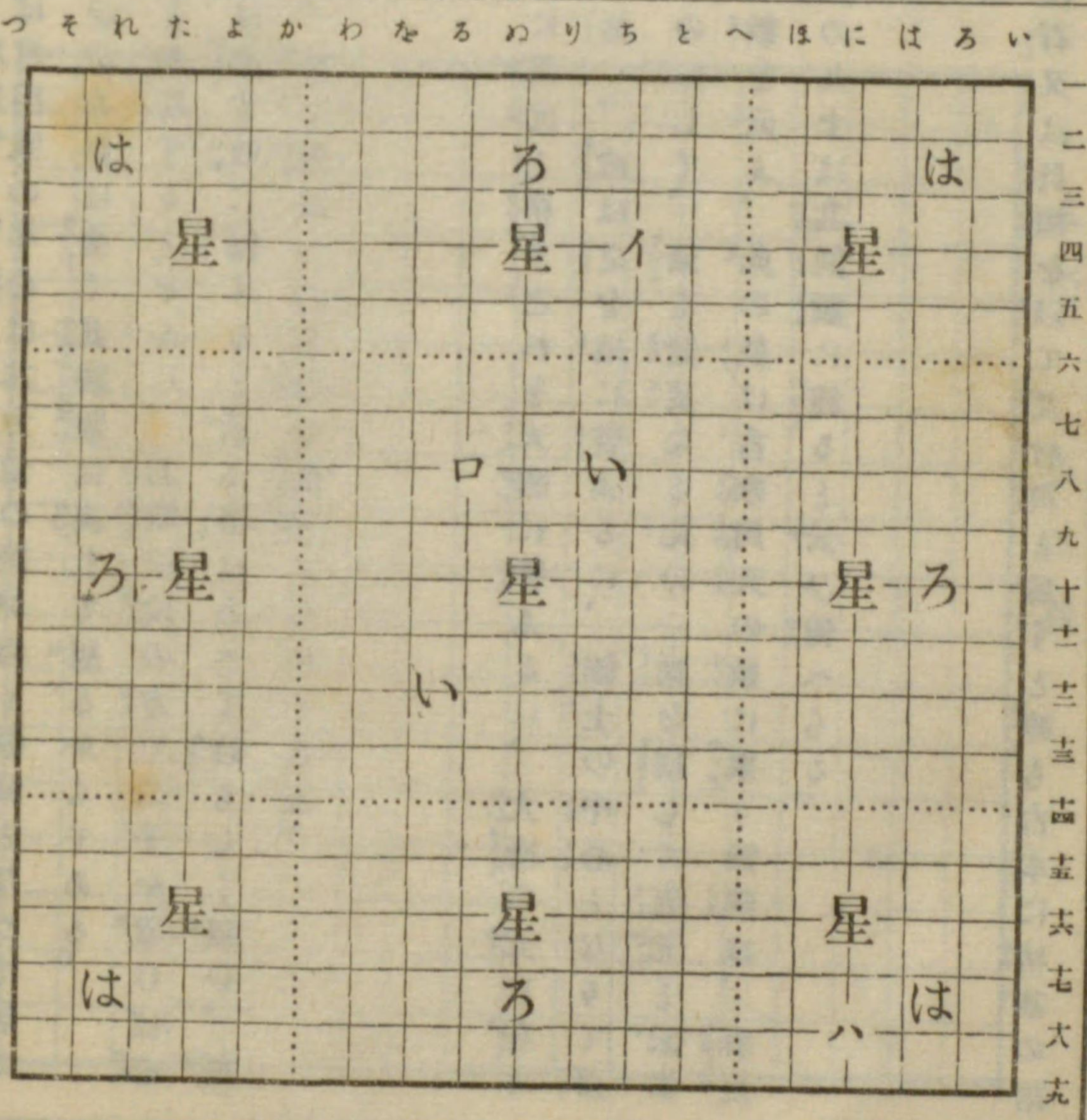
盤面の中央に在る一點を特に天元と稱す之れを天體に譬ふるに、大極の元に在りて諸星の運行を司る大陽の如く、或は之を地に譬ふるに、國土の中心となりて蒼生を支配する天子の如きものにして、最も緊要なる此の一點を稱して天元と云ふ局路とは縱橫三百六十一の數を云ふ、此の數は古來周天の數に象り四隅は、春夏秋冬四季に擬らへ、其各隅の九十は其同數に範ると云ひ傳へらる。

石

石は前述の如く現今多くは石又は貝類を以て其材料と爲すと雖も古本に枯棊の語

あり、故に古は木を以て作られしことは推して知るべきである、又玄々碁經には枯棊三百六十白黑相半すとあり、故に古は碁の字を用ひず棊の字を用ひたるは明らかである。

又局路三百六十一、其一一の位置を示すには、古は局を四分して四隅となし、四聲卽ち平、上、去、入の語を用ひて碁路を求むるの法となせしも此法は、甚だ煩雜に過ぎ、却て誤り易き虞れあるを以て現



入門第四圖

今に於ては第四圖に示すが如く、橫線にはい、ろ、は……を縱線には、一、二、三……を順次列記して其位置を云ひ現はすの法と爲すに至れり、之れを前記四聲に比すれば其難易天地の相違である、例へば、盤中のイ一點を云ひ現はさんとする時は「ちノ四」卽ち上方い、ろ、はの中にちの點と側方一、二、三の中に於て四の點との交叉點にあるが故に「ちノ四」の語を以てし、又ロなれば「るノ八」、ハなれば「にノ十八」の語を以てす、是れ其一例である。

局面の區別

局面は是れを大別して左の三種と爲す。
卽ち中、邊、隅是れなり。

一、中とは局面の中復卽ち圖中の天元より四方の點に卷內を指して中と云ふ。

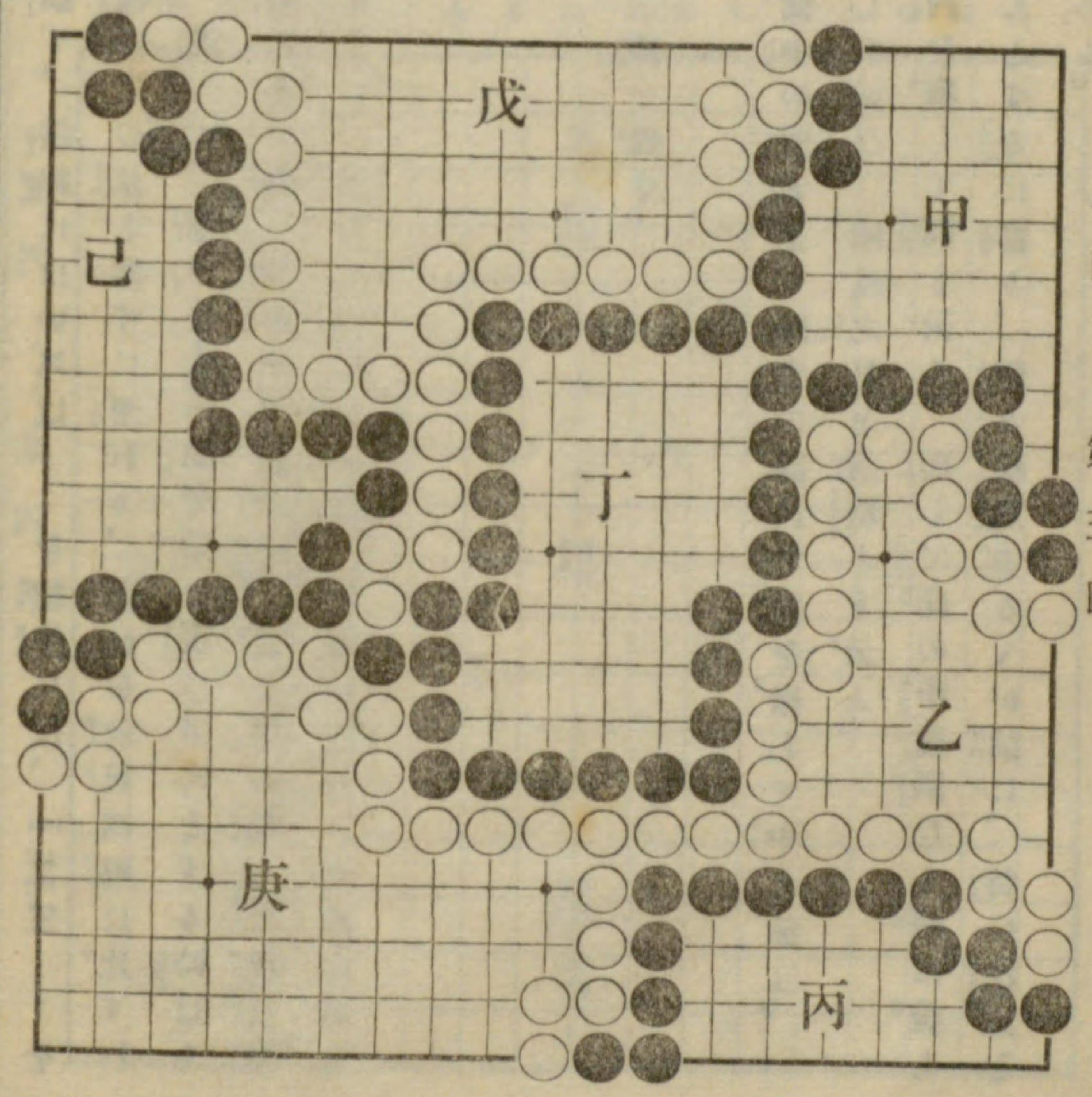
一、邊とはろ點の四方を指して云ひ、或は之れを邊境とも云ふ。

一、隅とははは點四隅の點々內を指して隅と云ふ、而して此の中、邊、隅なる語は後ちに盤面について說明せんとするに當り、屢々繰返さるゝが故に、特に注意を要するは此三つの語である。

碁とは如何なるもの？

前に種々說明せし事は、只碁を覺へんとする者の爲に其心得べき概念を說いたのである、本圖より以下漸次碁とは如何なるものであるかと云ふことに就て說明せんとす、之れ實に本書の主眼とする處である。

然し以下布石に於けるまでの說明は既に四ッ目殺し或は石の死活及び定石の一部を知れる者に對し



入門第五圖

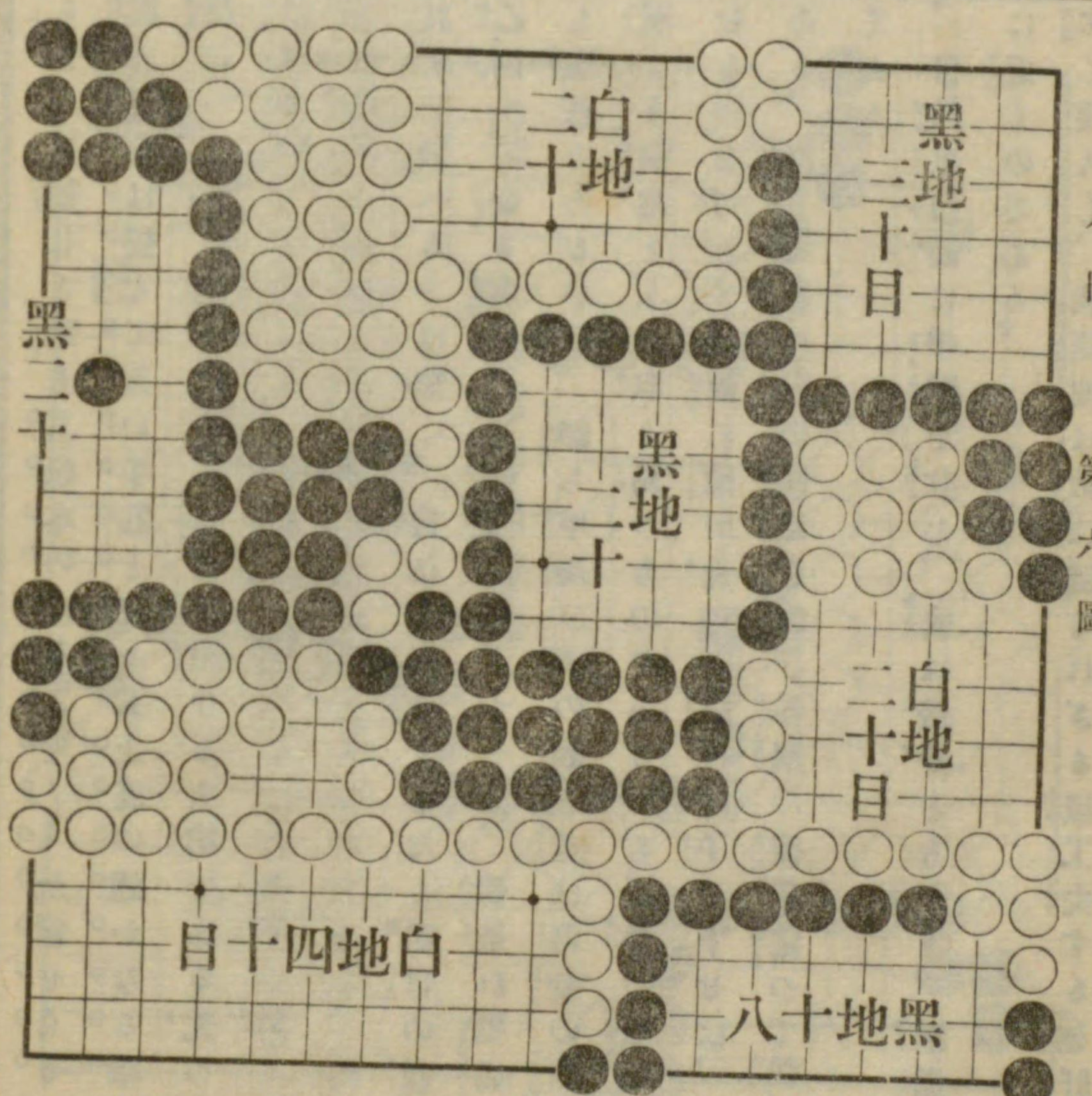
ては些か駄足の感なきにあらざるが如しと雖も其根本の理をよく〳〵玩索せらるれば其中に碁理を見出し今迄の惡筋は變じて善い手筋となり其上達の速かなる事は余の疑はざる處である、故に一二卷に就ては特に熟覽を勸むる次第である「先づ第一、碁の勝敗を爭ふの方法は如何」と云ふに、局面上に於ける三百六十一路より黑白各自が多數の地所(五圖參照)即ち路數を多く取るを目的とするのである。但し盤上にならべし黑白の石其者を數へるでは無く、自己の領分としたる路目の數を數ふるのである、(五圖甲乙丙…の如き處)次に此盤上三百六十一は、皆是れ戰場である、故に其何れに打つも隨意であるが隅、即ち甲及び庚の如き處は自分の領地にせんとする時は他の場所より領地として取り易きものであるから、先づ順序として、最初は隅より打初むるのを可とす、故に敵が先づ一隅に一子を下せば、我他の隅に一子を下すのである、斯して互に隅の領地を爭ひ各隅の配置定つて後、漸次中邊に向つて打出すのである。

斯く互に一石づゝ打合へば、自然黑白間に爭鬪を生じ、或は侵分ともなり、漸進するに從つて一局勝敗の期に近くのである。

又對局中、敵地へ成る可く多く侵入し、我領地は敵に破られざる樣工夫するを肝

要とす、即ち五圖甲乙丙の如き地境の成る可く多からん事を專一とするにあり、斯くして既に其一局を打終り、最早彼我共に爭ふべき餘地なきに至りたるときは互に**ハマ**(**ハマ**とは敵石を殺し打上げたるもの即ち捕虜として碁笥に收容せし敵の石又は終局に至りて提りたる敵の石を云ふ)を以て、敵の領地を塡充し終れば互に敵の空地を計算し而して彼我の空地即ち領地を

入門第六圖



比較するのである、此比較計算の手續を俗に**ツクル**と云ふ、作りあげたる結果、全體の地即ち目數の多少によつて勝敗の結末をつけるのである。

例へば、前圖の如き黑白互に地を取つたとして、黑は白の**ハマ**二十を持ち又白は黑の**ハマ**十五を持ち、互に其地を塡充すれば、即ち本圖の如き形となる。

黑は二十の地が二ケ所、三十、十八の地が各一ケ所、合して八十八目となる、又白は如何と云ふに二十の地が二ケ所、四十が一ケ所、此外に三目の餘地あり合して八十三目である、即ち此比較計算は黑の方が五目多いので之を「黑五目勝」と云ふ。之等は第四冊に於て重ねて詳細に說明せむ(先づ順序としてこゝに其大要を說いたのである。)

碁は何から習ひ初めるを宜しとするか。

碁に左の四種あり。

一、石取り(殺し提るの意)　一、石を逃ぐる

一、地取り(圍むの意)　一、地を破る

此四つは實に碁の基礎であつて、又碁に於ける多くの變化は、皆此四つに因つて

起るのである。猶之れを細別すれば。

- 石提り
  - 四つ目殺
  - 提り
  - 撲死
  - 追落し
  - 征(しちやう)
  - 門(あしだ)
  - 攻合(せめあひ)
  - 死
  - 點(なかで)
  - 劫(こう)
- 石を逃ぐる
  - 粘(つぎ)
  - 盤り(わたり)
  - 活
  - 持(せき)
  - 續(つゞき)
  - 長生
  - 三劫
- 地取り
  - 締り
    - 小桂馬締り
    - 大桂馬締り
    - 一間高締り
    - 二間高締り
  - 拓き
    - 一間拓
    - 二間拓
    - 三間拓
    - 四間拓
    - 五間拓
  - 圍み
- 地を破る
  - 掛り
    - 小桂馬掛り
    - 大桂馬掛り
    - 大々桂馬掛り
    - 一間高掛り
    - 二間高掛り
  - 夾み
    - 一間夾
    - 二間夾
    - 三間夾
  - 打込

又以上を二大別して戰爭と布石との二種とす戰爭は、石取り、石を逃ぐるの二つを兼ね布石は、地取り、地を破るの二つを兼ぬ、而して又之を合して打碁とし實際對局となるのである、今之を分類すれば

- 打碁
  - 戰爭
    - 石提り（前掲十種あり）
    - 石を逃ぐる（前掲七種あり）
  - 布石
    - 地取り（前掲三種九別あり）
    - 地を破る（前掲三種八別あり）

而して以下本書全部の説明は皆此分類を根本となし以て易より難に及ぼし漸次に説き進まんとするのである。

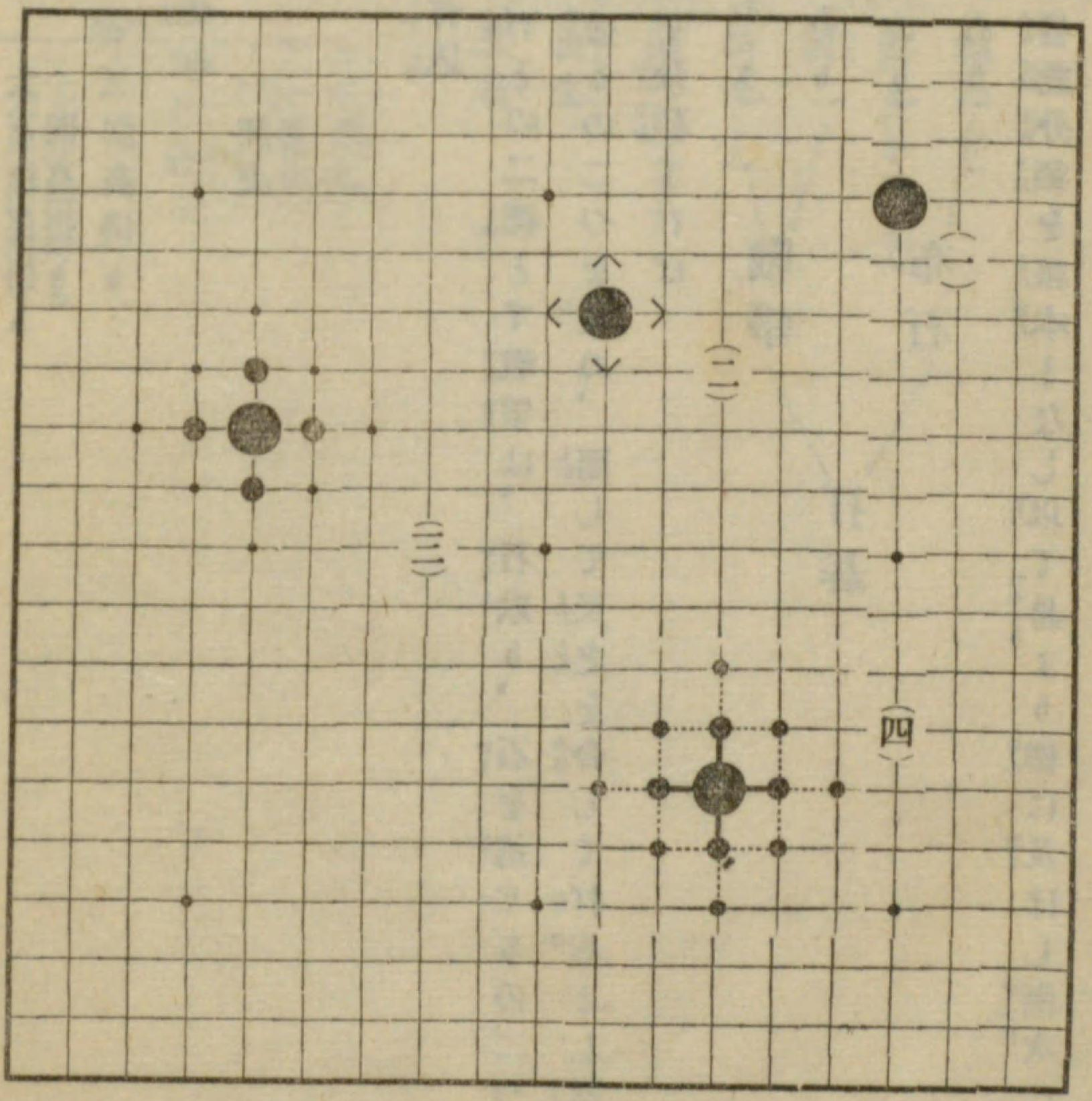
戰爭の部

着手の活力

前述の如く、碁は之を大別して戰爭と布石との二種と爲す。

戰爭とは、主として石の死、活の理を說明するのであつて之を知るには、先づ着手の活力と云ふ事を知らねばならぬ。

活力とは、卽ち石の生命であつて、一旦盤上に下したる石は其盤上に存在してゐる限り或る意味に



入門　第七圖

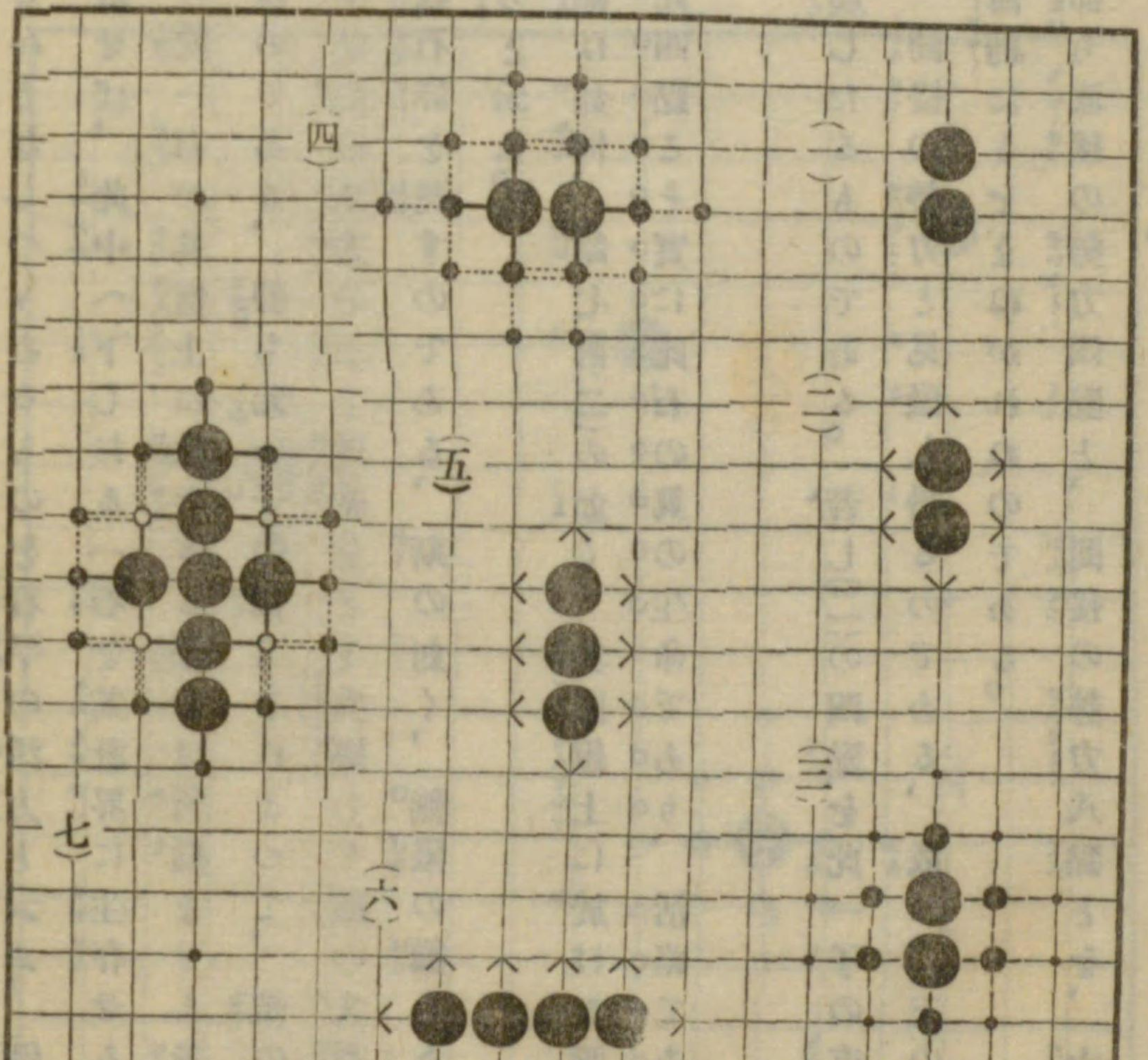
因つて益々發展し愈々活躍せんとなしつゝあるものを着手の活力と云ふ、例へば盤上を假りに一の社界と見做せば、此中へ下したる一石を其社界に生存せる一人と見做し得るのである、故に此一石が其盤上に生存する限りは何處までも發展せしめ且活躍せしめねばならぬのである、卽ち此一子の働らきによつて、敵の眼を奪ふ主石ともなり、又此一子は他の味方の石と連絡をとり共同して敵の大石を殺さんと種々策を施し、まゝ殺石罪を犯すのである、斯の如く、無限の働らきを爲す石の力を稱して着手の活力と云ふ。

然らば此石の第一步の出發點は如何、第七圖(二)の如く、其直線上に於ける四方四點より外に無いのである、此四點こそ實に此石の眞の生命であり、活路であり且根本の勢力である。

(三)は、此四點より猶一層發展したるものである。若し(二)の四點を此一子の直接の勢力とすれば、(三)の八點は、間接の勢力と見做し得るのである、故に、(三)の八點は(二)の四點に比し其勢力は薄弱たるをまぬがれぬのである。

(四)は、此一子の有する勢力卽ち直接の勢力四點と、間接の勢力八點とを、大小の點を以て其範圍を現したるものである。

然らば圖中(一)の如く黑の石が二目相接續せし時の其勢力範圍如何此二子の有する活力は、(二)に現はしたる如く六つの勢力を有す、而して一見不思議に思はるゝ點は前圖一子の場合は、四つの直接勢力を有するも二子合する時は六つの活力より有し無いと云ふ事であるが之れは、二子が相密接して居る爲めに、此接して居る方面の相互の活力が相殺さるゝからである、



入門　第八圖

其代り、此二子は、全く一個の石となり六つの勢力を以て敵に當る事が出來るのである。

(三)及び(四)は、此二子の直接及び間接の勢力範圍を大小の點を以て現はしたものにして、前の一子の時と全く同じ理である。

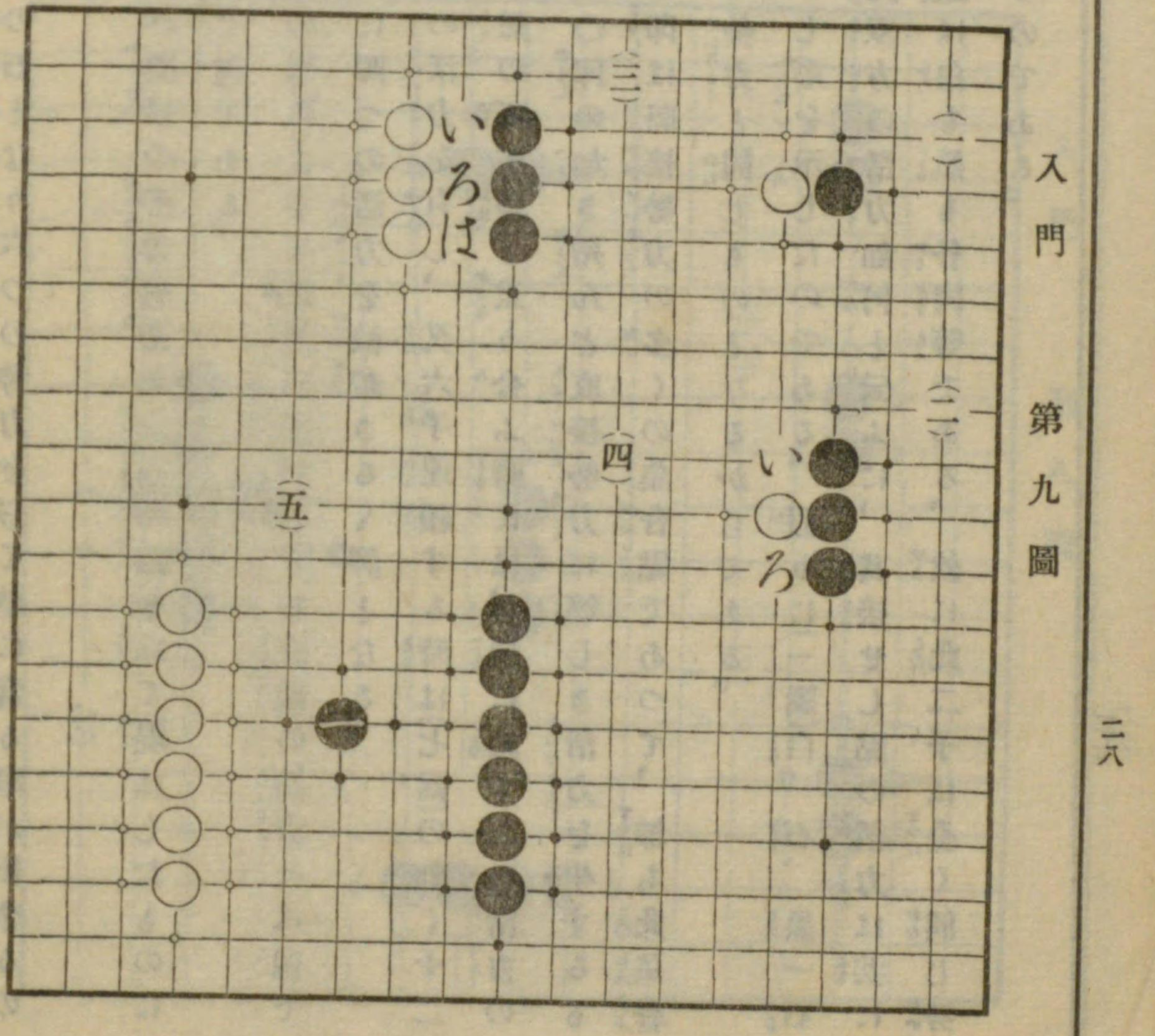
次に(五)の時は如何、之亦前述の理によつて此黑三子の有する直接の活力は八個である、故に三子合したるが爲に四つの活力を減殺さるゝ譯となる。

次に、四子連續する時は十個の活力を有し、又六子連續する時は(七圖)の如く十二の活力を有す、然し(七)の如く黑の石が多く重り合ふ時には、單に此十二の活力のみに止まらず是れに關連して〇印の如き殆んど直接勢力に等しき活力を生ずるものである、何となれば、此〇印は間接勢力の多くの集合點であつて、卽ち此集合點を合する時は殆んど直接の勢力と同じものとなるからである。

扨て第九圖は敵味方相接觸せし形を示したのである、假りに(一圖)白一石、黑一石相接觸せし場合に、於ける此双方の活力如何と云ふに、其接せし點の活力は共に殺了せられ餘す處の他の三點は白も黑も各同等である、故に此二子は全く同じ勢力を有するものと見做し得るのである。

然るに(二圖)、黒三子に對する白一子の場合は、黒は五の勢力を有し白は一の勢力より有しないのである、(い及びろの點は、黒も白も共通である)斯の如く黒白の間に勢力の相違あるときは到底白は黒に敵し難いのである。

(三圖)、白黒共に三石づゝであるから、其勢力も亦共に同等にして、いろはの三點は(二圖)いろの如く、白黒共通である從つて此双方の有する活力は各五



入門　第九圖

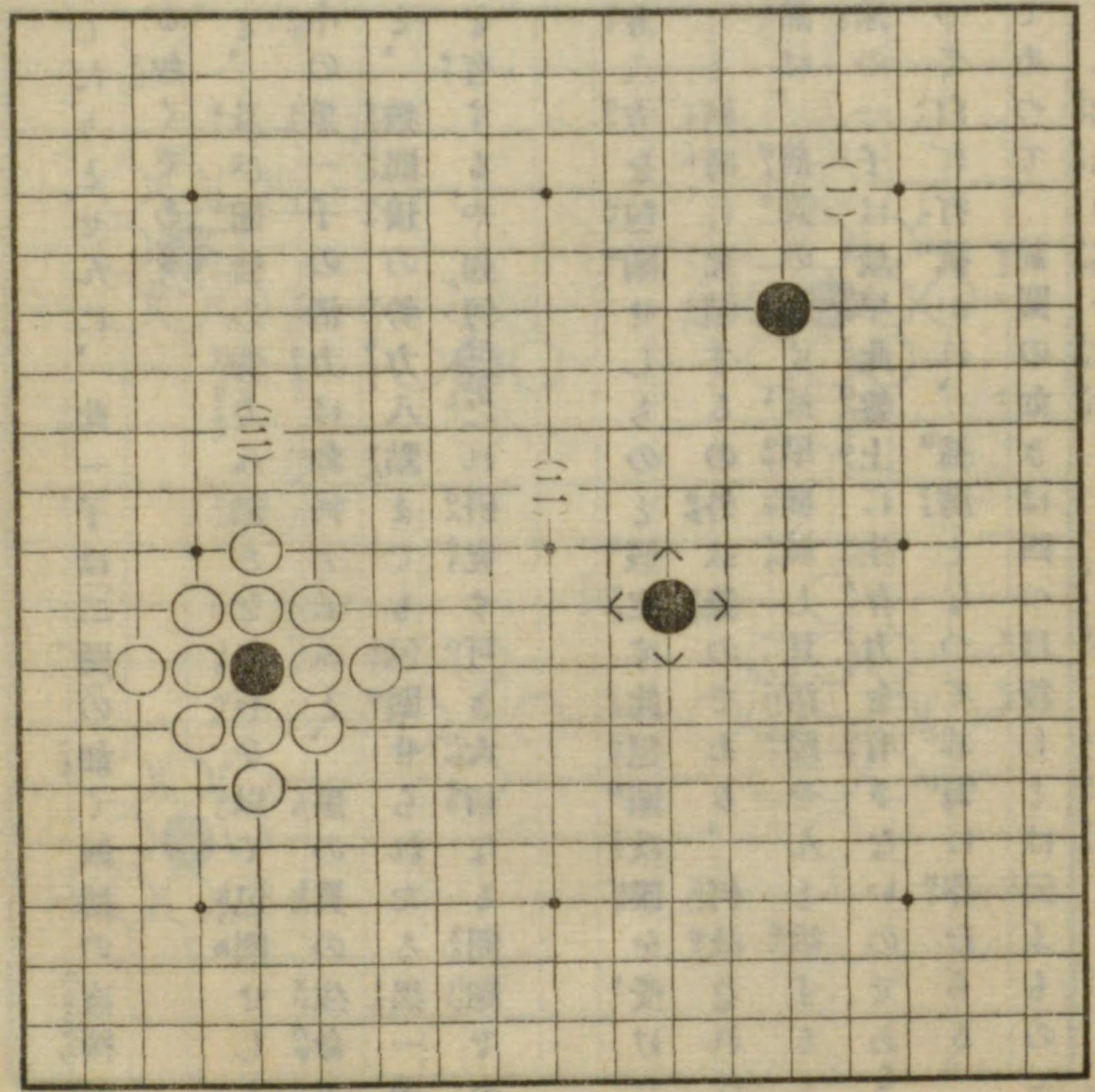
個づゝである。

然らば、(四圖)の如く互に遠く相隔りて各五子づゝ相對せし場合に於ては、此間餘りに廣きが故に未だ何れの勢力範圍にも屬しないのである。

故に黒若し此際先んじて一と一着を下したとすれば、此間は全く黒の勢力範圍內となるのである。

四つ目殺し(其一)

四つ目殺しは石提りに於ける最も初步であり、又



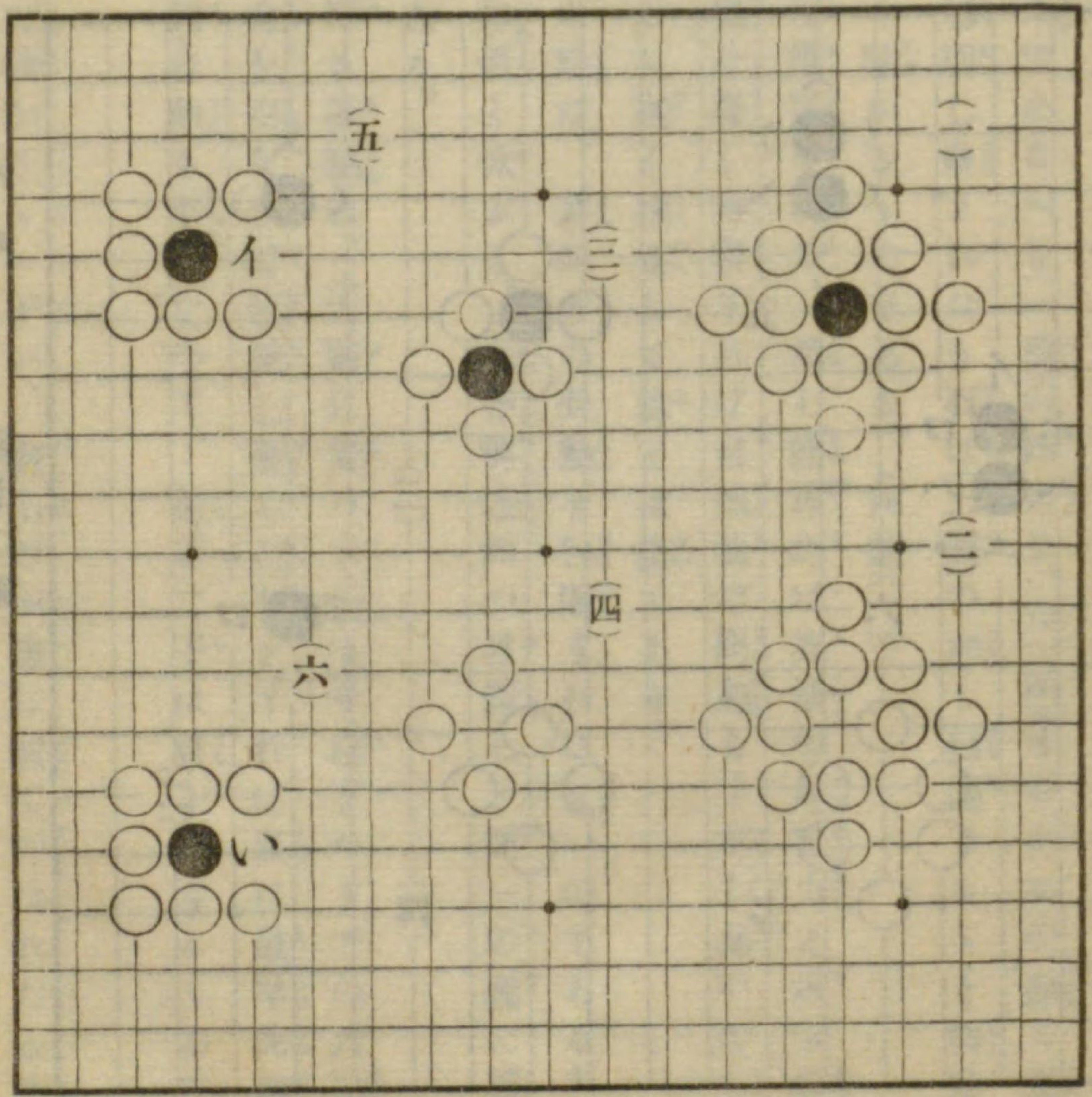
入門　第十圖

實に死活の根本である。

第十圖(一圖)、黒假りに一と下したりとせんに、此一子は(二圖)の如く四個の直接勢力を有する事は前に説明したる如くである。(三圖)、此黒の直接の勢力四點と、及び間接の勢力八點とを白石を以て包圍せしものと假定する、此時に於ける中の黒一子の活力は如何と云ふと、黒の眞の生命であり、且活路である可き四點と、猶間接の勢力八點までも包圍せられたる黒一子は猶此盤上に生存す可き資格を有するや如何、之れ研究す可き大切なる問題である。

第十一圖(一圖)白は黒一子の四方八方を包圍せしものと假定す此包圍攻擊を受けたる中の黒一子は斯く包圍されしと同時に死滅するの外は無いのである、何故なれば斯の如く白の重圍に陷りたる黒は、前説の如く最早發展し且活躍せんと欲するも得て望み難いのである憐れ此黒の一子は最早此盤上に生存力を有さないのである。故に此黒一子は(二圖)の如くなつて白に打拔かれ、捕虜となつて碁笥に葬むらる。(三圖)は白八子を省略したる形であつて、前圖の如きは四つ目殺しとは云ふもの、實は十二子を費して居る、然るに此黒の眞の生命とする直接の出發點は四方四點

より外に無いのであるから、(三圖)の如く其四方を封鎖する白は此黒一子を殺了せんとする目的は遂行されたのである、(二圖)の如く十二子を費すも勿論無益の業とは云へないが、互に一着づゝを下す此局面上に於て、一つの石に對して左程多くの石を費やすのは策の得たものと云ひ難い故に實戰に際して敵の石を捉らんとするには、(三圖)の如く先づ其四方の封鎖に努むれ

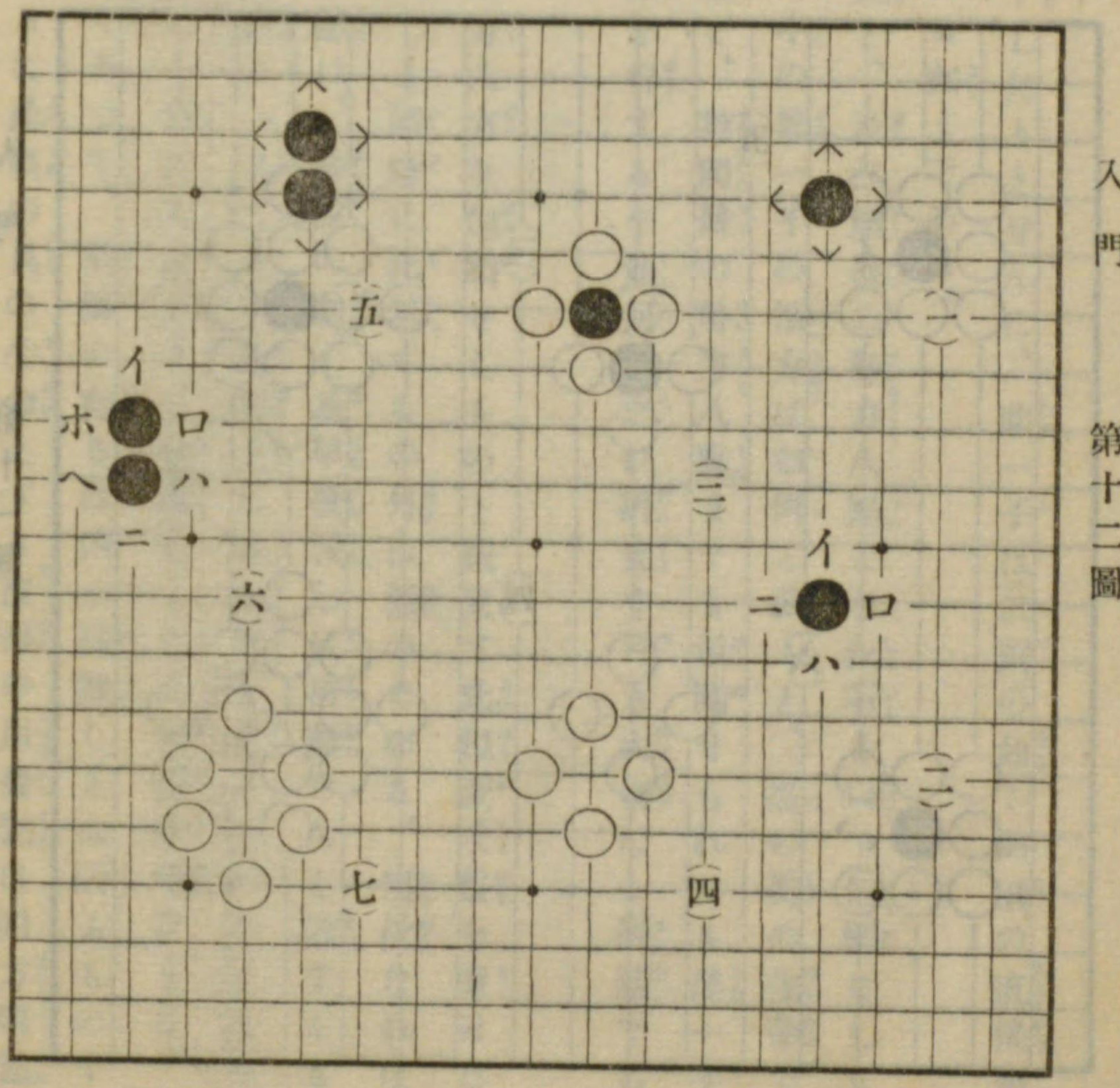


入門　第十一圖

ば宜い。

(四圖)は、(三圖)に於ける黒一子を打拔いた後の形である。

總て石を打拔かんとするについて必要なる着手は其費す石の多少によらぬものであつて、(五圖)の如く、白七子を以て黒を包圍爲せしも、猶黒はイの一點に活力を有す、故に白は此黒の一子を打拔かんとするには猶いの一着を下さなければならぬのである。(六圖)



入門　第十二圖

第十二圖更に玆に前言を繰返して云へば、畢竟敵の石を打拔かんとするには、其石の活動力であり、且眞の生命であるべき(一圖)の四方を、(二圖)(イ、ロ、ハ、ニ)の如く遮斷すれば宜いのである、卽ち包圍し盡されたる石は(三圖)の如く包圍さるゝと同時に其石は打拔かれ盤上より取り除かるゝのである。(四圖)

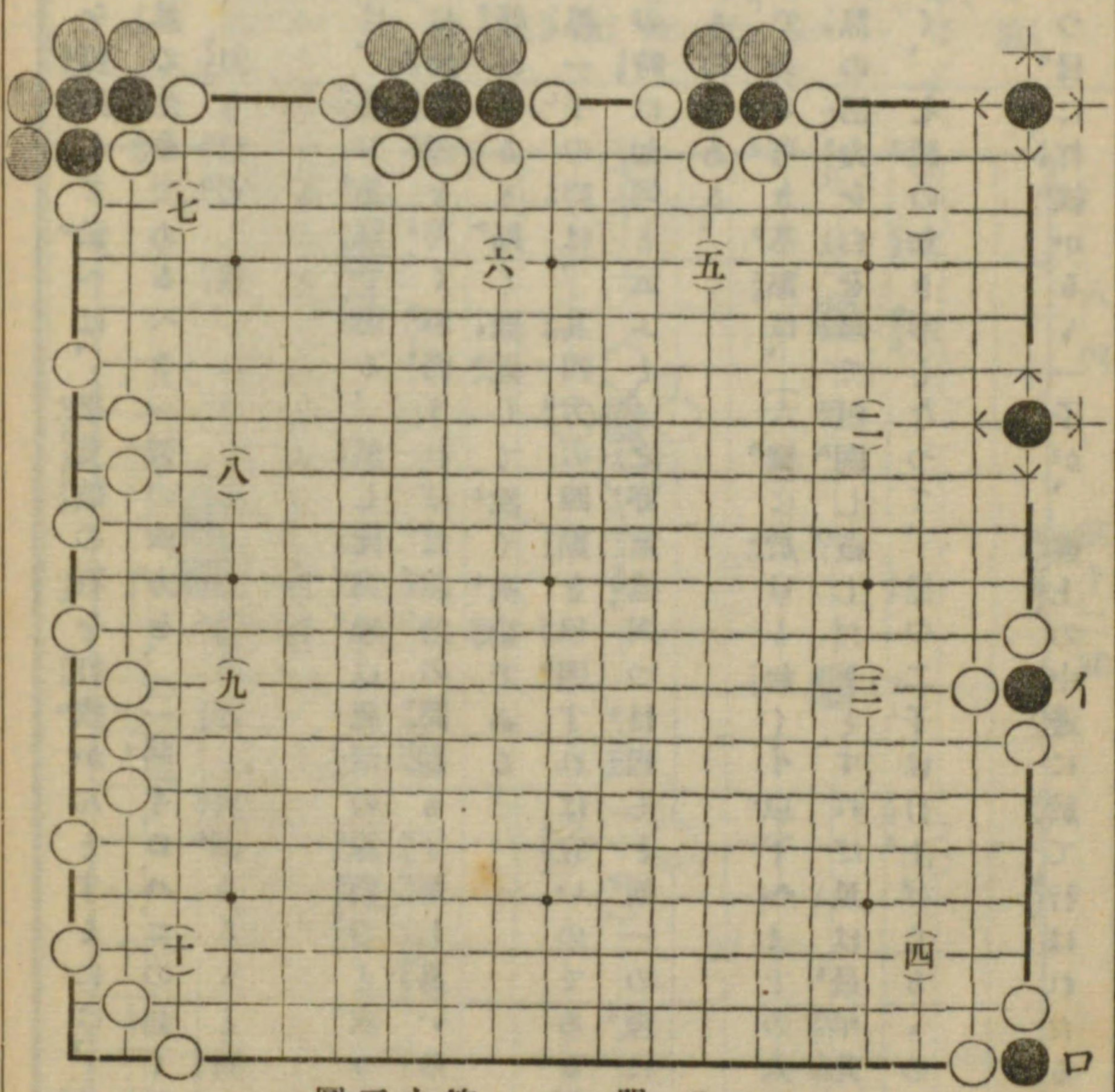
上述四つ目殺しの原理は、甚だ簡單である、然し此原理は死活の原動力と成り種種の働らきを爲すが故に此原理を善く解得すれば自然他の問題も了解し易いのであるから、些か重復の嫌ひあるも斯く繰返して說く次第である。

次に(三圖)に於ける如く黒一子の時は、其四方の四點を包圍すれば宜いのであるが、若し(五圖)の如く黒二子の時は如何と云ふと、之亦前述四つ目殺しと同一の理に因て容易に判斷を下し得るのである。

卽ち此二子直接の活力である可き基點は、(六圖)に於ける如くイ以下へまでの六點である、故に此六點の黒の活力を白を以て包圍し盡したりとすれば黒は最早此盤上に生存す可き資格無く、(七圖)の如き形となつて、黒の二子は打上げらるゝのである。

前に說明せし事は、四つ目に打拔かるゝ一子が、盤上の中邊に於て行はれたる時

の形狀である。然るに、若し之れが本圖(一)或は(二)の如く盤の最極端に行はれたる時は如何、此場合は白を以て其四方を包圍せんとするも爲し得ぬのであるから、此一子を打拔かんとするには、勢ひ盤外の假定線の力を借る必要が起るのである、卽ち此假定線上に於ける假定子の力によつて此一子を打拔くので、卽ち(三)



入門　第十三圖

及び(四圖)の如く、白三子(三圖)或は二子(四圖)を以て包圍せしとすれば、此時は白はイ及びロの假定子の力によつて此一子は其四方を包圍せしものと見做して打拔き得らるゝのである。

故に互先或は定先の手合の時に双方初めの着手を以て常に隅を占領せんとする所以は、一つは此假定線の勢力を我が有に歸せしめんとするのである。

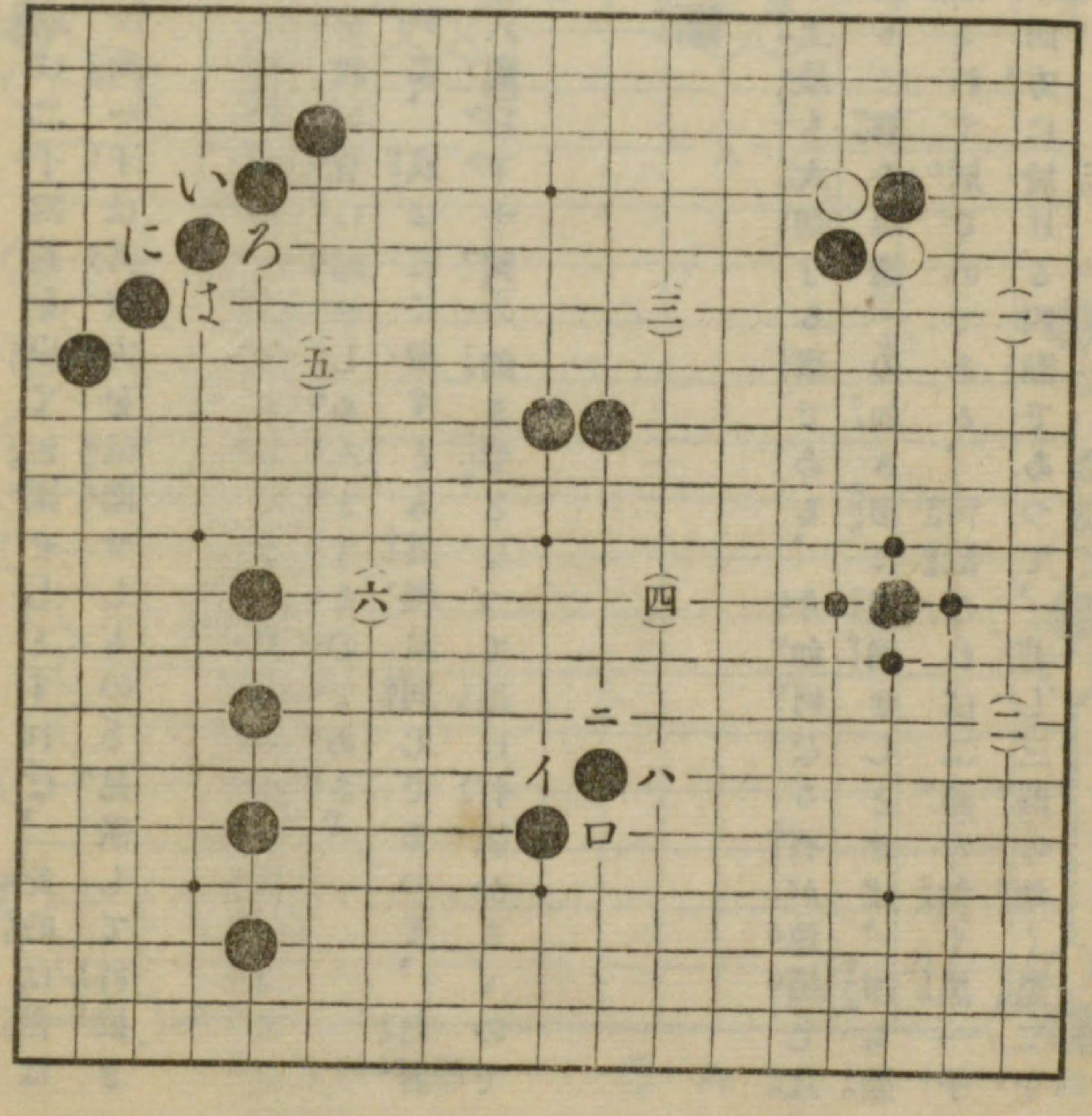
(第五圖)以下(七圖)まで、石の數が二、或は三に增すとも其理は同じであつて、白若し之れを包圍するとすれば、(八圖)以下(十圖)の如き形となつて黑は打拔かるゝのである。

石の連續と切斷

石の連續と、切斷は、策戰爭上最も大切なる事である、今如何なる石が連續し且切斷されてあるかを示せば假りに第十四圖(一)の如き形に遭遇せしとせば、卽ち黑二子と白の二子とは互に切斷されて居るのである、何故なれば(二圖)の如く黑一子の直接の勢力は、前述の如く四方に於ける四點であつて、若し(三圖)の如く黑二子が此直線上に密接して居るとすれば此二子は全く相連續して居るのである、然る

に(四)の如き形に於ては未だ全く連續せし石とは云へぬ、若し白にイ及びロと打たれた場合には、此黒二子は切斷され、猶重ねて白にハ、ニと打たれたとすれば上の黒一子は四つ目殺しの理によって打拔かるゝのである。

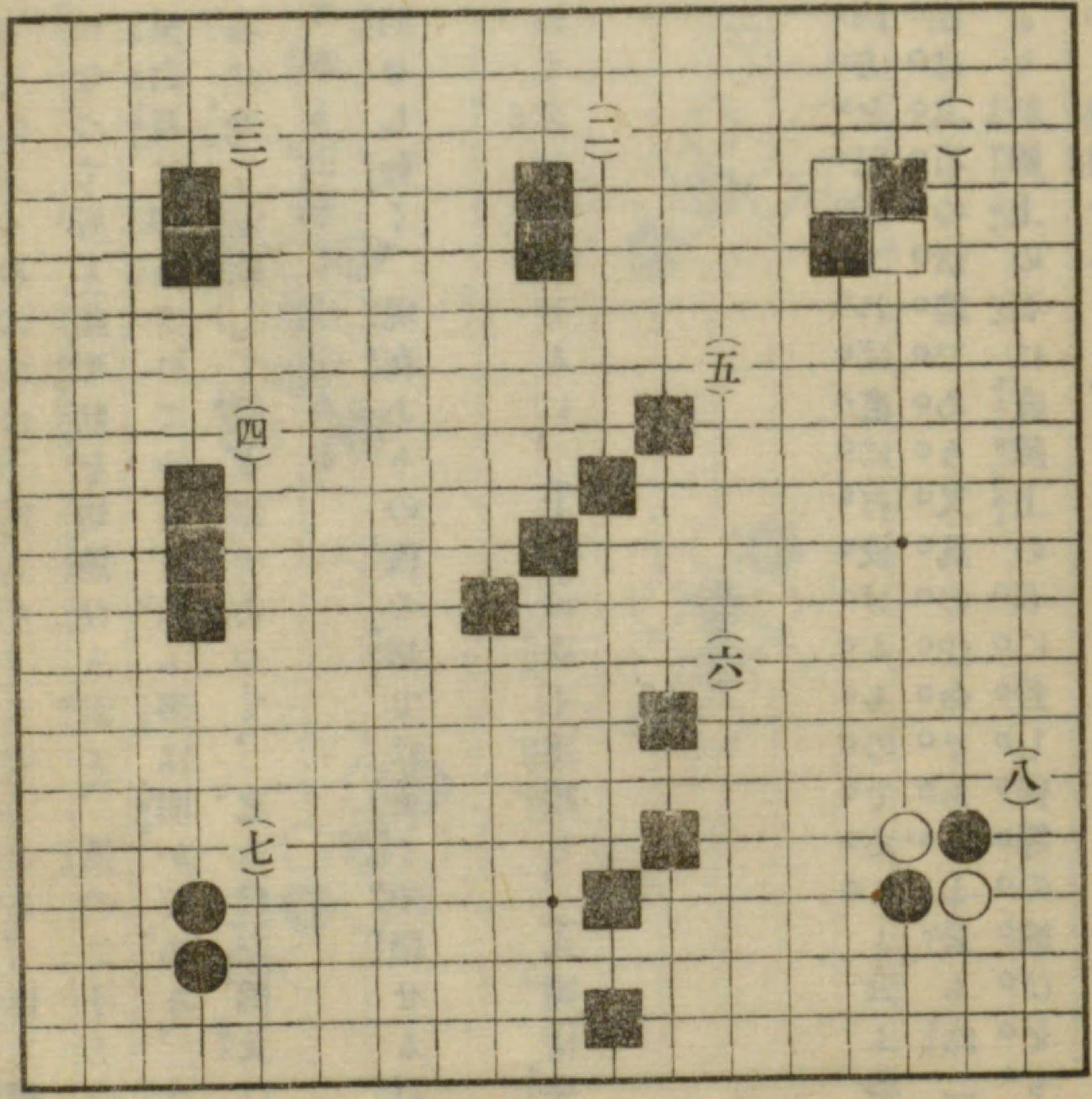
(五)及び(六)の如きも連續すべき石ではあるが此儘の形に於ては未だ連續せし石とは云へぬ、然り(五)の如きは絶對の連續では無いけれども、間接の連續



入門　第十四圖

と見做し得るのである、何故なれば、碁の法則として一時に二着の續け打を許されざる以上、(五)の如き形に於て白いに打つとすれば次は黒の手番であるから、ろと打て接續し、白又はと打てば、黒にに打て接續し得るが故に連續すべき石であると云へるのである。

石の連續及び切斷について、猶一層明瞭に説明すれば、之れが圓形の石であるから一見分りにくい



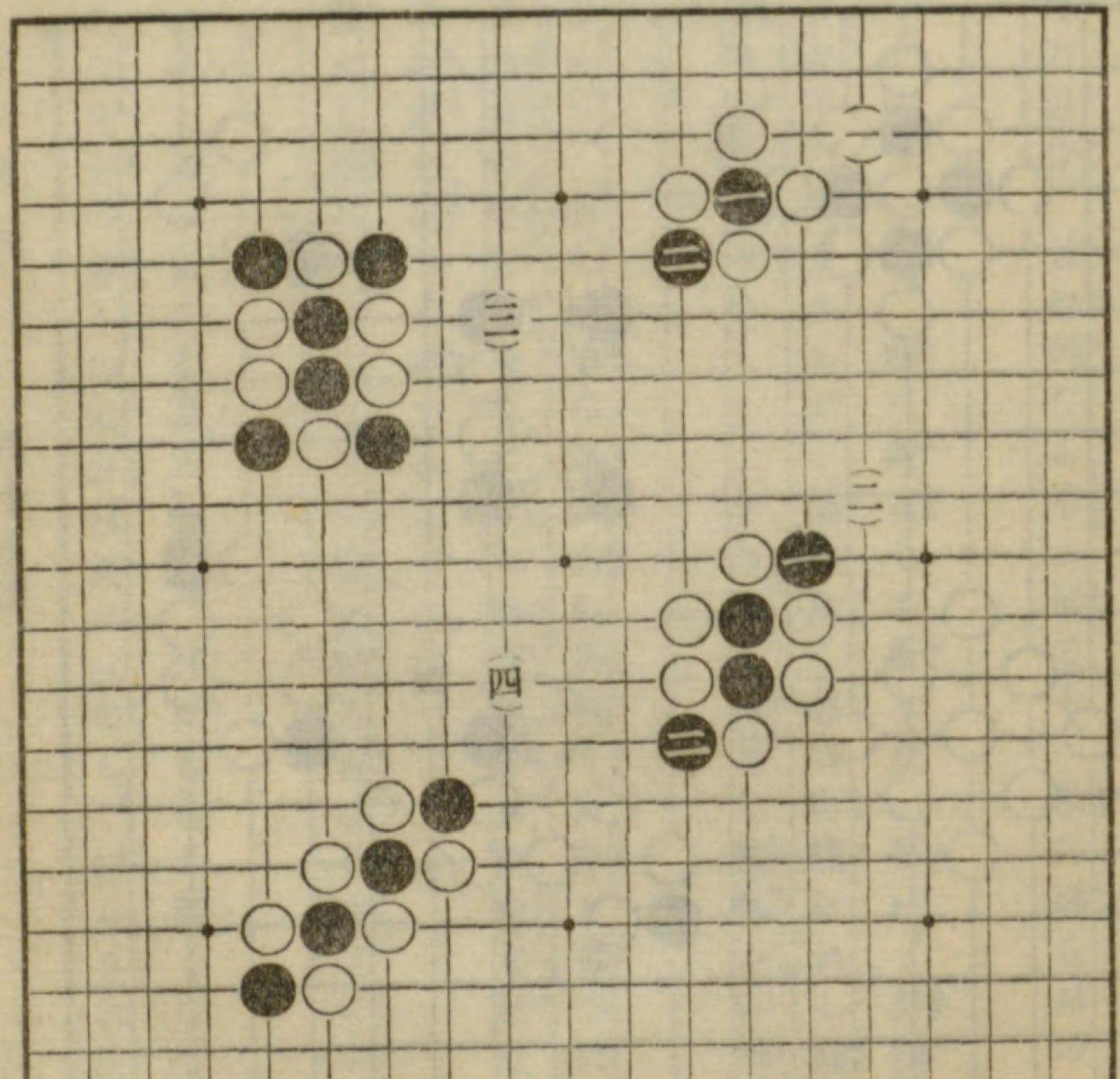
入門　第十五圖

點もあれど、若し之れを方形のものとすれば明に了解さるゝものである、即ち第十五圖(一圖)の如く互に入違になつて居る(此形狀を切違ひと云ふ)、黑の二子と白の二子との形狀は、一見して黑白互に切斷されてゐると云ふ事は明かである、次に(二圖)の如く黑直線上にある石は全く連續して居る形であつて、之れは(三圖)及び(四圖)(三子の時)の如き形と見做す事も出來るのである。
次に(五)及び(六の如きは前に說明せし如く、現在ありの儘の形では全く連續せる石とは云へぬ。
更に連續と切斷について、重ねて之を說明せんに、(七圖)は全く連續し、(八圖)は全く切斷されたる形狀である。

四つ目殺し（其二）

前に述べし、「四つ目殺しは其四方を包圍すれば直に打拔けるものである」と云ふ事と今一つは、直線上の四方四點は其石の活路であり又眞の生命であると云ふ此二つに就て述べたのであるが是より斜線上の石は直線上の石に對し何等の補ひをもなさぬと云ふことを實例によつて說明せんとす。

即ち假りに(一圖)について見るに、黑**一**を白を以て包圍せしとせんに**二**の黑は**一**に對して何等の補ひをも爲さぬのであつて此**一**の一子は直に白に提り去らるゝのである。
次に(二)も亦同じく、**一**と**二**の黑は中央の黑二子とは連絡し居らざる故に斯く包圍せらるゝと同時に中の黑二子は死滅し打拔かるゝのである。
(三)及び(四)も同じく、中の黑は外側の黑石とは何等

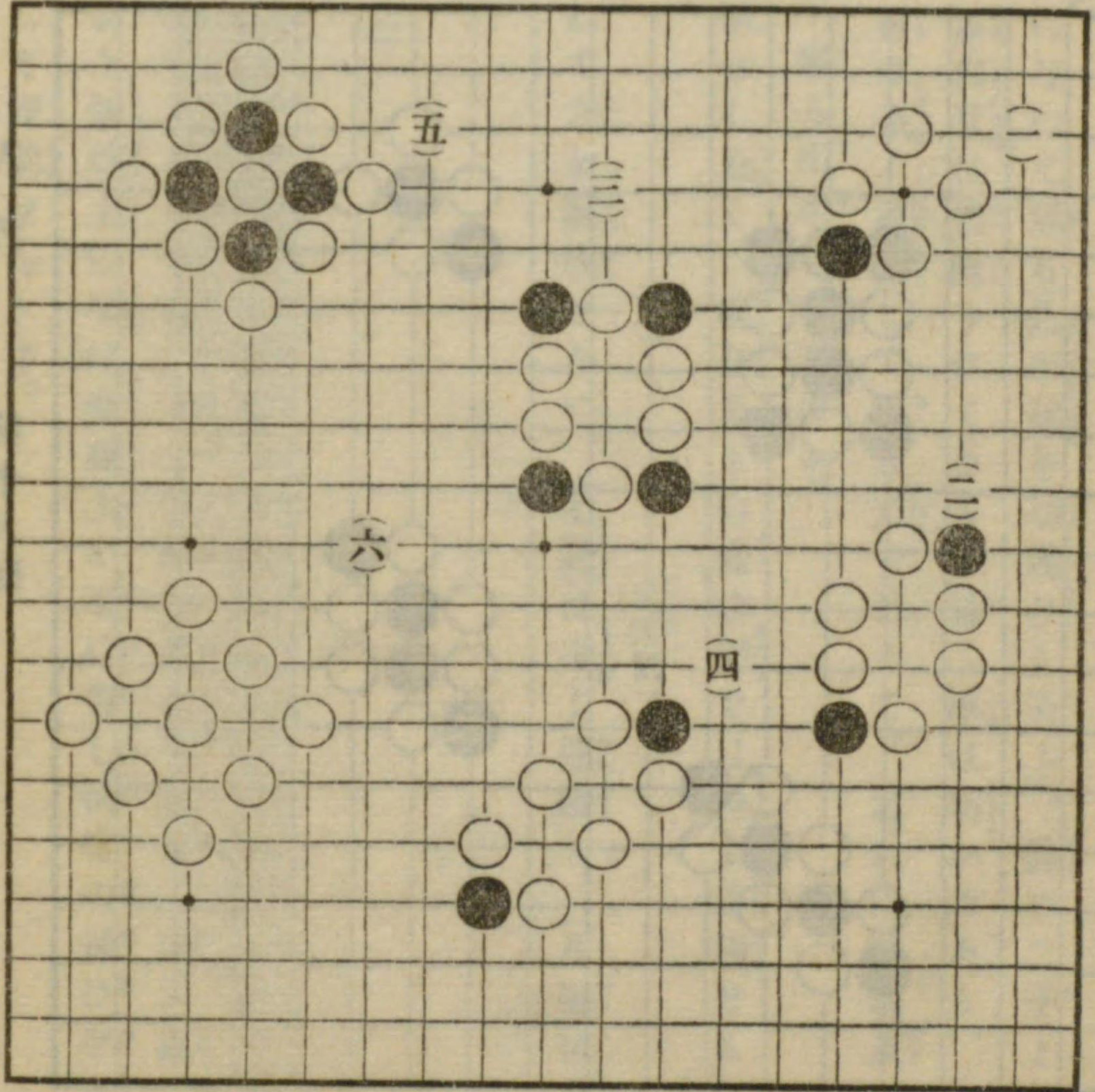


入門　第十六圖

の關係も無く白に提去らるゝので斯く外側に於ける石の多少は、其打拔かるゝ石とは、少しの關係も無く白に其四方を包圍さるゝと同時に直に打拔かるゝものである。

第十七圖(一圖)より(四圖)までは、前圖の提跡を示したのである。

次に(五圖)の如きも亦同じく、四つ目殺しの原理に從つて、此四つの黑は打拔かれ、(六圖の如き形となる、斯の如く、假令其



入門　第十七圖

石は如何に多數となるも、石は其四方を包圍さるれば其形の如何によらず必ず打拔かるゝもの、との理は、何時の場合、又如何なる形に於ても、常に變らぬのである。

猶こゝに、石を提ると提らるゝとについて、特に附言して置きたい事は、右圖(三)の如き場合に初めは白と黑と各六子づゝであるが、圖の如く白に打拔かれし跡の形を見る時は、白六子に對し黑四子となりこゝに二つの差を生じて其勢力の消長に大なる隔を生じて來るのである。

今假りに他の例によつて說明せんに、若し味方の軍が敵の兵粮十日分を奪つたとするに、此時の兩軍の差は敵は十日の命を縮めるに反し味方は十日の命を延ばす事となり、つまりこゝに廿日の相違を生ずる譯である。

石の死活も亦之れと同じく、提ると提らるゝとは、丁度一倍の違ひを來すのである。

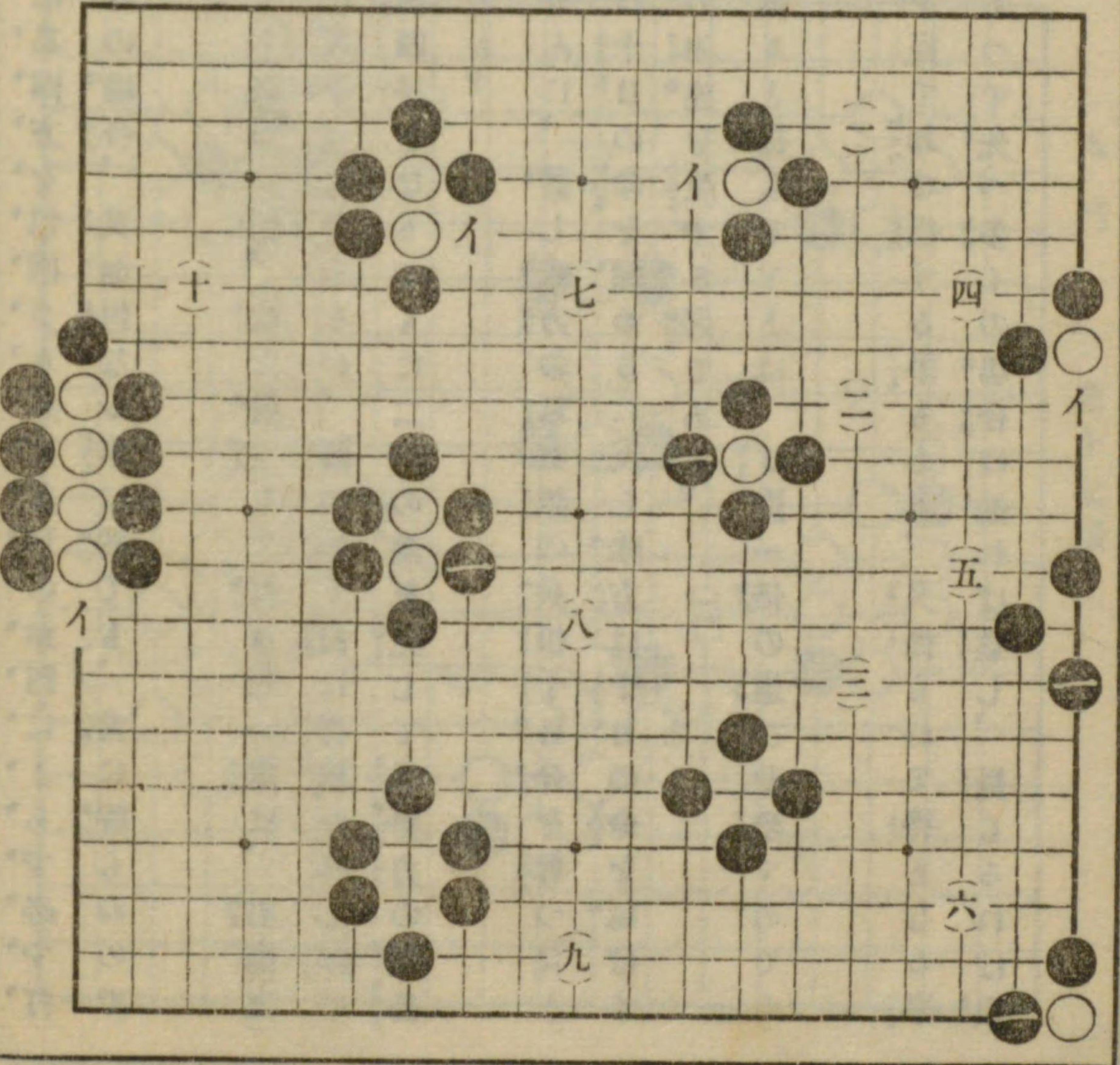
然し或る特別の場合には、石を提て却て損する事もあり、又提られて得となる事もあるが、之等は極めて稀であつて先づ多くの場合は提れば益し、提らるれば損と思へば宜いのである。

提りの部

前説に於ては專ら四つ目殺しの原理、即ち四つ目殺しは、如何なる形に於て打拔けるものであるかと云ふ、其有りの儘の狀態について説明したのであるが之よりは提りの部即ち將に提らんとする形について説明せんとす。

今(一圖)に於て中にある白の一目は、既に其三方を黒に包圍せられ、只僅にイの一點のみ、餘す故に

入門 第十八圖



若し黒此要點に(二)の如く一と打つたとすれば、中の白は全く活動す可き力を奪はれ、(三)の如き形となつて白の一子は提去らるゝの止む無きに至るのである。

(四)も亦同じく、白一子の活路は三點より無い、然るに、此白一子に對して黒は既に其二方を包圍す、故に黒次に、イと下せば(五)の如き形となつて打拔かるゝのである、(六)は隅の最も極端にあるから黒は二つの石を以て、中の一目を打拔き、(七)(八)、(九)も亦(一)以下と同じく、白の活路六つの内五つは、既に包圍されて居るから白の唯一の活路であるイの點を黒を以て封鎖すれば、(九)の如き形となつて白の二子は打拔かるゝのである。

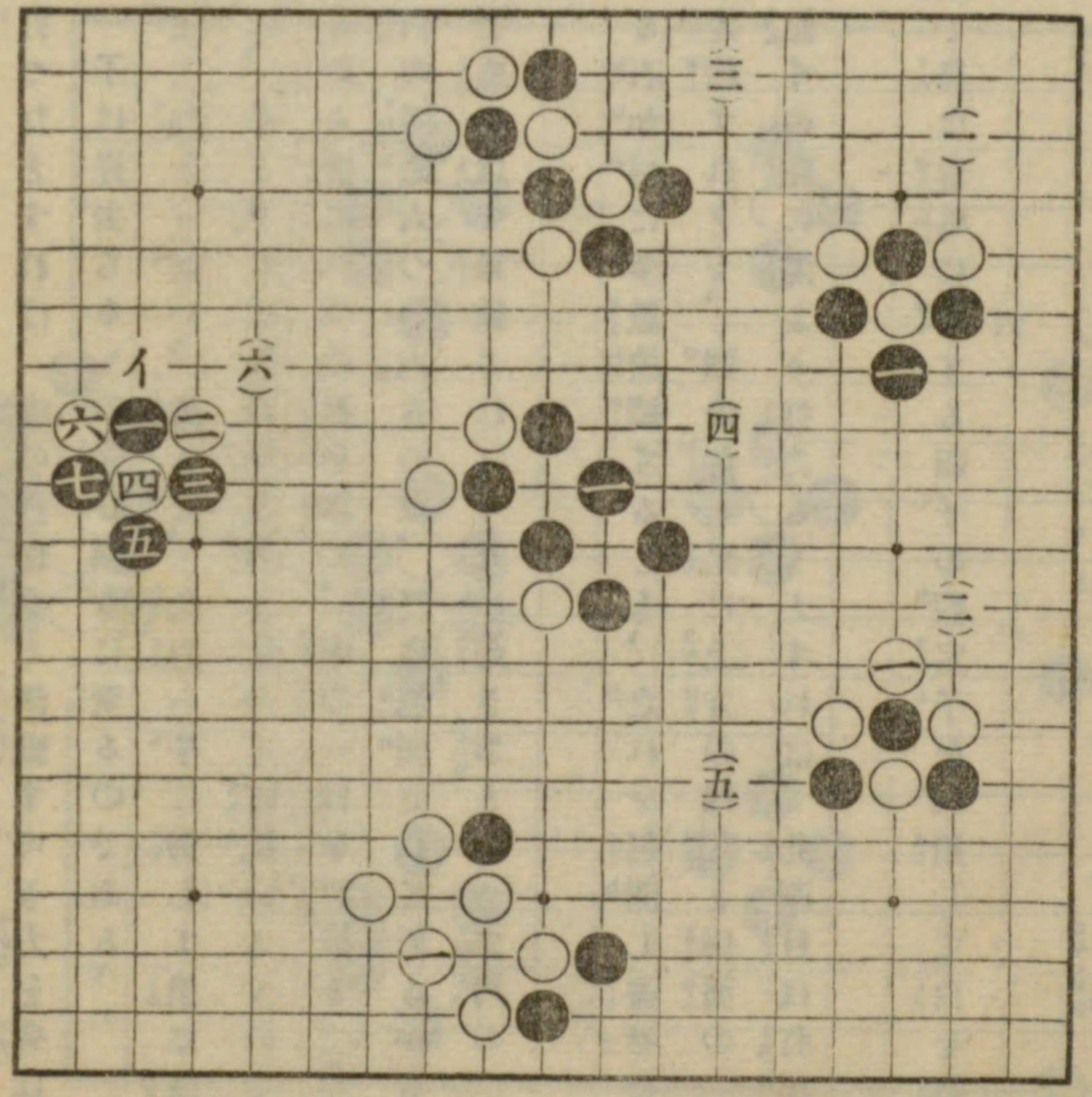
總て提りは、其打拔かんとする石如何に多數連續するとも、之れを包圍し盡せば宜いのである、(十圖)白は四個連續すれども、圖の如く黒に上方の四點と側面の一端を封鎖せられ猶餘す處の一點イの點に黒より打たるゝとすれば、此四目は打拔かるゝのである。

然し此形に於ては、前圖の如く黒は盤外に有する四子の假定子を利用して白を打拔くのである。

第十九圖(一圖)、黒若一と下せば、白の一子は打拔く事が出來るのみならず、兩側の白

二子は全く孤立の石となる然るに若し(二)の如く白先に(一)と下せば前と全く反對の形狀となり黑の二つは孤立の狀態である。

(三)(四)(五圖)も亦同じであつて、(三)に於て黑先とすれば(四圖)の如く白の二子を一時に打拔き又白若し先手とすれば(五圖)の如く黑の二子を打拔くのである、卽ち斯の如き(四)と(五)とを比較すれば、只一着の前後に依つて、斯も甚しき相違を來すのである。



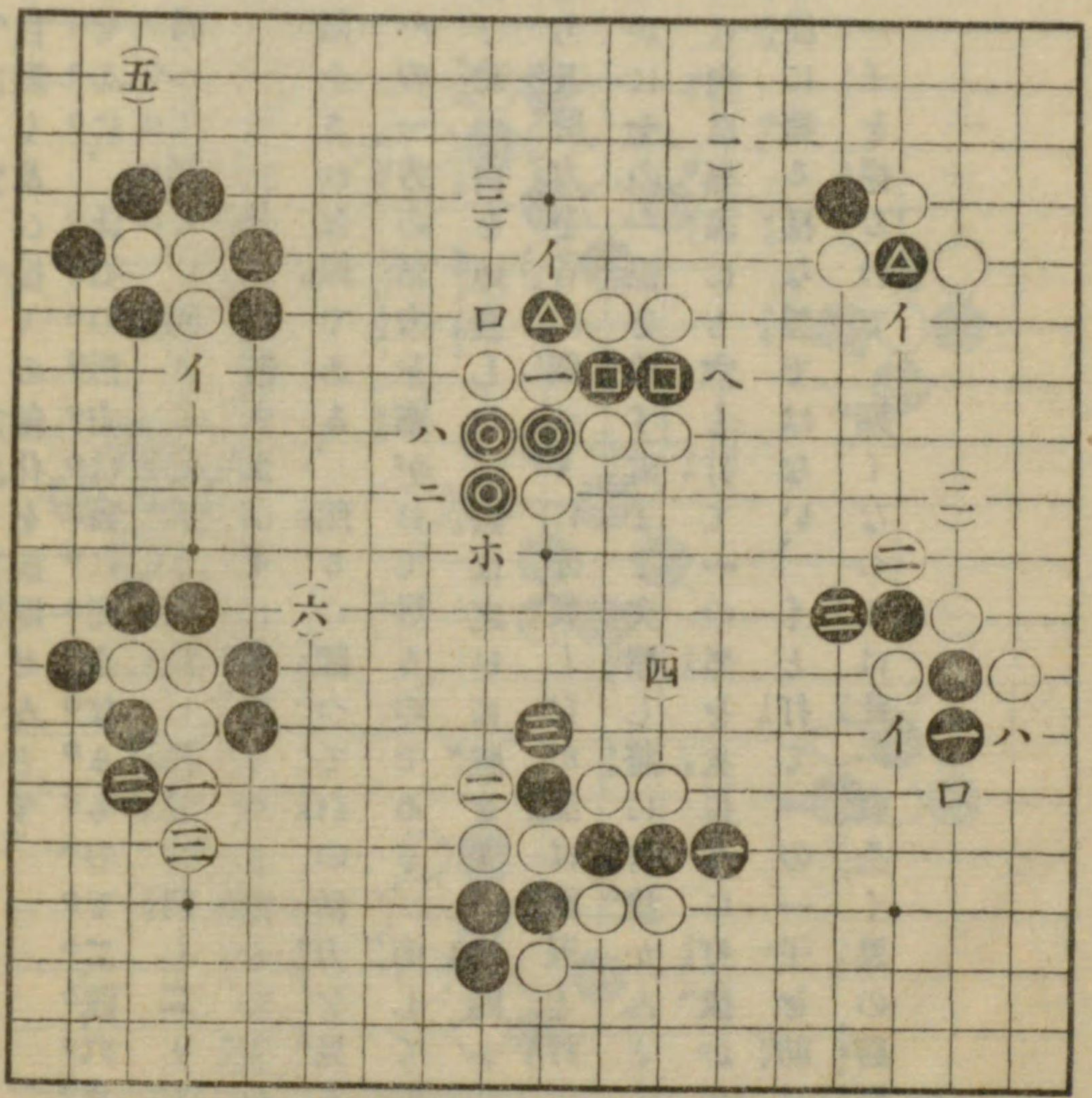
入門　第十九圖

(六圖)次は實戰の狀態にて四つ目殺し及び提りの變化を說明せんとす。

先づ、一着黑一と下したりとせんに、此石の活力は實に完全なるもので二、四、六及びイの四方に發展す可き力を持つて居る、然るに白若し此時、此黑に對し二と攻擊を加へたとする、斯の如くなつては黑は二、四、六及びイに發展す可き活力の其一を白に二と打たれたる爲めに阻止された譯である、然るに飜つて白の活力を見るに之亦黑を攻擊せし代りに、一の一方の活力を塞がれて居るのである、而して黑は此際援兵をして三と打て出で却て白を逆襲した、白は之れに臆せず、猶四と切違ひ、黑の一と三の連絡を斷ち其勢力を各二個づゝに分裂したが黑は猶五と打て四の白の活路三方を包圍し僅かに七の一點を除す處まで突擊し將に打拔かんとし陣形を整へて肉迫した、然るに白は無謀にも六と打て一の黑を次にイに打拔かんと試みたのであるが、斯る手段に乘る樣な黑ではない、イと打て一の一子を助ける以前に七と打ち、四の白の一子を提るので、斯くなつては此一戰全く黑の勝利に歸したのである。

逃及び粘

前圖迄は四つ目打拔の狀態幷に將に提らんとする形について說明したのであるが、本圖よりは逃及び粘についての說明に移らんとす、今(一圖)の如く黑△印の一子は白に活路三點を阻止され殘す處は只イの一點のみとなつて居る、故に黑は此際此一目を活んとするには(二圖)の如く黑一と連絡をとつて行び出す一路あるのみである、偖斯くの如くなつて黑の形を觀るに、黑



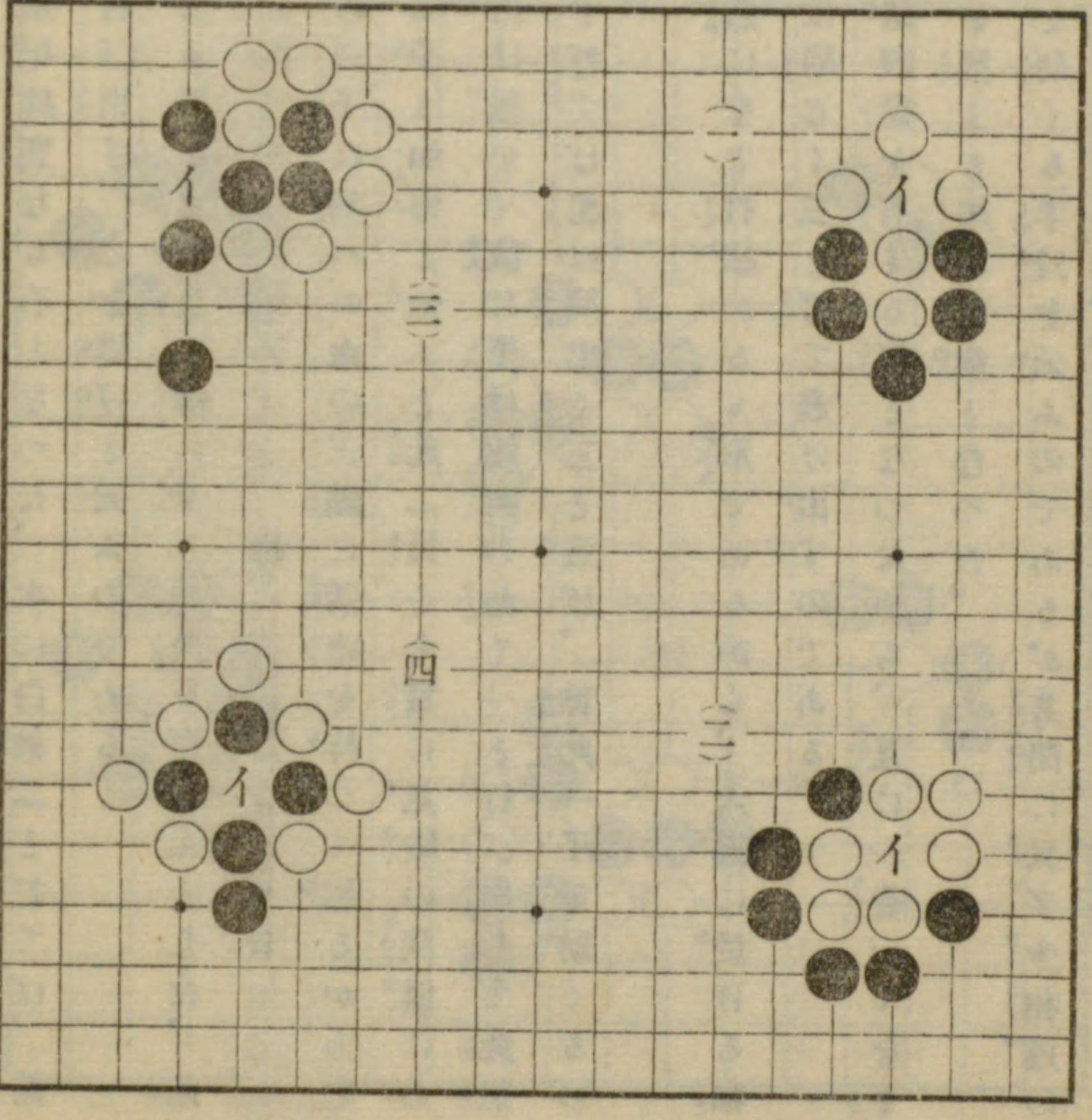
入門　第二十圖

はイ、ロ、ハの三點に活力を持ち最早確實なる石となつた、次に白猶二と打てば、黑は矢張り同じ理によつて三と行び出す、之を逃げと云ふのである。(三圖)、白一と、黑の接合點である可き重要なる處に下して黑を提らんとした、此時に當つて黑は何れの石を逃げ出す可きかと云ふと、△の一子はまだイ、ロの二點に活力を以て居る、次に◎印の三子は猶ハ、ニ、ホの三點に活路を持つて居るから之も大丈夫である、然らば□の二子は如何と云ふと此二目こそ實に危險の狀態にあるもので、只への一點より活路は無い、故に黑は(四圖)の如く・と行び出して此黑を助くるので、白若し此時二と打てば黑は同じく三と逃げ、猶此一子を助くるのである。

(五圖)、白の三子は今一手にて黑にイと打拔かるゝ形であるから、(六圖)に於ける如く白一と逃げ、黑猶二の時白は同じく三と打て逃げ出すのである。斯の如くなつては白は最早活路四點を有する事となつたから、互に一着づゝを下す局面上に於ては黑は到底之を捕ふる事不可能となつた。粘、粘とは逃と同じく共に石を助くる手段を云ふのであるが其間に又多少相違の點もある、卽ち逃は我石の活路を二、三、四と漸次增し敵に打拔かれぬ樣補ふのであ

るが、粘は之れと異つて我石の活路を增すと云ふよりは將に提られんとする石を堅固なる味方に連續さするのである、故に粘は、一旦接續したる以上、强力なる石と同一のものとなつて最早提らるる憂も無いが、逃は之と異り一旦逃げ出したとするも猶四方の關係によつて何時敵に包圍されぬとも限らぬのである。
今圖によつて之を說明すれば(一圖)、白二目を强力

入門 第二十一圖

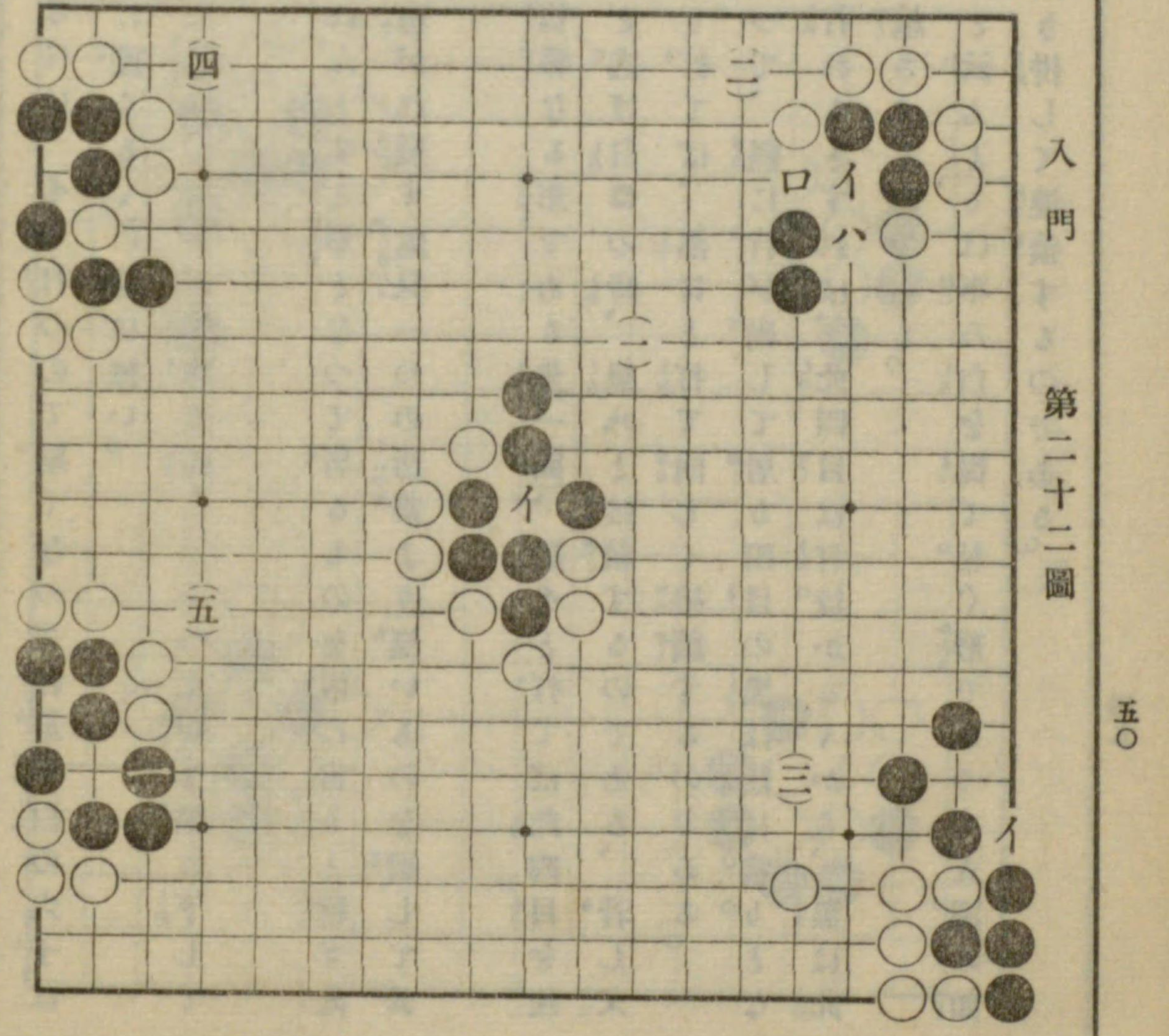


なる我白三子に接續せんとするには、**イ**と打つので斯くなつては最早白の六子は全く同一の石となつたから黑に提らるゝの憂は無い。
次に(二)(三)(四)圖の如き皆形こそ異つて居るが其理は同じであつて皆**イ**點に下して之を連續さするのである。
又(一)(二)(三)(四)の如く將に提られんとする形となつて居るものを俗に當りと稱す此當りとは、其活動力を殆んど塞がれ殘す處只一つの活路より無いものを指して云ふのである。
第廿二圖の如は粘の中では稍複雜なる形である先(一圖)、黑**イ**と打てば此四目を連續し、(二圖)の如きは黑先づ**イ**と逃げ白**ロ**の時、黑**ハ**と接續するのである、若し又白**ロ**と當てる手を、**ハ**の方より打てば、黑**ロ**と打て同じく接續するのである。
(三圖)、隅に於ける粘の形であつて、隅に伸び出して居る四目の黑は既に當りとなつて居る、故に若し白に**イ**と打れるとすれば、此四目は打拔かるゝから、黑は此要點に先づ一着を補ひ之を連續さするのである。
(四圖)、斯の如き形は只、粘ぎと云ふよりは寧ろ白を提て粘ぐ形であつて(五圖)の如く**一**と打つて白の一目を打拔き併して連續するのである。

此他粘については、猶種種樣々なる形もあるが、要するに皆前述の如きものと異形同理で、薄弱なる石を强力なる味方に接續さすと云ふに外ならぬ。

四つ目殺し、提り、逃、粘の實例

前の四つ目殺し、提、粘、逃等は、實戰上では箇々分立して出來るもので無く、常に連續し種々なる形となつて現はるゝものである、即ち當りの狀態

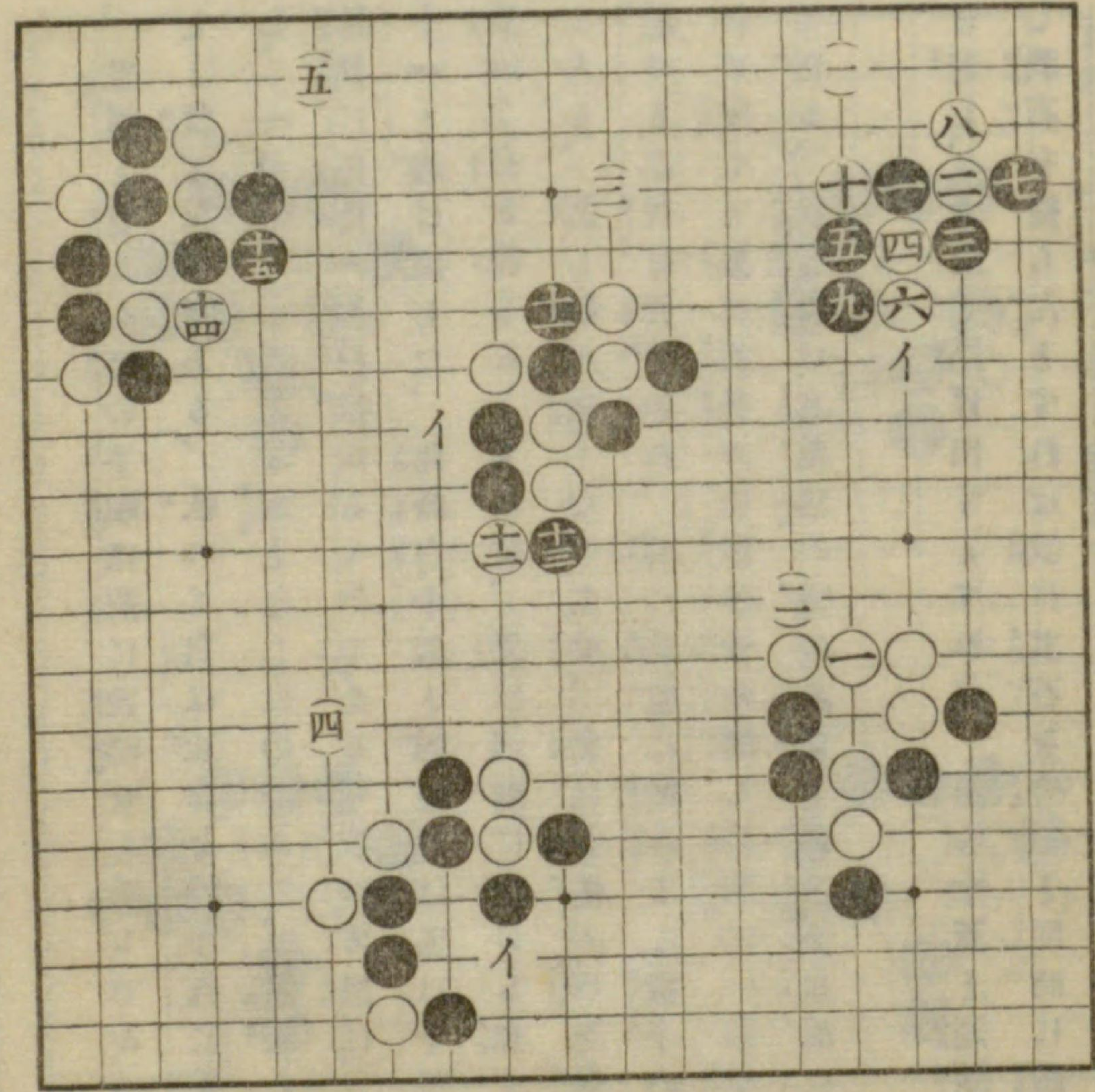


入門 第二十二圖

より四つ目打拔となり、又當りより逃げとなり、粘となる等、種々樣々に變化するものである。

第廿三圖に於ては前掲第廿圖(六)に於て其一端を說明したる實戰の狀態と并に以上四つについて一層委しく說明せんとす。

(第一圖)、黑一に對して白假りに二と密接せしとするには、(此二は盤上何れに打つも隨意であるが然し戰爭の要義として斯く密接して戰端を開きしも



入門 第二十三圖

のとす)

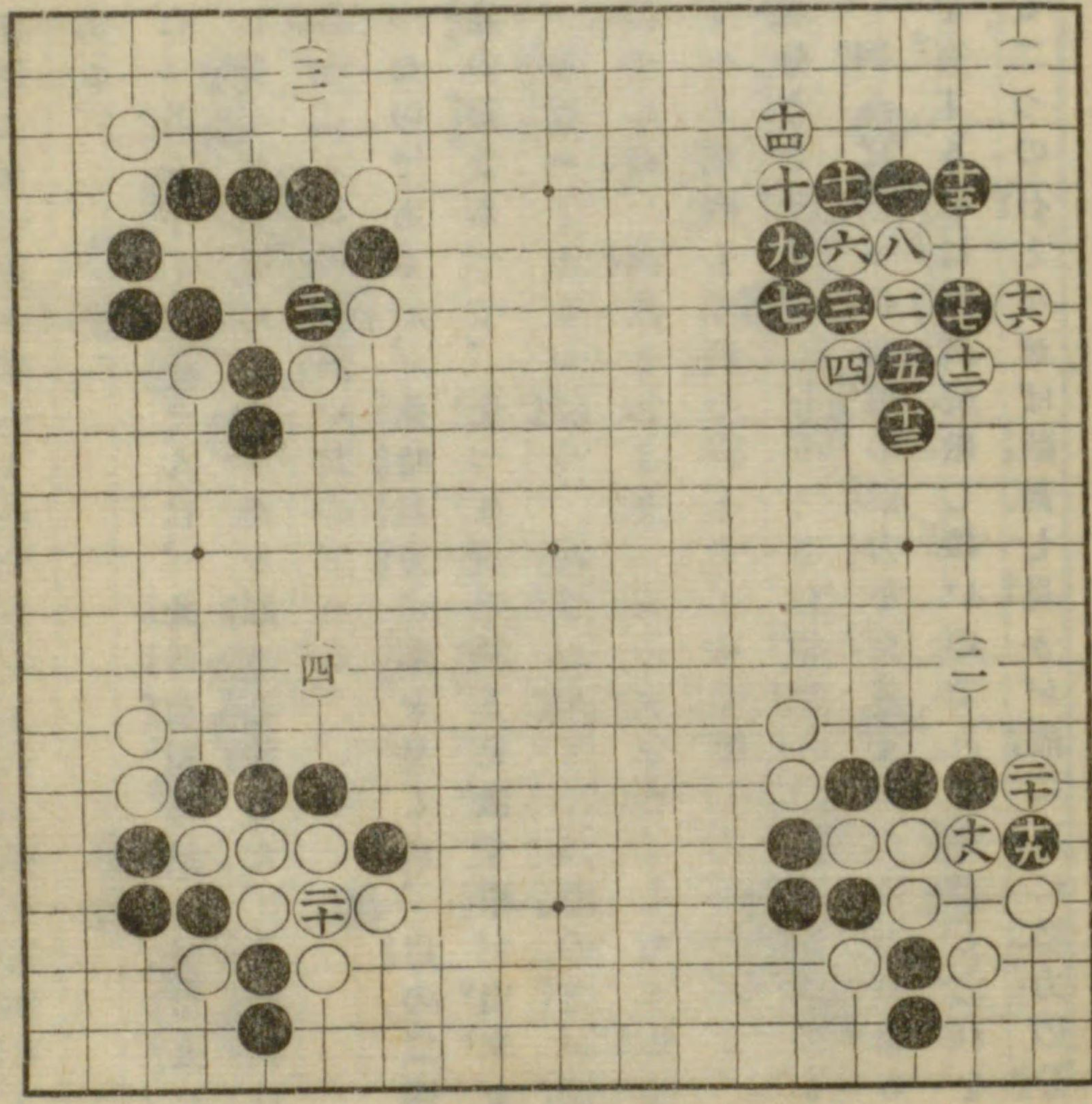
此時黒三と綽ね、白四と切り、黒五と當てし迄の手順は前に説明せし通りであつて、次に白六と逃げ、黒は猶七と當てたのである、依つて白は止むを得ず八に逃げ、黒九と押し、白十と切斷し、一の一子を當てた形となしたのである、黒若し此時イと打てば、(二圖)の如く反對に白に一を打拔かるゝのである、依つて黒は(一圖)イと綽ねる手で(三圖)の如く十一と逃げ出した、此時白十二と綽ねれば黒は十三と切斷す、白若し猶イと打て黒の二目を提らんとすれば、黒は(四圖)に於ける如くイと打て白の二目を打拔くのである、若し斯の如くなつた時、黒は其後の形を見るに白は最も重要なる地點に於ける二目を打拔かれ、爲に其他に散在する數子の白は皆孤立の石となるが、之れに反して黒は其各々の着手皆連續し其間に一の缺陷もなく申分の無い形を成して居る、故に石は其死活の差の非常である事此圖によつて見るも明瞭である。

(五圖)、白(三圖)に於けるイの手を若し、十四と逃げ出すとすれば、黒も十五と連續する、斯の如く戰爭は、敵若し我石を提らんとすれば我は其石を守ると同時に敵を逆襲す、斯く互に着々其攻守宜しきを得て以て發展するもので、其間に若し一

着の失策あれば、忽ち敵の乘ずる處となり、其形を壞らるゝのである。

本圖は實戰の狀態に形どりたる着手の目的卽ち、双方の四つ目殺しの形、或は將に提らんとする形、及び逃、粘、連續、切斷等の内其孰れを目的とする着手であるかと云ふ事を示したものである。

故に之等を研究せんとするに當つては、其着手の善惡は先づ第二として、只提りは斯の如き形、又



入門　第二十四圖

粘は斯の如き形、又切斷及び連續は斯の如き形のものであると云ふ事を實例によつて了解せらるれば宜いのである。

第二十四圖(一圖)、黑一と假りに一着を下したとせんに、此時前圖に於ては白直に一と密接したのであるが此圖に於ては白先づ二と一路を隔て布陣した、此時黑は一の力を恃みに三と烈しく密接しこゝに戰を開いたのである。

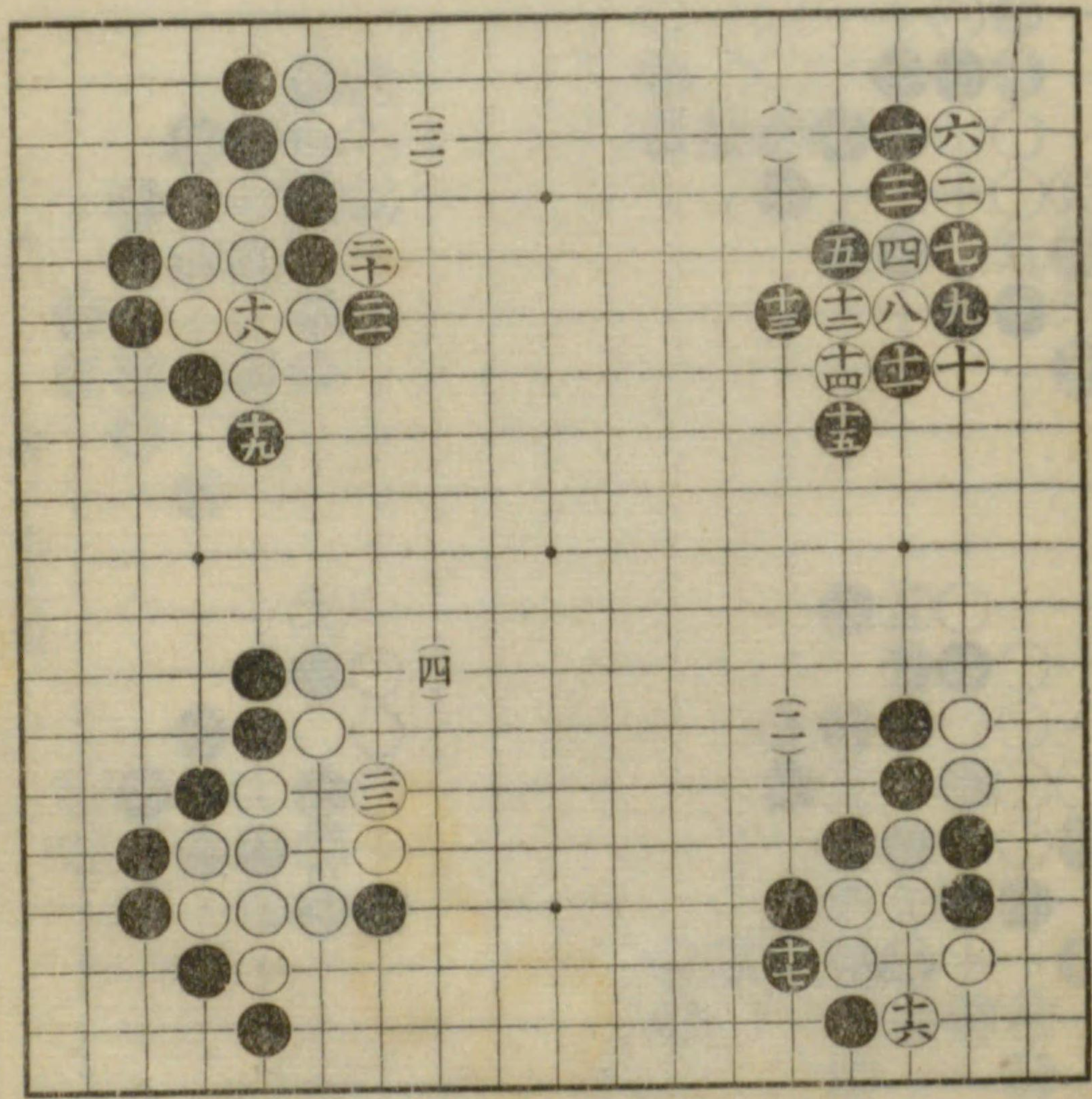
次に白四と綽ね、黑五と切違つたのであるが、此時双方の形を見るに、白の二四と黑の三五との二着は互に切違の形であつて、先づ互角の勢と見做す事が出來る然るに之れに接近せし點は猶一着黑一とあるが故に、此儘の形ちでは黑の方が優勢である、故に白六と當て、黑七の時、白八と粘ぎ先づ其一方を堅くしたり依て黑九と打ち、白十の時、黑は十一と切斷して白の六と十とを分離したのである。

總て斯の如く敵の石を切斷し其勢力を分裂せしむるときは爾後の行動に影響するが故に多くの場合有利である、例へば假りに八個の活力を有する一つの石があるとすれば、此石は十個の活力を有する石には到底敵し難いのであるが若し之れを兩斷し五個づゝの活力を有する二つの石となせば敵對し易きが故に互に勢力の分裂に努める譯である。

倘今圖について白十二と當て、黑十三に逃げ白十四に下つた時、黑も同じく十五に下り、自己の勢力を伸ばした、依て白十六と打ち、二、八、六の三子を助け、黑次に十七と打込んだとする、而して此打込とは敵に打拔かるゝと知りつゝ強いて我石を投ずるのであつて之れを捨石或は犧牲子と云ふ、「之れについては後に委しく説明す」。

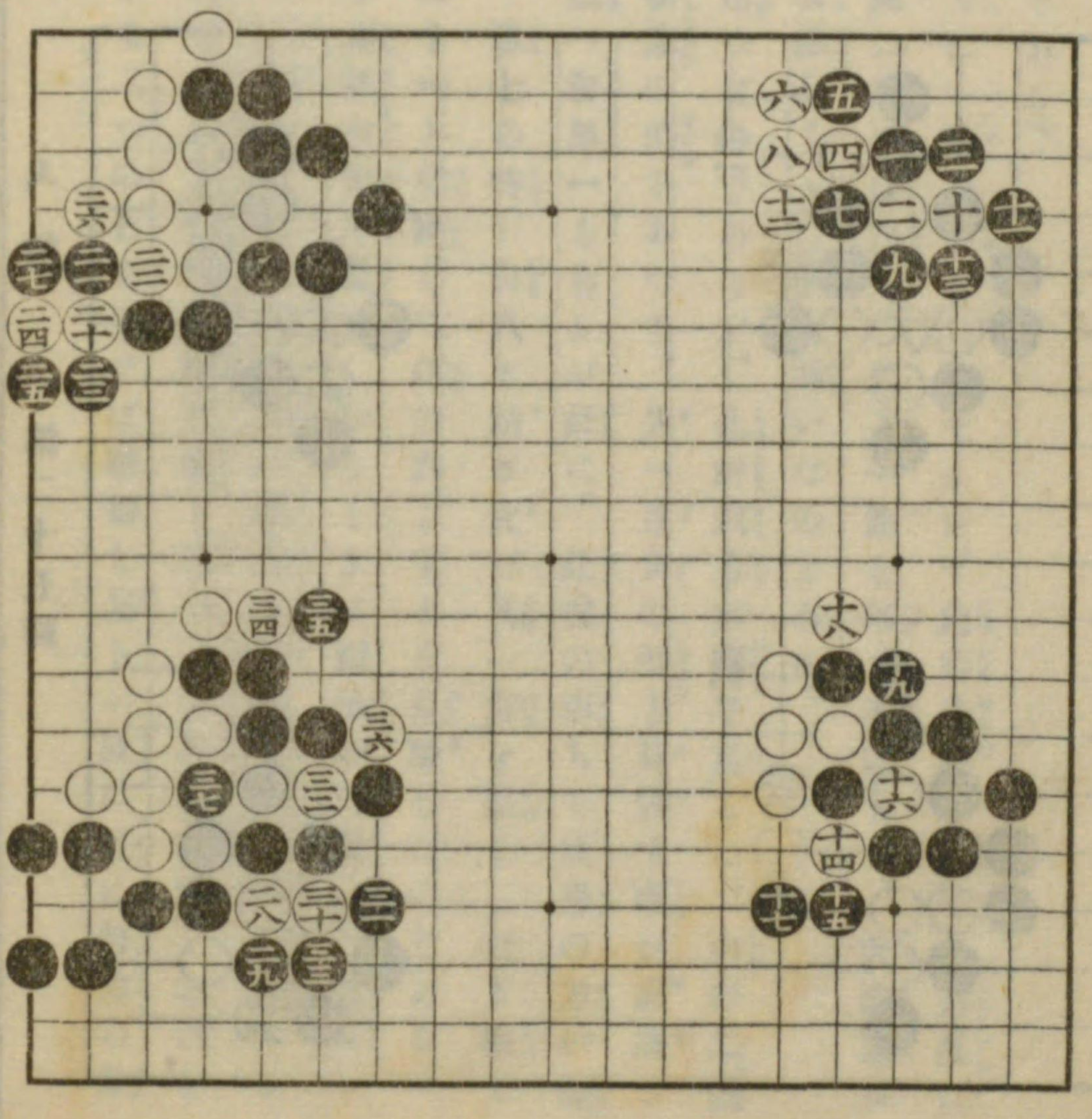
(二圖)、白依て十八と一子

入門　第二十五圖



を打拔き、黒十九の當りと打つた、扨此時に當り若し白二十と切斷するとすれば、黒は直に(三圖)の如く二一と打つて四子を打拔き、此一戰は全く黒の勝利に歸するのである。依て白は止むを得ず(四圖)の如く二十と四子を粘ぎ、初めて互角の形勢となつたのである。

第二十五圖、及び第二十六圖は、皆四つ目殺し及び提、粘の練習用として掲げたものである。讀者

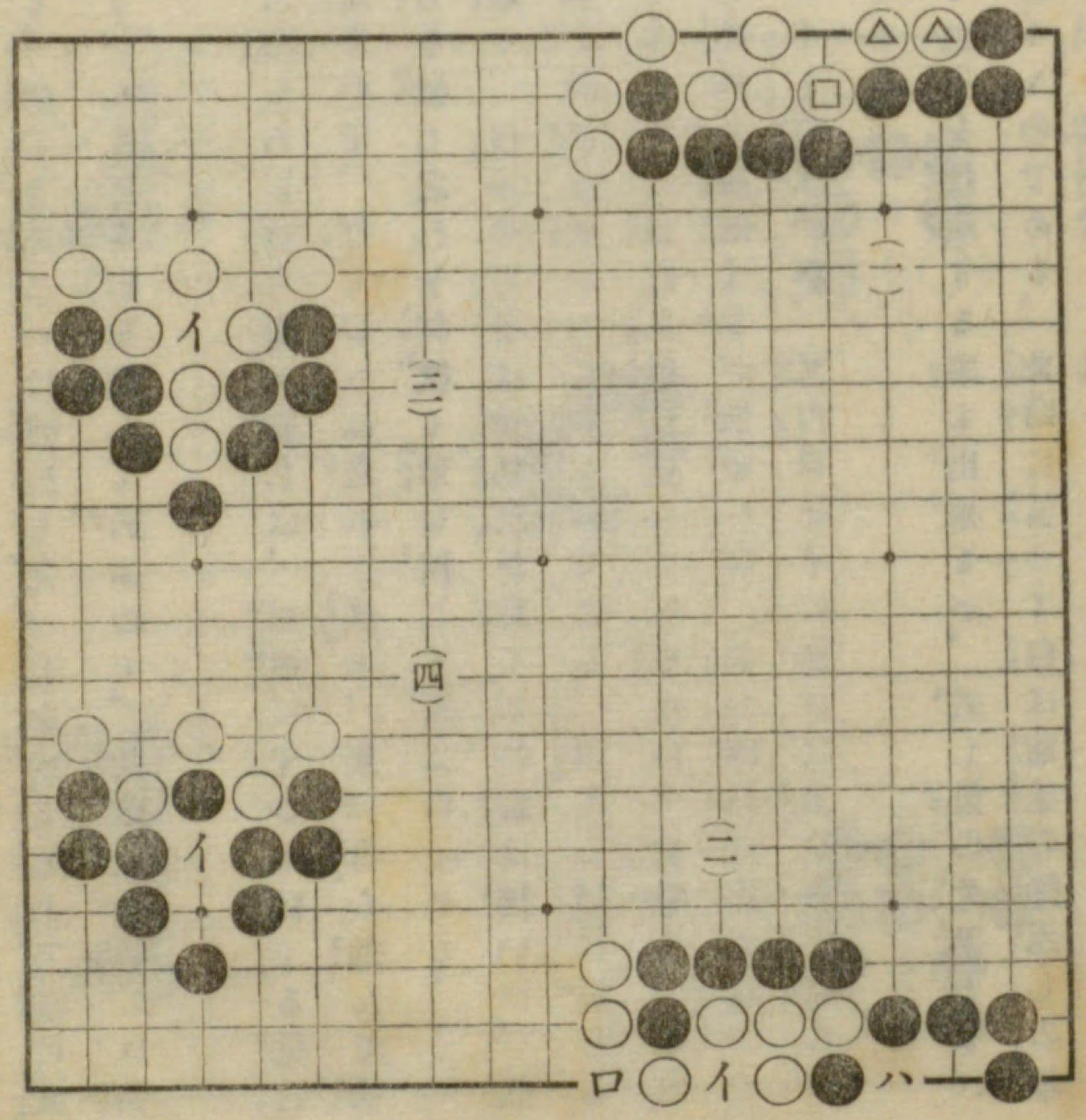


入門　第二十六圖

は能く其理を玩索し且之れに依て手筋及び形の一般を了解せられん事を望む。

猶此兩圖に於て(一)(二)(三)(四)の如きは皆同一の形である、卽ち假りに第二十五圖(一)、の黒十五までの形を其儘(二)に持ち來り次に白十六と打つの類是れなり、餘も又之れに準ずるのである。

提返しと打てがへ



入門　第二十七圖

次は(提返し)と(打替)の形である、而して此二つは何れも先づ石を捨て而して後に直に其提跡について之れを提りかへす可き形を指して云ふので、此意味に於ては共に同じである。

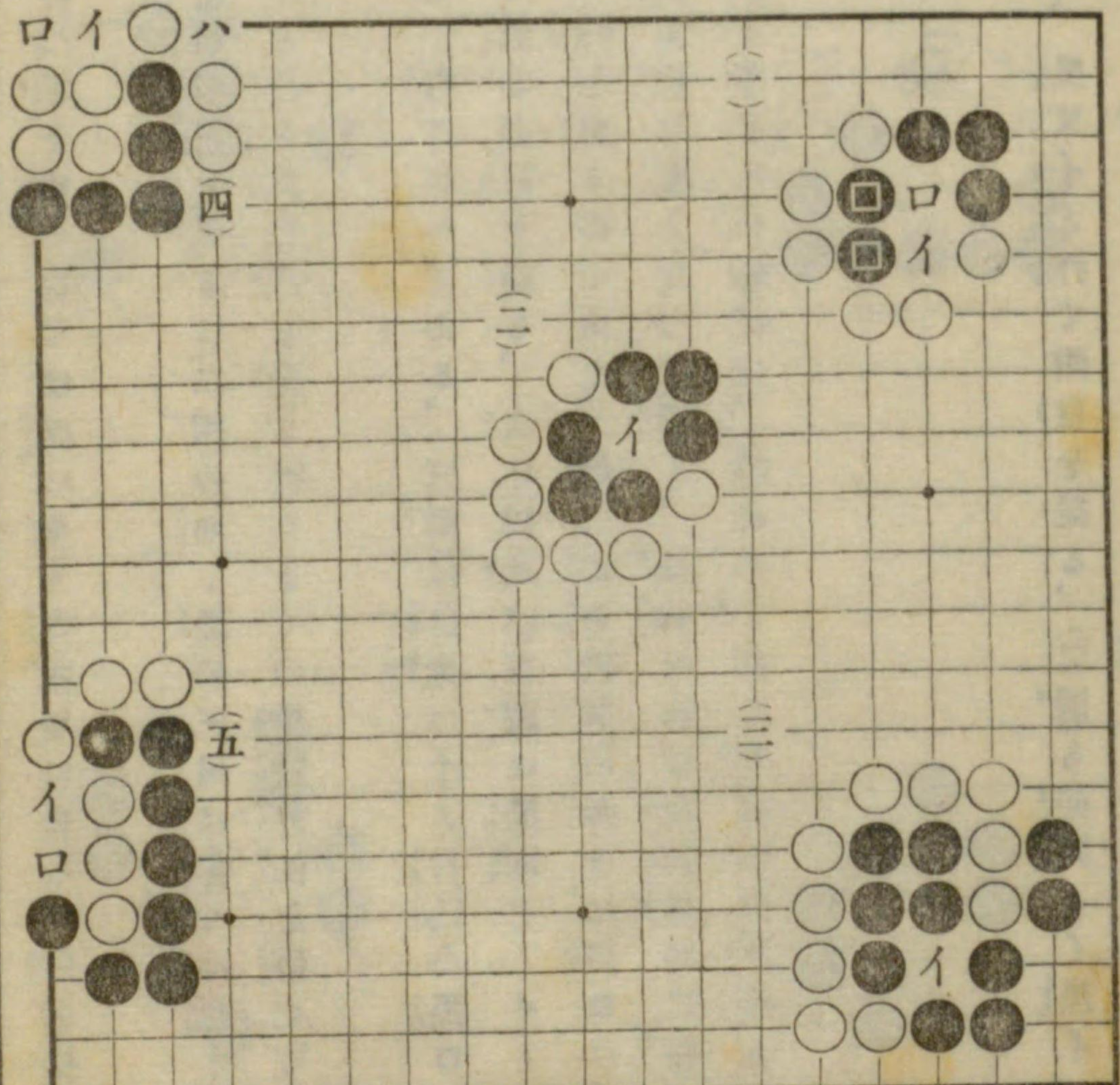
然し此二つは、多少異なつた點もある卽ち提り返しは、如何にするも助くる見込の無い石を利用し其跡を提返すので、打てがへは之れと異り、先づ自ら進んで捨し其石の効力に依て敵の活力を減じ之れを打拔く形を指して云ふのである。

今第廿七圖によつて(一圖)の如く、白Ⓐの二子は到底之を助くるの途は無いが、然し此二子によつて白の㋺印以下四目は助かつて居るのである、卽ち(二圖)に於ける如く、黒が二目を打拔いたとするも、白は其提跡について直にハと打拔き、四目を助くるのである然るに若し此ハと提返す手が無ければ、白の四目は死となつて居る、卽ち白ロに粘げば黒にイと打拔かれ、又白ロをイに粘げば黒にロと打たれて白の大白を打拔かれるのである。

(三圖)、白先とすればイと打て二子を接續する事も出來るが、若し黒の先手とすれば(四圖)の如く黒に二子を拔かるゝのである、此時に當つて白は前述の提返しの理によつてイと打ち黒の一子を提て吾兩當りを防ぐのである。

打てがへ（其二）

打てがへとは前述の如く先づ自ら進んで捨し其一子の効力に依て敵の活力を減じ而して後之れを打上げる手段方法を云ふのである、故に前の提返しよりは、猶一層興味ある問題である、卽ち(一圖)の如き、黒㋺の二子は甚だ危險なる形となつて居る若し此際白がイに打つとすれば、黒は直にロと打ち上の三目と接續が出來



入門　第二十八圖

るのである、然るに白イと打つ手をロに打てば直にイと打拔かれロの一目を提らるゝのである。

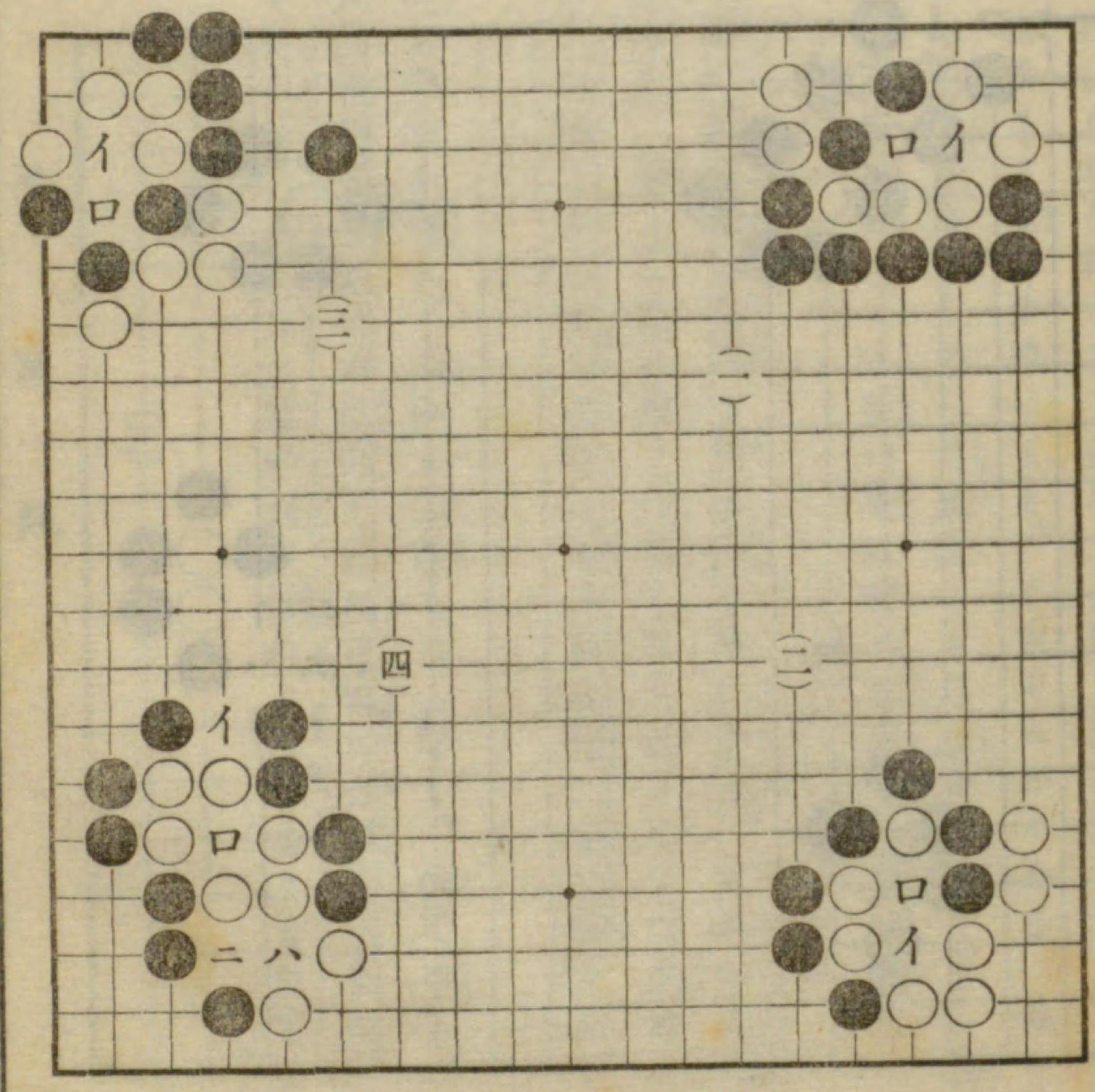
今白ロが黒のイに打拔かれし後の形を見るに(二圖)の如く黒の三目は當りの形となつて居る、故に白は重ねてイと打ち黒三目を提り得るまでの手段方法を稱して打てがへと云ふ。

(三圖)(四圖)及び(五圖)も皆同じく打てがへである、(三圖)は白先づイと打込み黒ロに提つた時、白重ねてイと打て黒の五目を提る、次に(四)及び(五圖)は黒同じくイと打込み、白ロの時、黒イと打て白を提るのである、然し此中(四圖)の如きは白ロに提つた時に黒は手を拔くも猶此五目は死となつて居る、何故なれば白此時ハに粘げば黒はイと打拔き又白ハと粘ぐ手をイに粘げば、黒はハと打て七目の白を提るのである。

打てがへ（其二）

(一圖)は黒イに打込、白ロの時、黒又イと打て四目を提る、(二圖)も亦同じく黒イに打ち、白ロの時、黒又イと打て四目を提るのである、(三)も同じく黒イ、白ロ、黒イと三目を提る、次に(四圖)の如きは、打てがへの中では稍複雜なる形であつて、黒は先づイと當て、白ロに粘いだ時、黒前と同じくハと打込み、白ニに提つた時黒又ハと打て八目を打拔くのである。

猶此外にも色々と變つた形もあるが、要するに此打てがへとは先づ捨石、即犧牲子を投じ、敵を當りの形に導き、而して後敵子を提るので實戰の時には如斯手段は常に能く



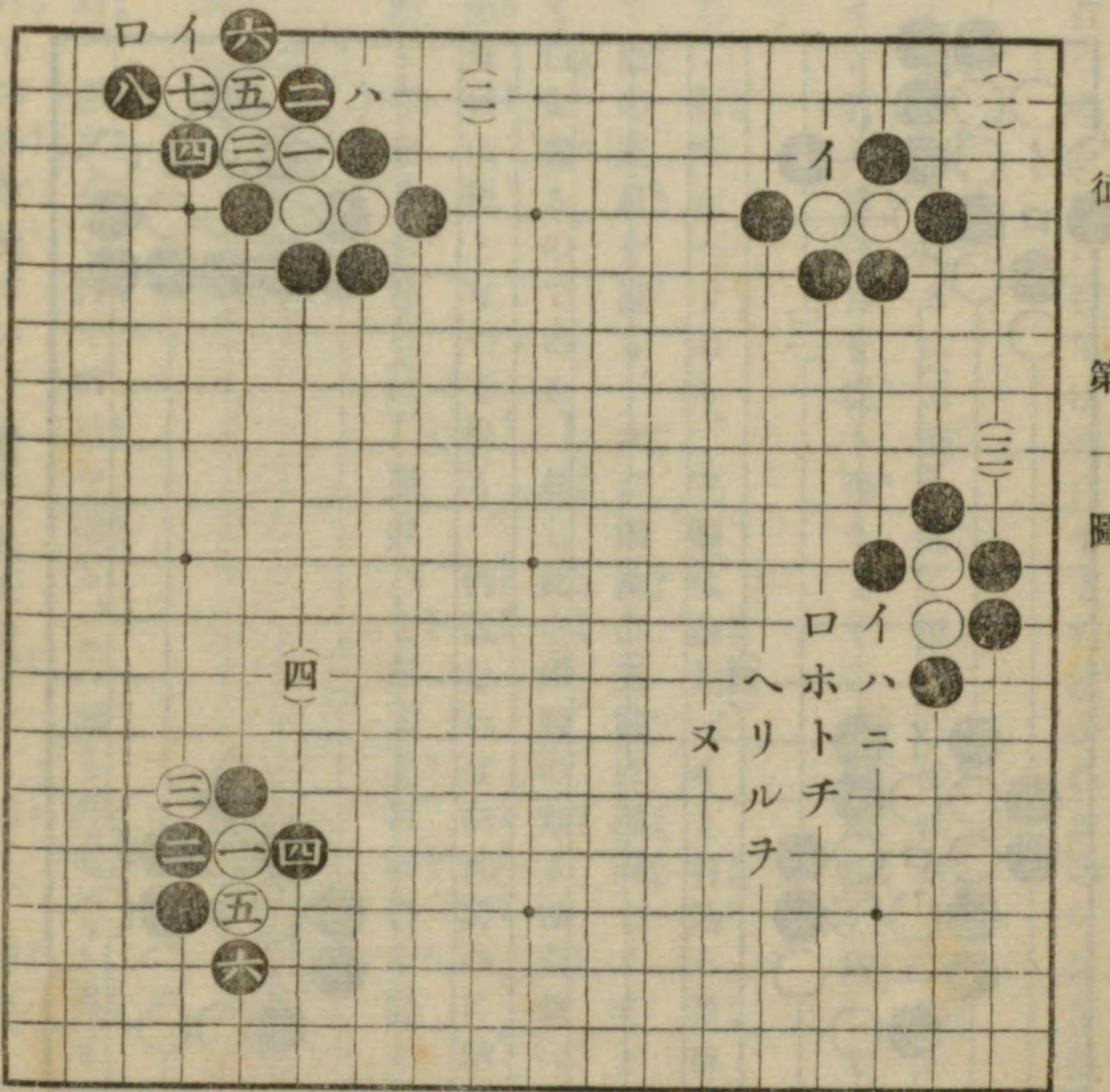
入門　第二十九圖

用ひらるゝのである。

征（其一）

征とは如何なる形で出來得るものであるかと云ふと。

第一圖に於ける如き、白の二子を黒五子を以て包圍せしとするに、此中に在る白二目の活路は只イの一點のみである、故に若し白が此石を逃げんとしてイの點に打つたとせば、黒は如何に打つ可きかと云ふと、（二圖）の如く



征　第一圖

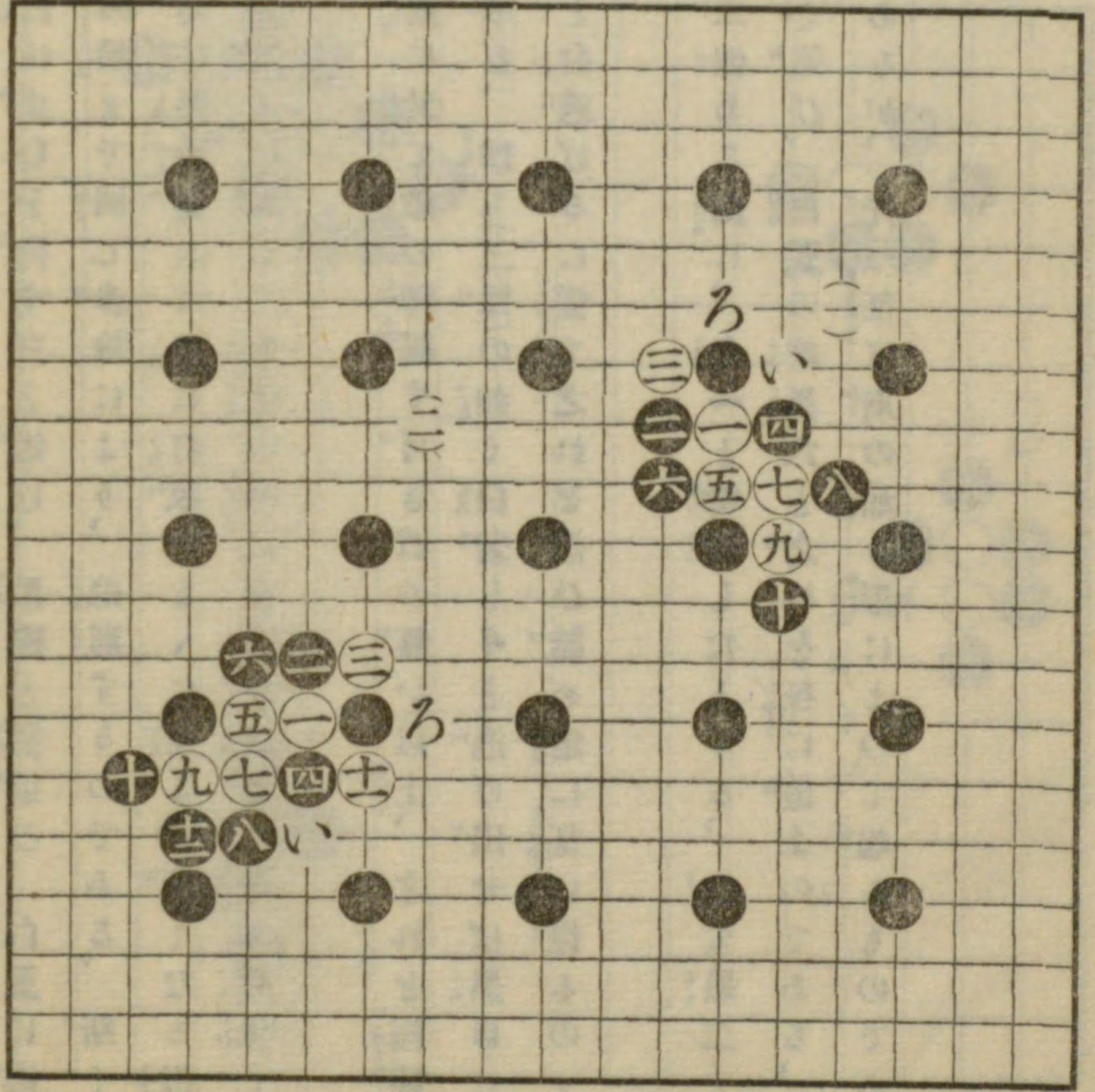
先づ二と追撃するのである、白は止むを得ず三と逃げ、黒四と猶追ひ、白五に逃げ黒六、白七、黒八と之れを極端まで同じ歩論により、追窮するのである、斯くなつて白は最早此石の活力を増す手段盡きて黒に打抜かるゝに至る、斯くなる迄の徑路全體の狀態を指して征と云ふ、而して此征の形は四つ目殺しの最も變化したるものである。

又征は之れを追窮する、其中間に於て敵の障凝す可き石の無い以上、之れを極端より極端まで追窮する事が出來る、卽ち（三圖）の如く白若しイと逃げ出せば黒ロに追ひ、白ハ、黒ニ、以下黒ヲと白逃げるに從て之れを追ひ詰め遂に征に提るのである。

同征、（第四圖）の如く假りに黒二個ある處に、白一と密接したとする、依て黒二と約へ白三と切斷せし時、黒四と追ひ、白五の時黒六と之れを征に追ふのである、之等は極めて平易なる一例であるが、先づ征は斯の如き形によつて起るものである。

征（其二）

前述の如く、征は四つ目殺しの變化せしもの、又四つ目殺しの最上なるものであつて、其活用の如何に依て此征の形となつて現はるゝものである、今之を實戰上に於て細解せんに、圖中(二圖)の如き、白は黒の置石に對して烈しく一と密接して打つたとする、依て黒二の時、白三と猶追擊を加へた、玆に於て黒は無事平穩の手段を取るよりは最も劇しく四と打て一の白を將



征　第二圖

に四つ目殺しの形に於て提らんとした、此時白いと打つも、又ろと打つも、黒に五の處に打拔かるゝから、止むを得ず五と逃げたのであるが最早遲し逃がるゝの術なく、黒六と追ひ、以下白七、黒八、白九、黒十と打て白を征にカケルのである。

爰に最も注意す可き事は、黒に追はれつゝある白が到底此石の助かる可き見込なきを看破り黒を迷はさんと、窮餘の一策として突然(二圖)の如く十一と切斷し、黒を雨當りの形となす事がある。

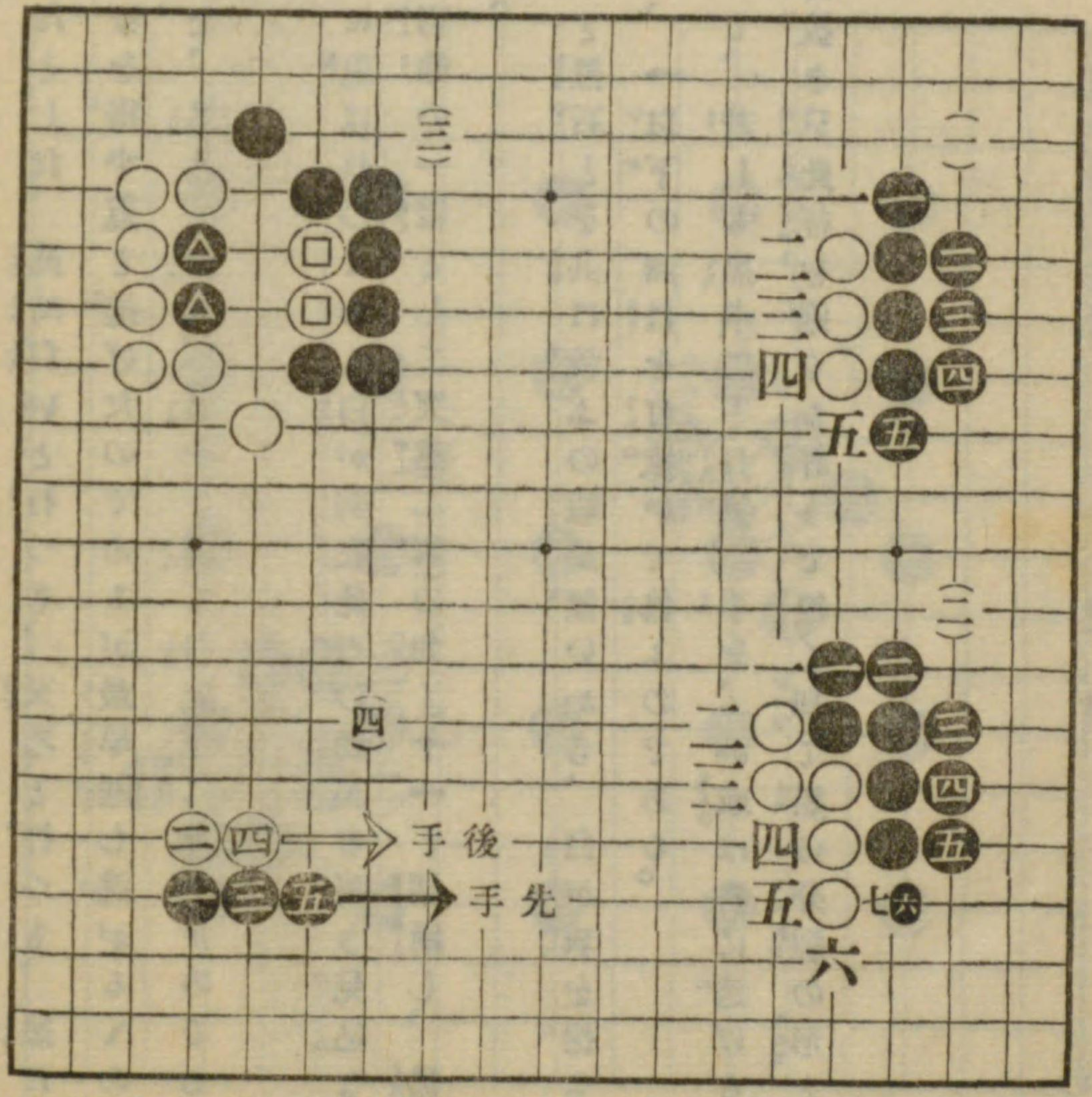
扨此時に當つて黒は、四の石と置石とを共に救ふの暇が無いから、白が我を提らんとする前に先づ十二と打て、一以下の四目を打拔いて終ふのである。

如斯は甚だ誤り易い處であつて、若しも黒十二と打拔く手を、い或はろに逃げるとすれば、白はろ或はいに打拔き只此征を逃ぐる許りで無く却て黒は分裂の形となるのである。

攻合（其一）

攻合の意義、攻合とは讀で字の如く互に攻合のである、戈を交へるのである、提

るか提らるゝか、降參するか降參させるかの、二者孰れかに歸するまで秘術を盡して戰ふのであるが然し單に戰ふのみでは攻合の意味を爲さぬである必ず其目的物(白及び黒を云ふ)が未だ獨立して其盤上に存在する資格を有せざる者の間に起る戰であらねば攻合と云へないのである、之を約言すれば攻合とは彼我の接狀最も劇しくして、彼幾手我幾手と、何れが將に提られ



攻合第一圖

んとする最も危險なる形に遭遇した時をいふのである。

故に此攻合については石の手數と云ふ事を最も必要とする、此手數とは、換言すれば石の活力、即ち石の生命は幾つであるかを數ふるので、若し自分の石が四つの手數より無い時に敵の生命は五つであるとすれば、敵の手數は自分より一つ多い、譯であるから自分は一手後れとなり死滅するのである。

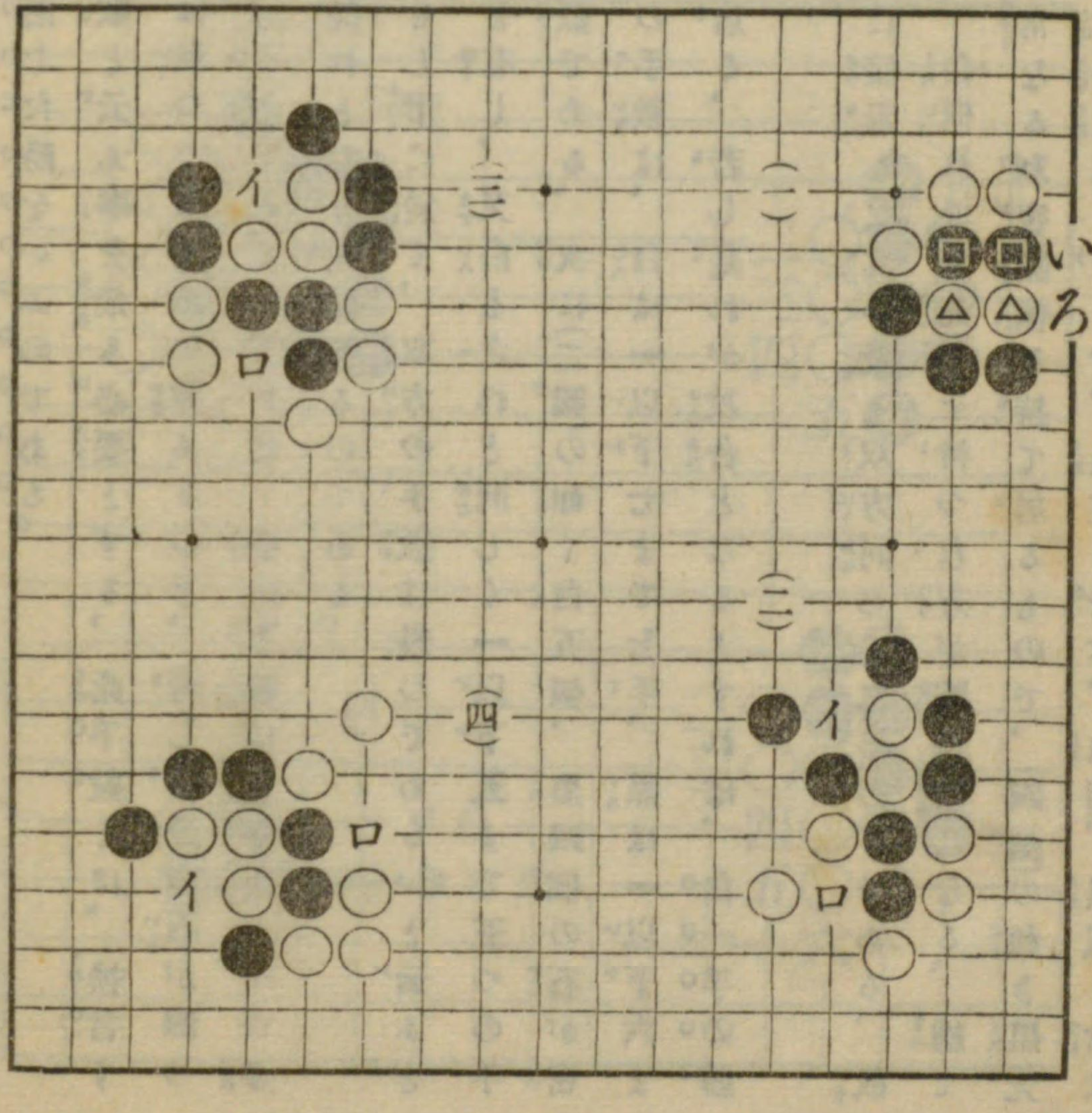
今(一圖)の如く白、黒互に密接せし形に於て、双方の手數は幾つであるかと云ふと黒は一以下五まで五つの手數を有し、又白も之れと同じく一以下五まで五つの手數を有す、故に彼我對等の手數である、次に(二圖)の如く白五個、黒四個の石が密接して居るとした時、此双方の手數は、白は一以下七まで七手、黒は一以下六まで六手、即ち白が一手優つて居る、若し是れが攻合となるとすれば、白一手の勝となる譯である。

(三圖)、白□二子、黒△二子互に接近し又其手數も双方同じく二手づゝである、故に如斯時に於ける攻合は、黒、白何れでも先手を持つた方が勝つ事になる、總て攻合の形では其先手後手は非常なる利害關係を持て居るもので、(四圖)の如き黒先づ一と一着を下したとする、其時白二と打てば、黒三と行び、白四、黒五と常に

先きに行び出して優越なる勢力を持つて居るのである。

今實例によつて攻合の勝敗を說明せんに、假りに下圖(一)の如き形に遭遇せしとせん、此時に當つて黑回印の二子及び白△印の二子は既に其活動力の大部分を阻止され、黑はいの一點、白はろの一點を餘すのみである、今此形に於て其攻合は何れが勝であるかと云ふと、何れでも先手を持つた方が

攻合第二圖

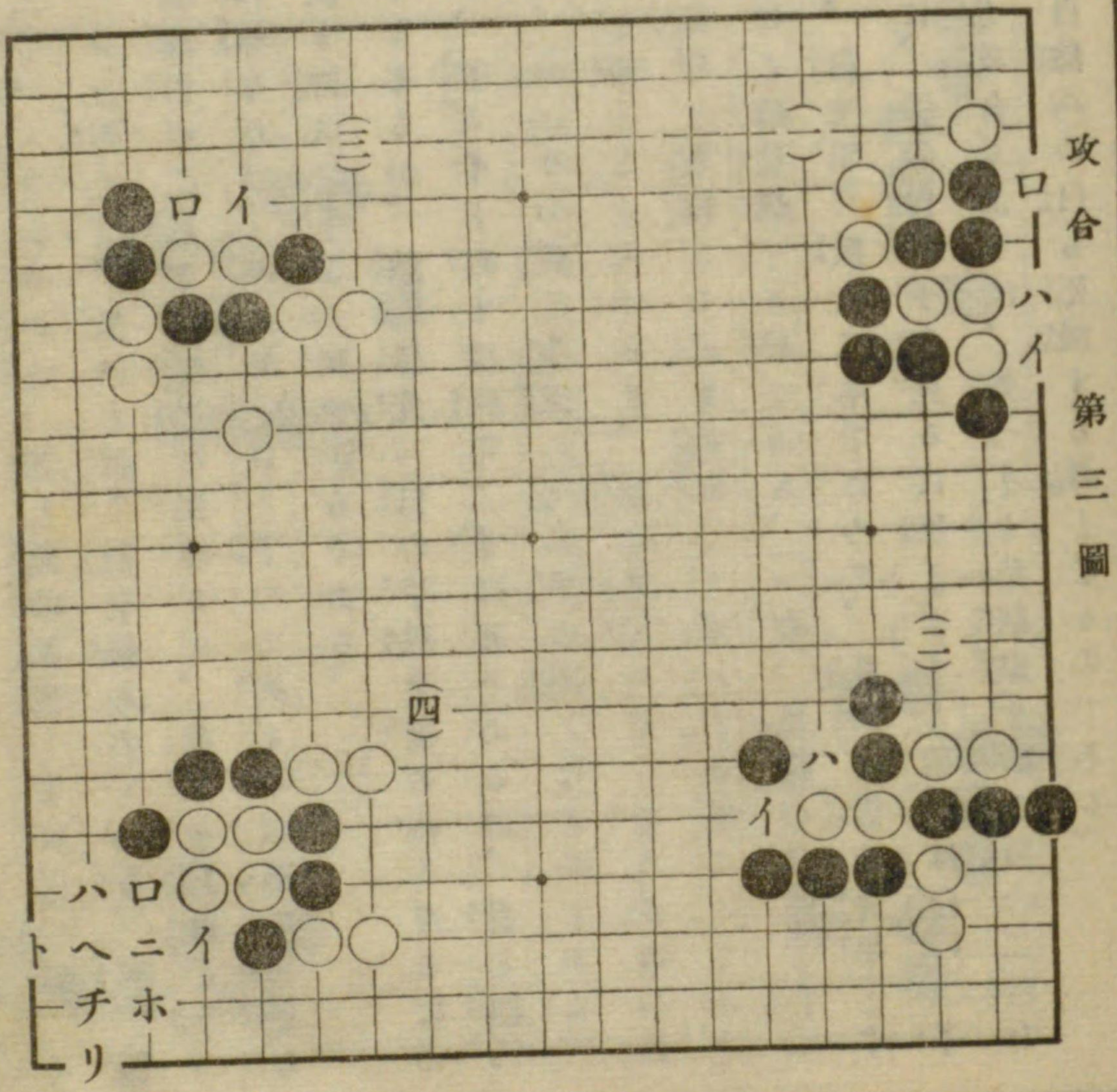


勝となるのである、即ち黑若し先手とすればろと打て白の活力を阻止し二目を打拔く事が出來、又白の先手とすればいと打て反對に黑の二目を打拔くのである。

次に(二)(三)(四)の如き、何れも同じ理であつて黑先とすればイと打て白を提り又白の先とすればロと打て黑を提るのである。

故に攻合に於て若し双方同じ手數とすれば先手の勝となる。

攻合第三圖



第三圖(一)及び(二)は白黑共に二手づゝであるから、若し此時黑先とすれば(一圖)、イと打て白の手數を縮め、白、ロと打てば、黑ハと打て白を提るのである、又(二圖)の如きは、黑はイと打つも無論白の二目を提る事は出來るが、此手を只ロと下つて置くも攻合黑勝である、何故なれば、斯の如くロと下つて置く手は黑の手數を三手に延ばし之に對して矢張り白は二手より無いからである。

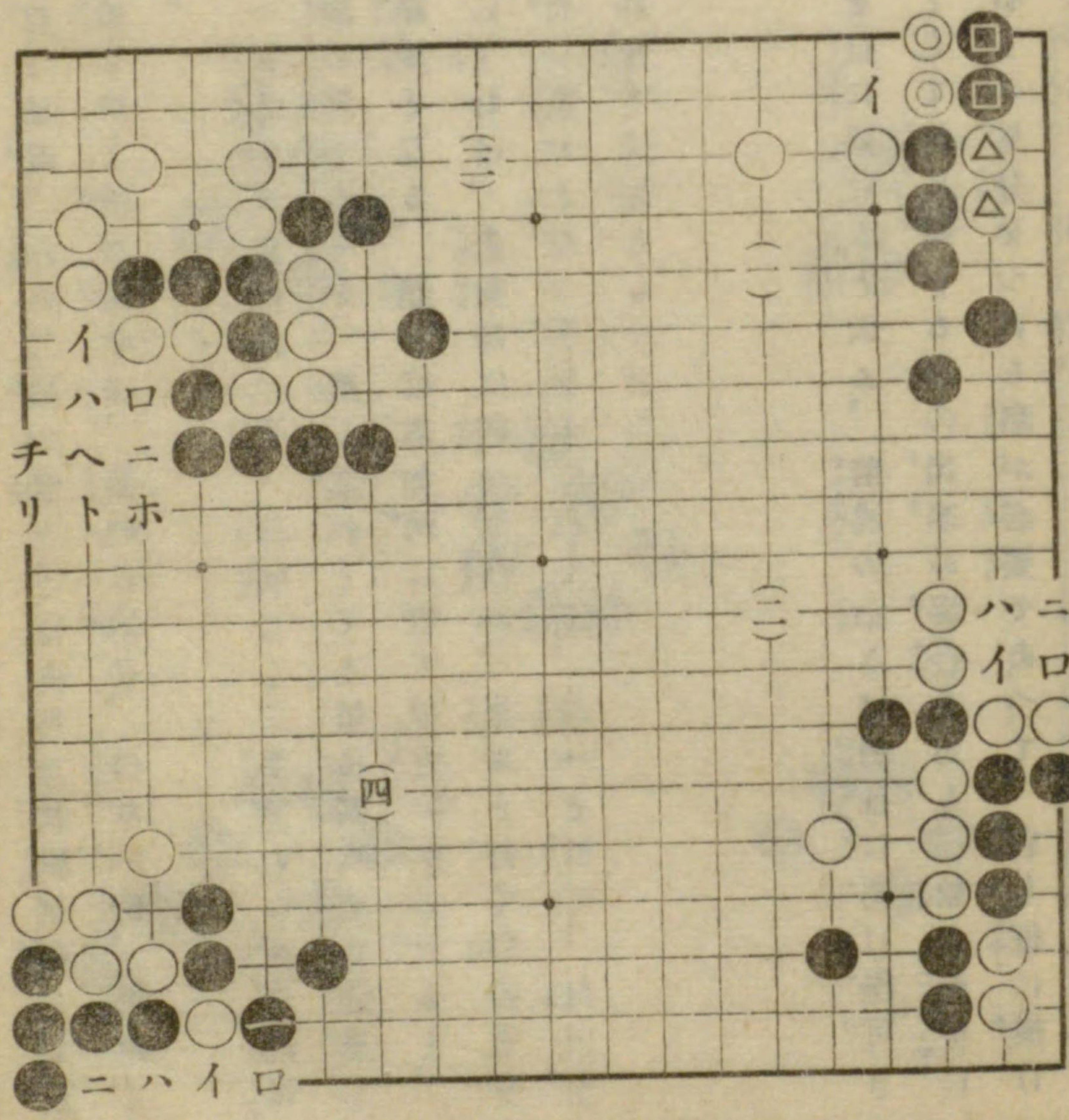
(三圖)、同じく黑二手、白二手であるが、然し黑先づ白の手數を縮めんとするについて稍考量を要する形である、卽ちイと打てば白の二子は死であるが、若し誤つてイの手をロに打つとすれば、白はイの處に逃出し反て黑の死となるのである。

(四圖)、黑先づ征に掛け此攻合を勝とするのである、卽ち黑先づイと打ち白ロの時黑ハと追ひ、白ニ、黑ホ以下黑リと極端まで之を追窮して遂に白を提るのである。

第四圖の如きは攻合の中に於ける稍複雜なる形である、(一圖)、黑■の二子と白△の二子との手數を比較するに、白三手、黑は二手であつて、此時に黑の先手とするも、猶白の勝である、然るに、◎の白二子を見るに黑よりイと切れは白の二子當りとなるが故に黑は△の石と攻合ふよりは、先づイと此缺點を衝き白の二目を提るのであつて、斯くすれば自然△の白も死滅する譯となるのである。

(二圖)も亦同じく黑四目と隅の白二目との攻合は、黑の負である、故に黑は此白と攻合ふよりは先づイと缺點を衝き白の二目を提るのである、此時白若しロと打てば黑ハと打て白の三子を提り、又白ロの手を二より打つとすれば、黑ロと打て白の二目を提るのである。

(三圖)、中にある黑の四目と、外の白四目との攻合は、白は三手、黑は二手であつて黑負である、然



攻合　第四圖

るに他の方面に於て黒イと打てば直ぐ白の二目が當りとなる可き缺陷を存して居るから、先づ斯く切斷し白若しロと逃げ出せば、黒ハに追ひ、白ニの時、黒ホと追ひ之を征に提るのである。

(四圖)、隅にある黒と、白の一目との攻合は黒二手、白同じく二手であるから此時黒先手であるなれば無論黒勝の筈であるが、然し之れとても黒は其攻方に注意しなければ却て白に提らるゝ結果となる、然らば黒如何に打てば宜いかと云ふと、先づ黒一と打つ、此時白イに下れば、黒猶ロに約へ、白ハ、黒ニと打て白の三子を打拔くのである、然るに若し黒一と打つ手をイに打てば、白一と打て、白三手に對する黒は二手となり黒の數子は提らるゝのである。

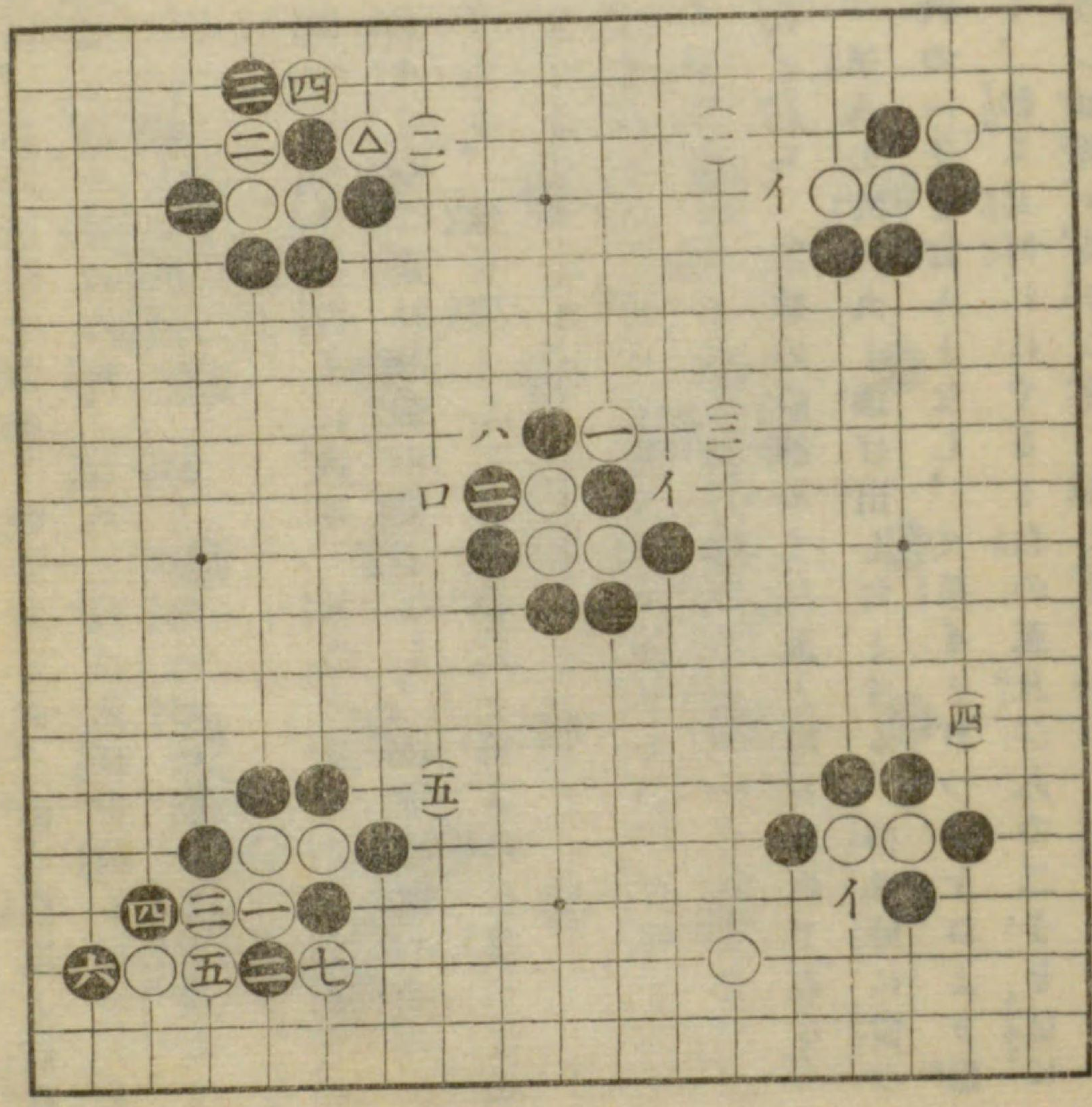
征（其三）

征に追つて之を打拔く手段を征に掛けると云ふ、前述の如きは皆征に掛け得可き形のみであるが、然し又時として征に掛ける事の出來ぬ場合もある、故に此征に掛ける石と征に掛けられぬ石との見分をつける事が必要であつて、若し征に掛け之を提る事が出來るとすれば非常なる得に相違ないが、然し之れと反對に、征に

掛ける事の出來ない石を征に追つて之れを逸出せしむる樣な事があれば、反對に損となる事云ふまでも無いのである。

(本圖)(一)及び(二)の如きは、征に掛けられぬ時の一例であつて、(一圖)に於て、若し黒イと打てば、白は(二圖)の如く二と逃げる、黒猶三と之れを征に追へば、白は◬印の石を利用し四と一子を打拔き此征を破るのである。

(三圖)、此形に於て白若し



征　第三圖

一と切れば、黒は無論二と打て、白の三子を打抜くのであるが、若し黒二と打抜く手をイに粘ぐとすれば、白二と出で黒ロの時、白八と行び此征を破るのである。之等は別に變化としては六ケしい處でもないが、然し實戰の時は斯かる平易なる處も往々誤り易いのである。

(四圖)、も亦征に掛けられぬ一例であつて、白イに逃げ、黒二に追へば、(五圖)、白三、黒四、白五、黒六の時、白七と切て黒は分裂の姿となる、之等を征クズシと云ひ、黒の不利甚だしきものである、故に黒としては(五圖)二と追ふ時に當つて他に適當の手段をなさなければならぬのである。

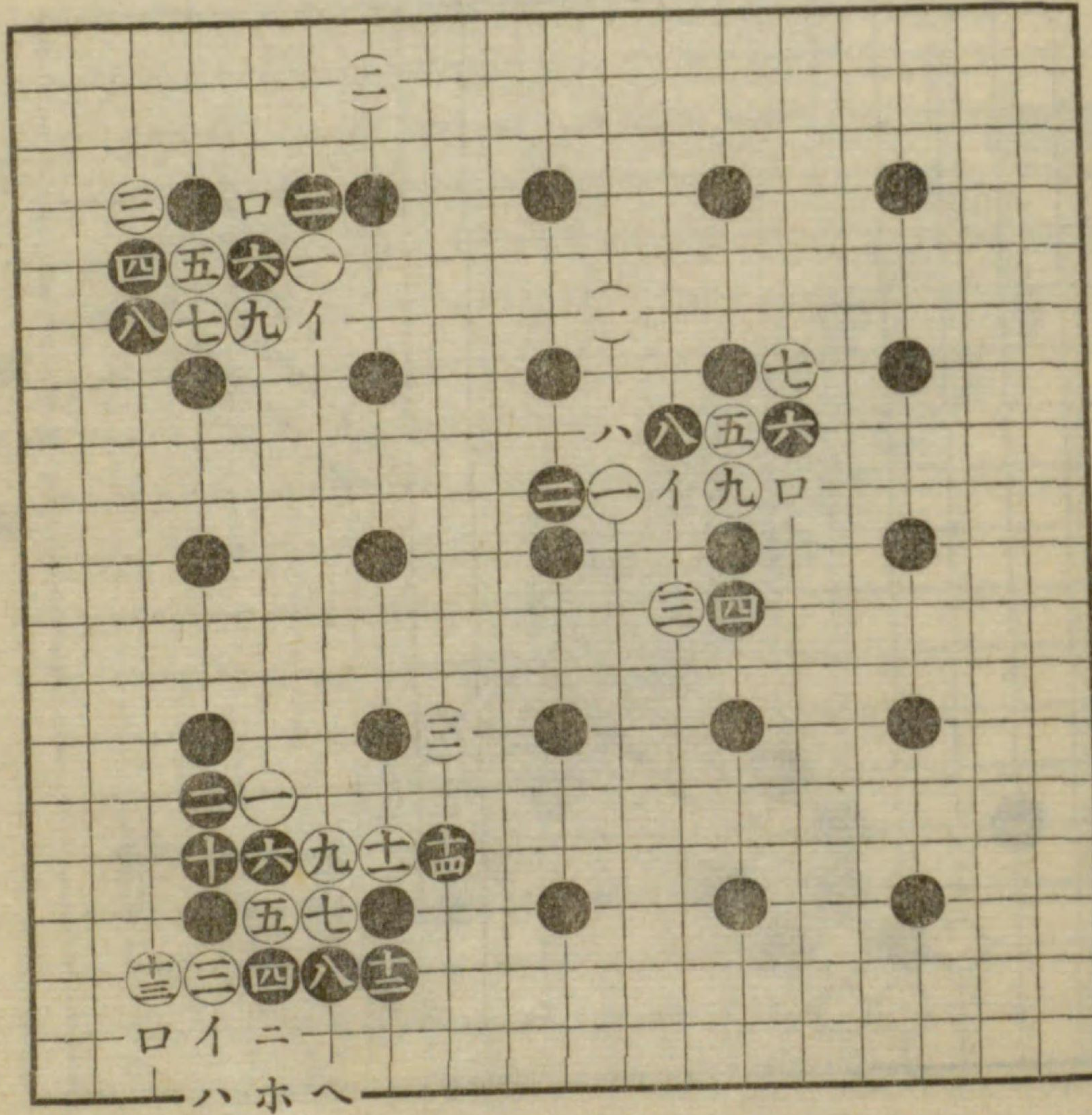
二十五目置碁では前述の如く大抵白を征に掛けて提る事が出來るが、又時としては征に掛けられぬ場合もある、今實例を擧れは(一圖)の如く白先づ一と一着を下したとする、依て黒二の時、白三と打ち、黒四の時初めて白五と附けたのである。次に黒六にヲサへ白七に切り、黒八の時白九と逃げ出したとする。扨此時に當つて黒イに打てば白ロと逃げて六の一子を當りとなし、又黒イと打つ手をロより追へば、白イと打て一と連絡する、即ち其何れにするも白の五及び九の二子を征に掛ける事は出來ぬのである、然し如斯き場合に於て黒は假令此石を征には取れぬ

とするも、他に適當の方法を以て之を包圍するので、即ち黒先づロと追ひ白イの時黒八と打つ、之等は死活に於ても稍變化したる形であるから以下追々に說明する事とする。

(二圖)、之れ亦前と同じく白一、三以下九と逃げ出す、此時黒若しイと追へば白直にロに一子を提つて此征を破るのである。

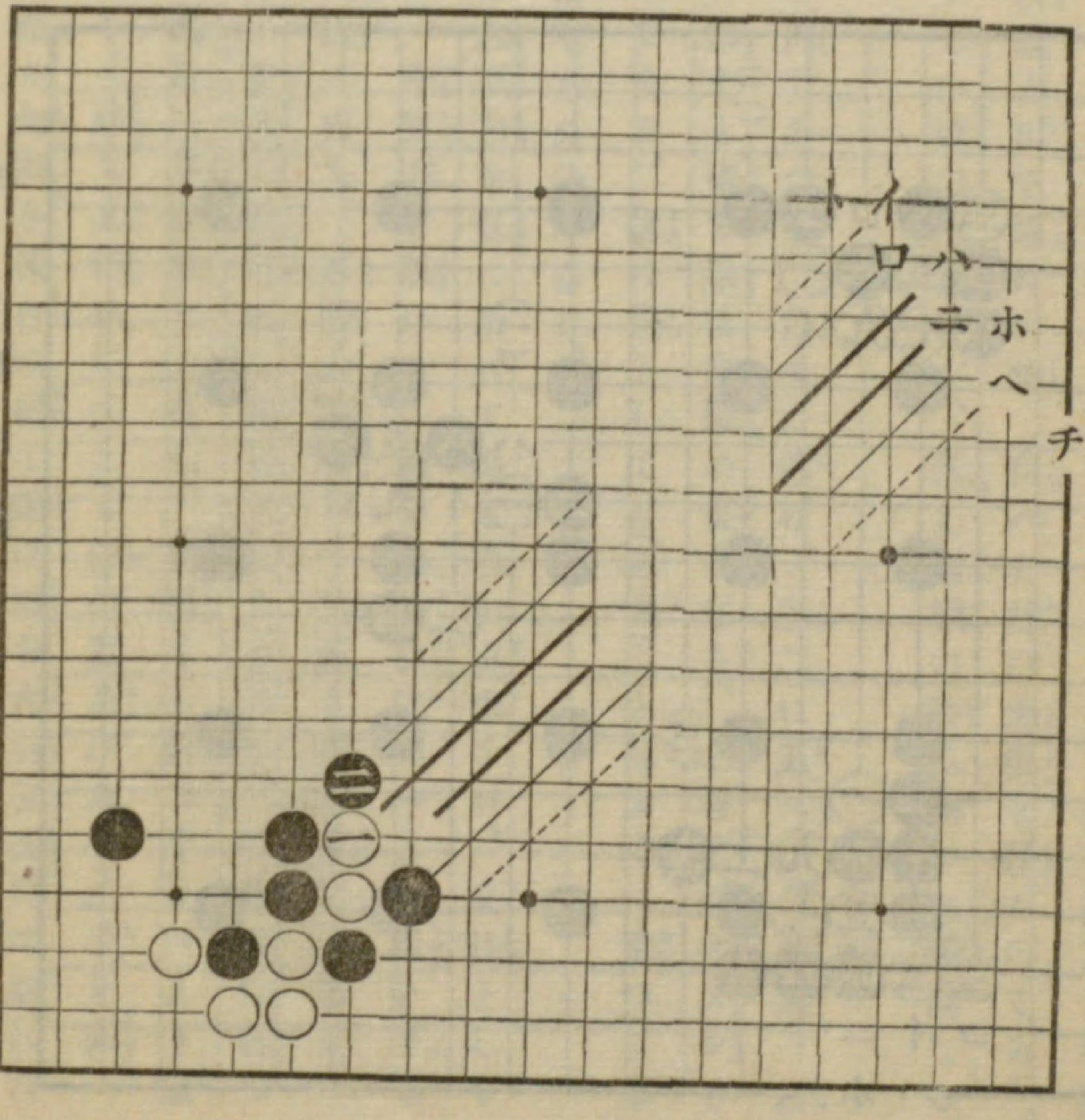
(三圖)、も殆んど(二圖)と同形であるが、然し白九の時、黒先づ十と守り、白

征　第四圖



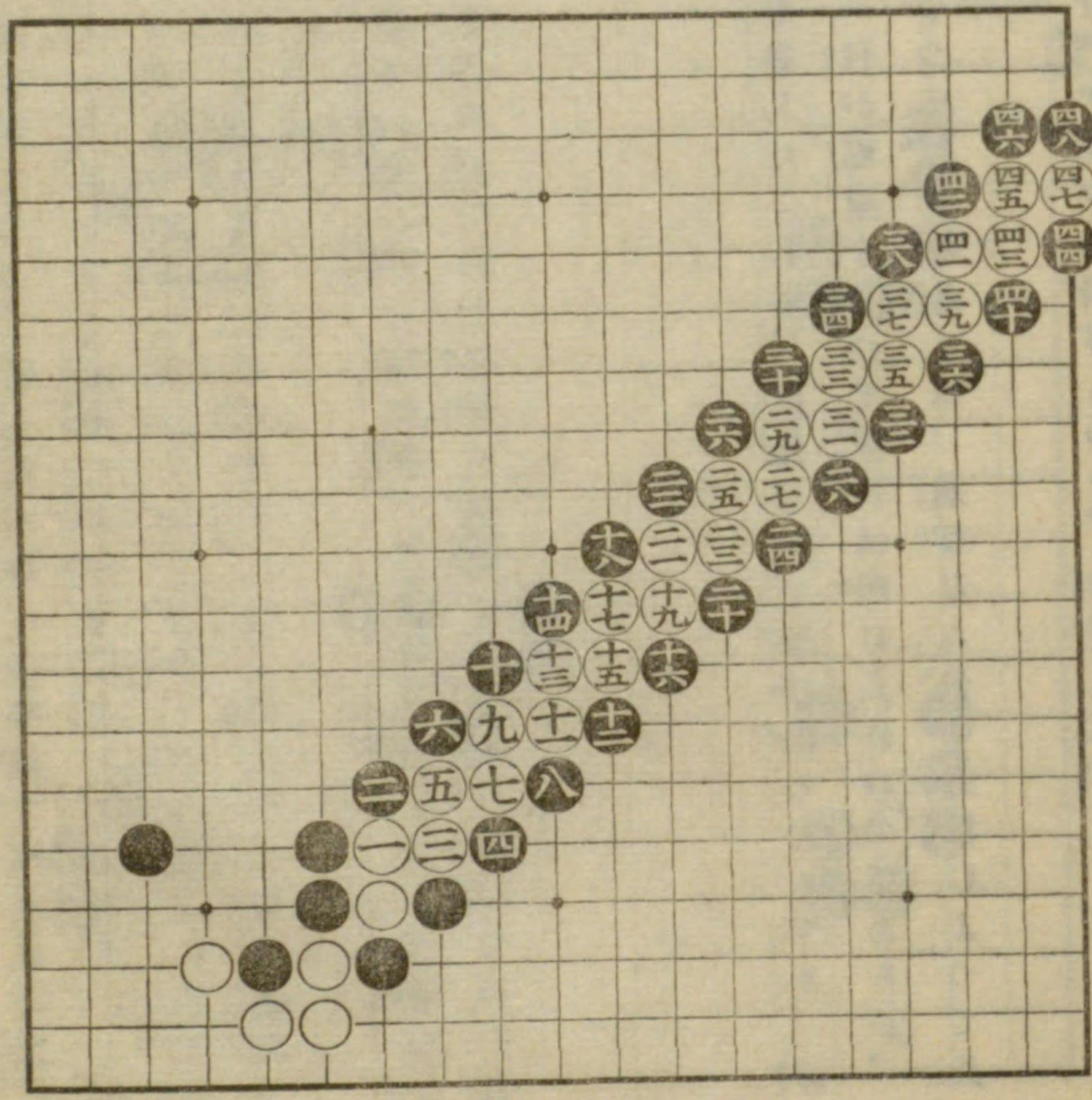
十一の時、黒猶十二に守る、依て白止むを得ず十三と行びたのであるが、黒十四と打て一、五以下の白五目は死である、又若し白十三と行びる手にて十四に打てば黒は十三と打ち白イの時黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホに打てば黒ヘと打て三の白を提るのである。

前に説明したる征は只其一小部分に於てのみの形であるが、然し此征は全局面にわたるも其理は一



征　第五圖

つである、即ち征に掛け、之を追窮し行く其中間に於て、敵の障礙す可き石が無い以上、一隅より他の一隅に追ひつめて之れを打拔き得らるゝものである、然らば其障礙物とは如何なる石が如何なる點にある時を指すのであるかと云ふと、先づ征に掛けんとする時、其逃路前方に於て六線を見るの必要がある、征第五圖の如く白一と逃げ出した時に、黒は之れを征に追は



征　第六圖

んとするに當つて先づ前方六線を見るので、若し此六線の中(イ以下ヘまで)の間に白石のある場合は黒は白を征にかけんとする最初に此征を斷念して二の手にてリと守らなければならぬ、然るに若し其前方に白石の無い場合、又は假りに白石があるとするもト或はチの邊にある場合は黒は此石を征に追ひ第六圖の如く最後まで追窮し之れを打拔くのである。

◎征に追はんとする時、其前方六線の中に敵の石のある時は征とならぬ事は前述の通りであるが、若し味方の石がある場合は無論之れを征に追ひつめて提るのである。

門(アシダ)

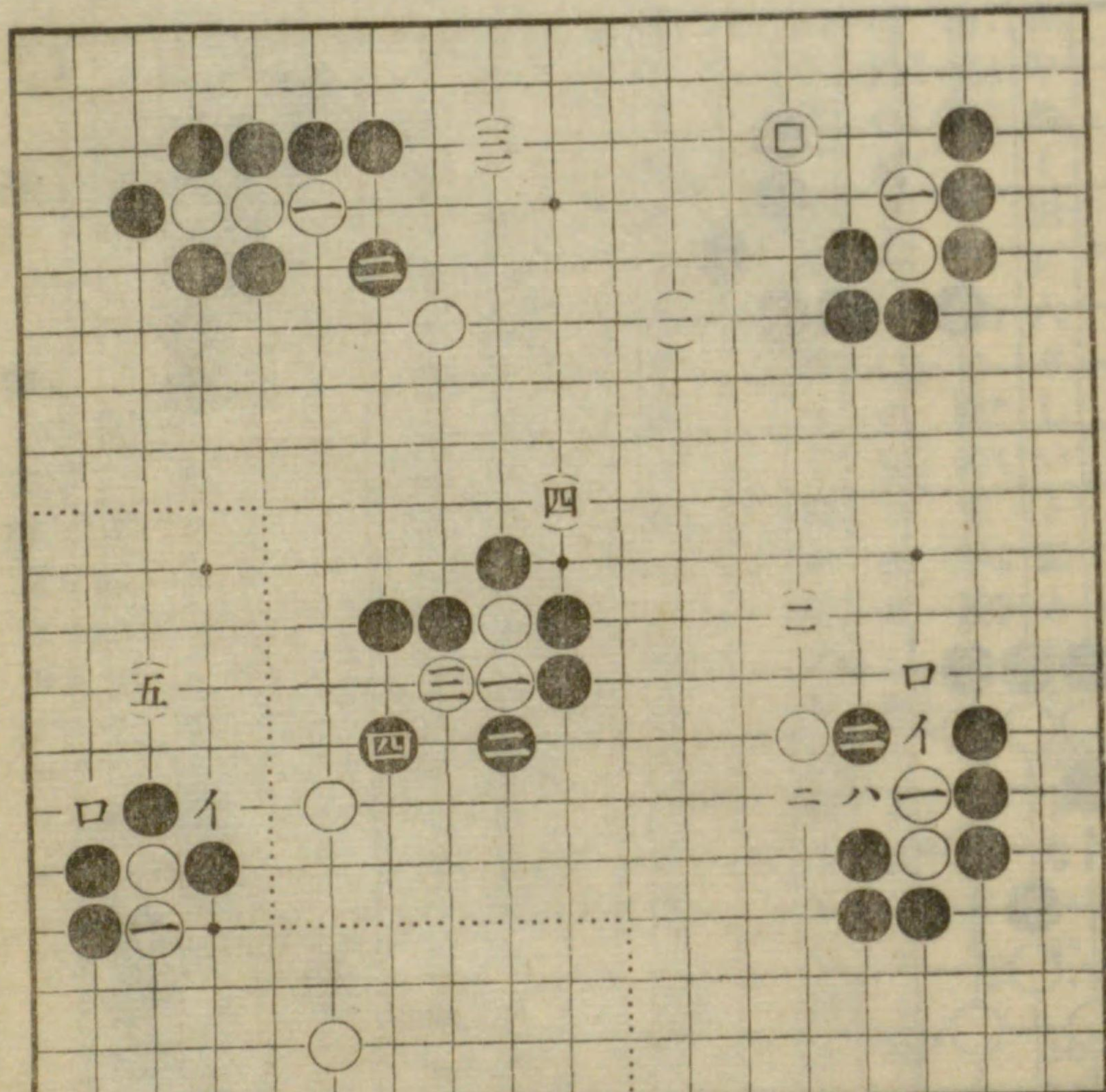
然るにこゝに(一圖)の如き形に遭遇したとして、白先づ一と逃げ出したとする、扨此時に當つて、無論白口印の一目が邪魔となつて征には掛けられぬのであるが、然し如斯き黒數子連立し堅くなつて居る場合には、適當なる他の方法によつて此白二目を提る事が出來る。

卽ち(一圖)の如く黒は二と之れを門(アシダ)に掛けるので、白若し此時イと打てば、

黒ロと約へ、白ハの時、黒二と打拔く、又白若しイと出る手をハの方から出づるも、其結果は同じく黒二と約へて白を當りとするのである、斯の如きは、敵の勢力より吾石の勢力の非常に優つて居る場合に多く用ゐらるゝ手である。

(三圖)の如く白石が三目となるも其理は同じで黒二と掛け之を門に取るのである。

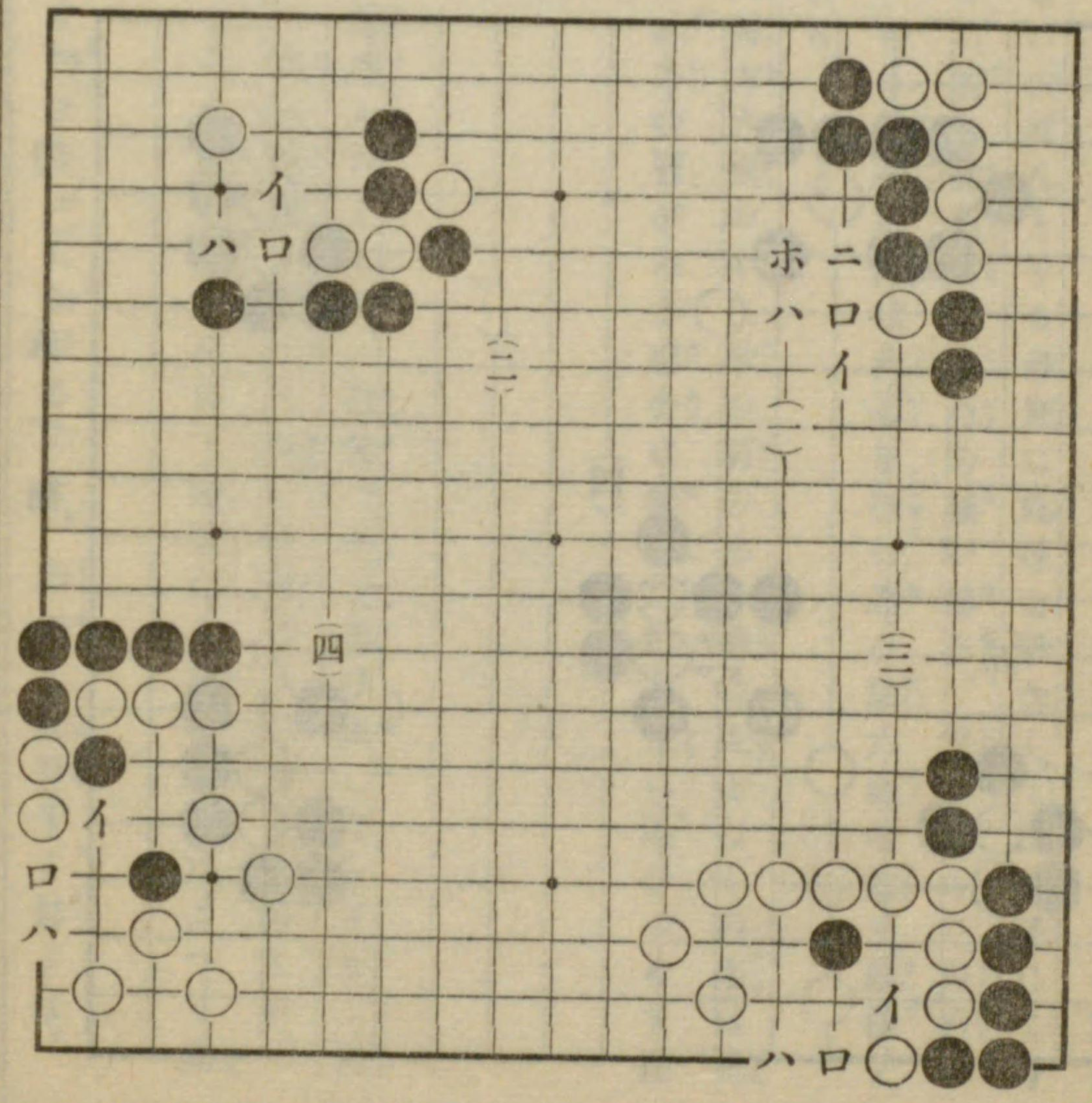
(四圖)、白一と逃げ出した



門　第一圖

時、黒は直に此二目を門に掛ける事は出來ぬ。圖の如く先づ二と追つて、白を三に行ばしめ、而して後黒四と門に取るのである。

(五圖)、白一と逃げ出すなり、扨此形に於ては黒は前の如くに門又は征によつて之を提る事は出來ぬのであるから、此場合は止むを得ず黒はイ又はロと打て先づ自己の石を堅くし、敵に切斷せらるゝの虞れある此弱點を防ぐ



門　第二圖

の外は無いのである。

此門の變化は、他の死活、攻合の如く別に六ケしいと云ふ程の形もないが、只門は四つ目殺し又は征よりは、稍遠廻しに、敵を圍殺す手段をとるのである。

第二圖(一圖)の如き、門の中では稍複雜した變化の形である、即ち黒先づイと掛け、白ロの時黒猶ハと壓迫し、白二の時、黒ホと約へて初めて之を包圍するの形となつたのである。

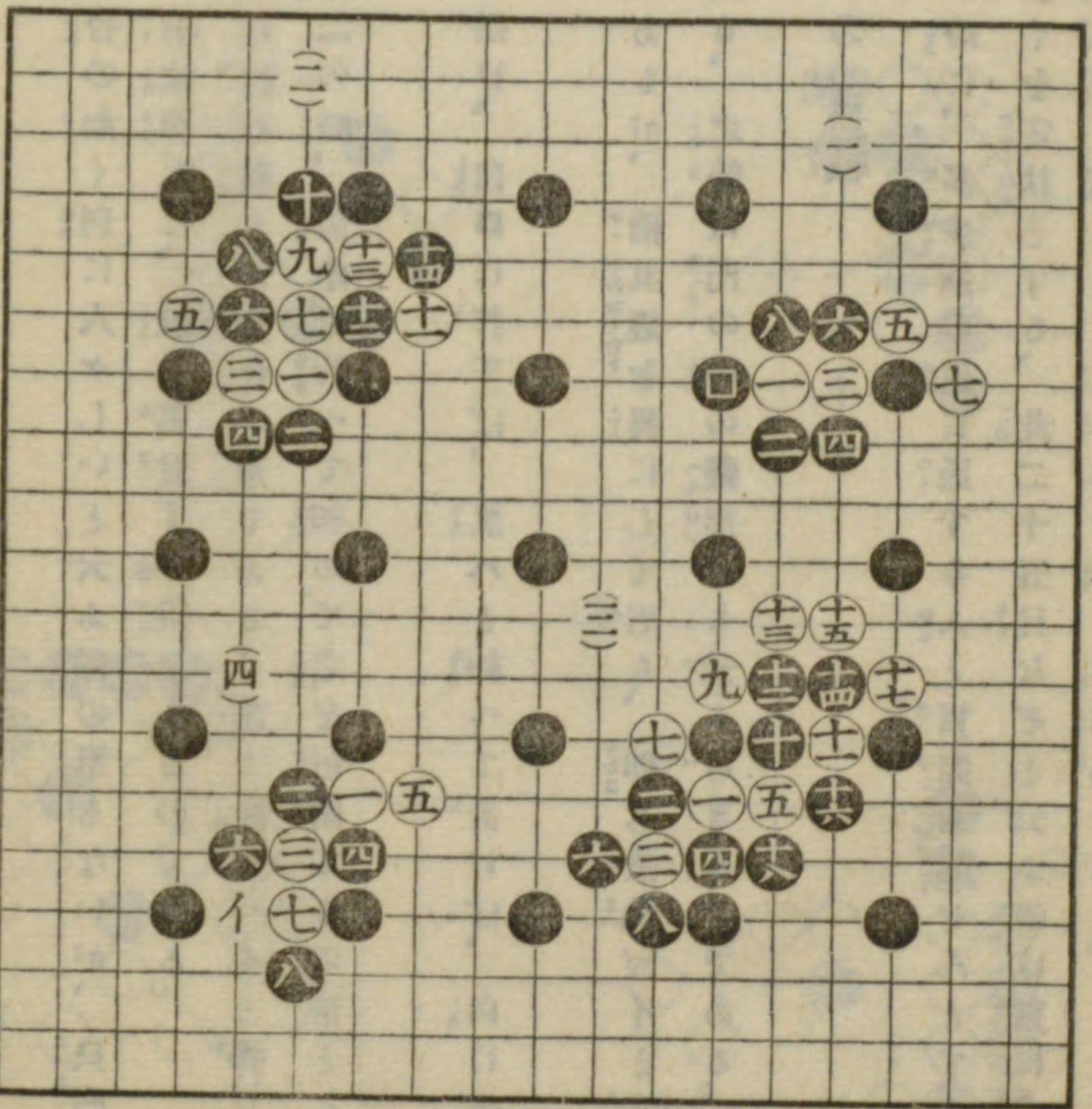
(二圖)も同じく、黒は先づイと掛け、白ロに打てば、黒ハと約へて置けば、白に逸出せらるゝの虞れがない。

(三)及び(四圖)は門に似たる形であるが、稍其趣を異にして居る、即ち黒先づイと當て白ロの時黒ハと打て之を提る、之等は門の中の變形とも云ふ可きものである。

二十五目置碁の實戰

何人と雖ども碁を覺へ初めの時に、多少斯の道に通ずる人と實際對局せんとするに當つては、必ず二十五目置くを定法とする、此二十五目なぞと云ふのは實に多數の置石であつて、少しく其筋道を覺へれば黒必勝を計る事容易である。

(一圖)、多數の味方あり、白先づ一と附け黒を攻撃せし時其白一の一子と黒ロの一子との勢力を比較するに、双方互角であるが次は黒の手番であるのみならず、猶他の方面に多數の味方を有して居るから、此際何の顧慮する處も無く二と打て劇しく白を包圍せんとした。依て白は止むを得ず三と打て我勢力を增し、黒は猶四と打て白の一及び三の二子を提らんとした、



實戰第一圖

白五に綽ね、黒六に切り白七に綽返した時、黒直に八と打て白の二子を打抜き得たのである。

(二圖)、黒六までは(一)と同じ手順、黒六と切りしまでは(一圖)と同手順である、次に白七と打つて一、三の石を逃げ出した時黒は先づ八と逃げ徐ろに白を殺さんとし白九に逃げ黒十と約へた。

扨斯の如き形となつた時白の數子は如何と云ふに最早如何に打つも逃げ出す可き途は無いのである、何故なれば、此時に若し白十一と打てば、黒十二と出で、白十三の時、黒十四と打て一、三以下の白五目を打抜くからである。

(三圖)、白十七と打ちし時、白一、黒二、白三の時、黒四と打て一と三の白を分割し、白五の時、黒六と打ち、次に白七に切りし時、黒八に打抜き、白九の時、黒十と逃げ出したのである、白猶十一と追へば黒十二に逃げ、白十三、黒十四、白十五の時、黒十六と打て十一の一子を提り、次に白十七の時黒十八と打抜くのである、然して此白十七と打ちし時の如き最も黒として間違ひ易い處である。

何故なれば、黒は既に十六と打抜きし後なれば、最早大丈夫なりと安心して、白十七の時に猶黒の四目が當りの狀態になつて居ると云ふ事を心付かぬ事往々にし

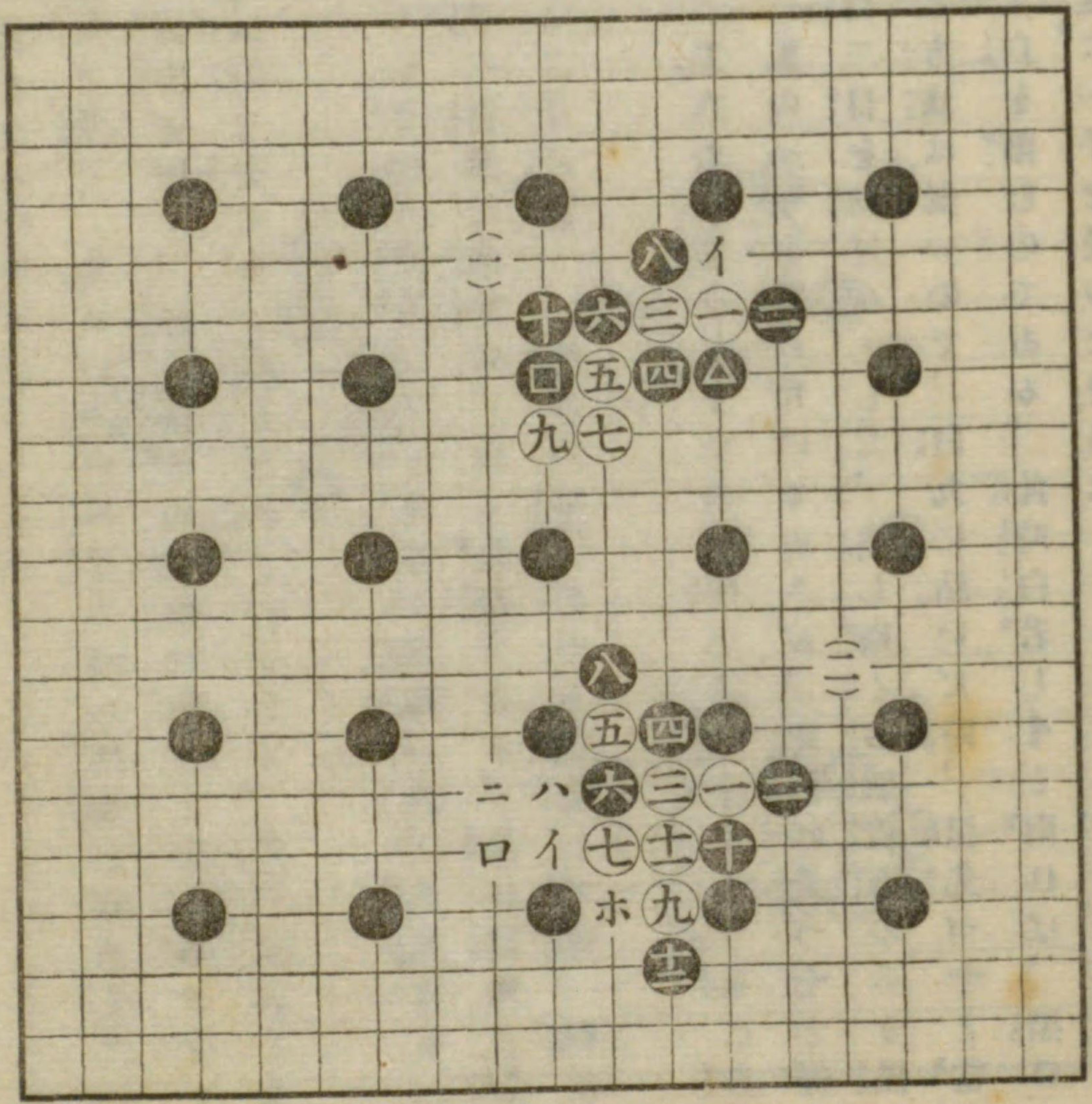
て初心者の打碁に見受くる處である。（四圖）、黒八をイと打てば、黒六までは前と同形である、前には白七と切て、黒に八と打抜かれたのであるが、此圖は先づ白七と逃げ出した、然し此手は惡手であつて、次に黒に八と打たれて此二子の逃路は無い、然るに黒若し方向を誤り、八と打つ可き手をイより打つとすれば、白は直に八と逃げ出し此石は三個の活力を有する事となつて外に逃すのである。

故に同じく敵の石を當りの狀態となすにも其方向をよく〳〵見分けなければ即ち本圖の如く一つは白を捕へ一つは白を逃がす樣な結果となるのである。

第二圖（一圖）、黒四と約へる手に就て、白一と先づ黒の一子に肉迫したとする、依て黒二と約へて白の活路を縮め反對に攻勢をとつた、白止むを得ず三と逃げ、黒猶四と壓迫したが、此四と約へる手は、六或はイ又は八と打つも同じく共に白の一の活力を減ずる譯であるが其意味に於ては非常の相違がある、何故なれば實戰上の好着手とは、敵の活力を減ずると同時に又味方の活力を增すと云ふ、此二つの條件を必要とするからである。

今此四の着手について研究するに成程敵の活力を減ずる上に於ては、イも八も六も又四も皆同じであるが、味方の活力を增す即ち味方の連絡を取る上に於ては、非常の相違である、即ち黒圖の如く四と打てば、白次に六と打つも、黒は五と打つて、(ロ)及び(△)の黒とも連絡し一致協力して白に當るのである

が、若し此手をイ、八、六の三點の中何れかに打つて、白の活力を縮めんとすれば、白次に四と打つて、(△)と(ロ)の黒は分離せられ、白を攻めんとする



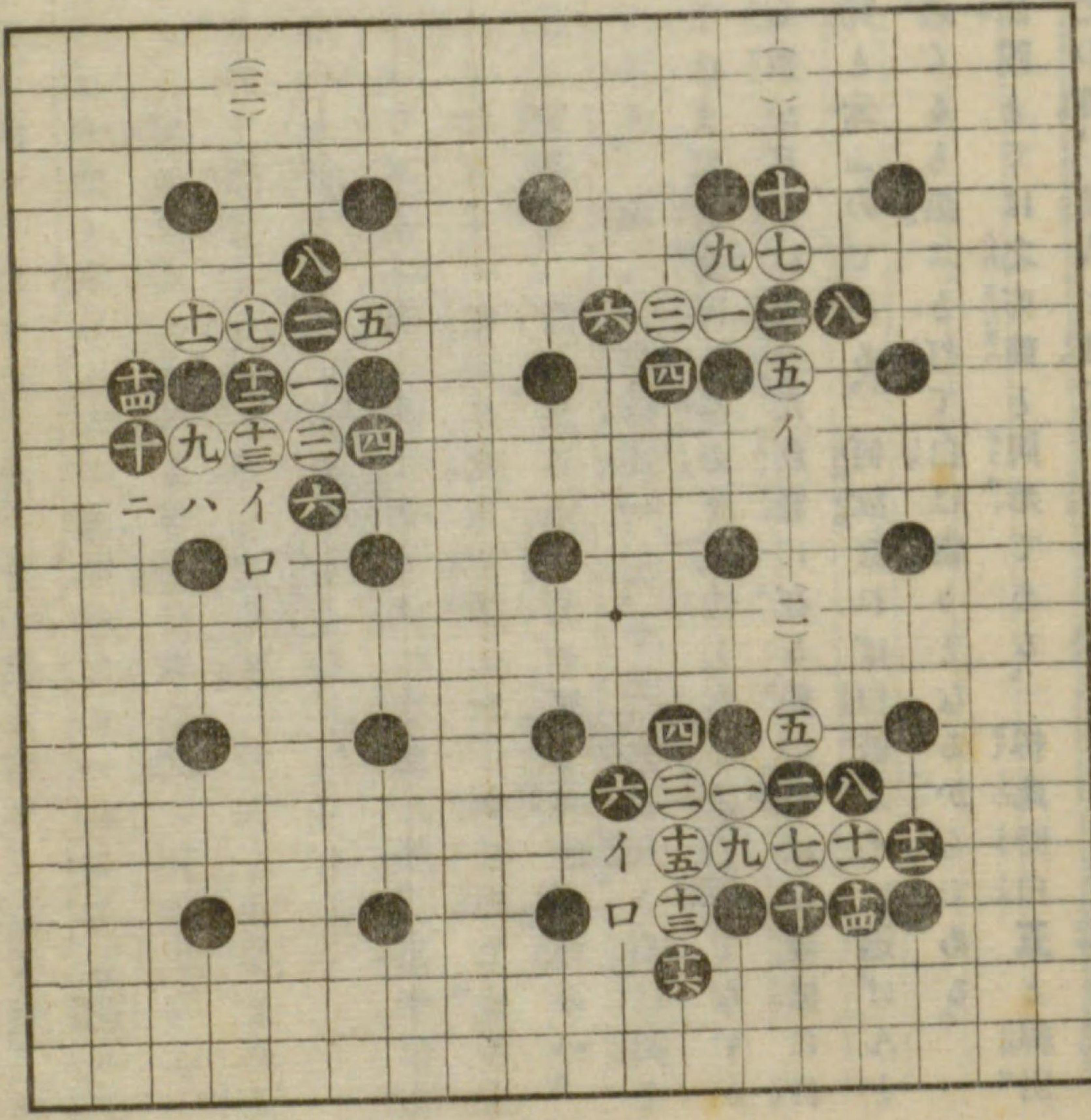
實戰第二圖

よりは先づ味方が攻めらるゝ形となるのである。此點が覺へ初めの中最も心得可き事で、初めの內は只專ら敵の活力を縮め且之れを提らんとのみにて、味方の活力を增す、即ち味方の連絡を取ると云ふ事を少しも注意せざる爲め多くは反對に敵に提らるゝ結果を招くのである、（此理は以下實戰の時委しく說明す）

扨以上の理によつて**黑四**と約へる手は一番善い手であるが其他の**六**、**八**又は**イ**に至つては何れも惡手である、次に白**五**の綽込は、少し無理である、故に黑**六**と劇しく切斷し、白**七**の時、黑**八**と二子に當り、白**九**の時、黑**十**と接續して此一戰は黑の勝利に歸したのである。

（二圖）、黑**十二**と打て白を圍む、黑**六**の切違ひまでは前と同じ手順である、次に前圖に於ては白**七**を**八**に行びて、**五**の一子を助けたのであるが、此圖は先づ**七**と綽ねて**五**の一子を捨て**一**、**三**の白二目を助けんとした、然し斯く多數置石のある黑の中では、到底之れをも助くる方法は無いので、白**九**に粘いだ時、黑先づ**十**と當て、白**十一**の時、黑**十二**と打て白を圍むのである、此時白若し**イ**と出れば、黑**ロ**に約へ、白**八**、黑**ニ**、白**五**の處に一子を提つた時黑**ホ**と打つのである。

（一圖）黑に**十**と打れて逃路なし、黑**四**までは前と同形である、次に白**五**と切斷した、然し此手は惡手であつて、黑は此際**イ**と打つも**五**の一子を征に提る事が出來るが夫れよりは大きい白に向て**六**と壓迫し、**一**、**三**の二子を二つの活力に縮めた、依て白止むを得ず**七**に綽ね、黑**八**の時、白**九**と粘いだのであるが黑に**十**と約へつけられて、矢張り此白の逃路は無い、即ち（二圖）



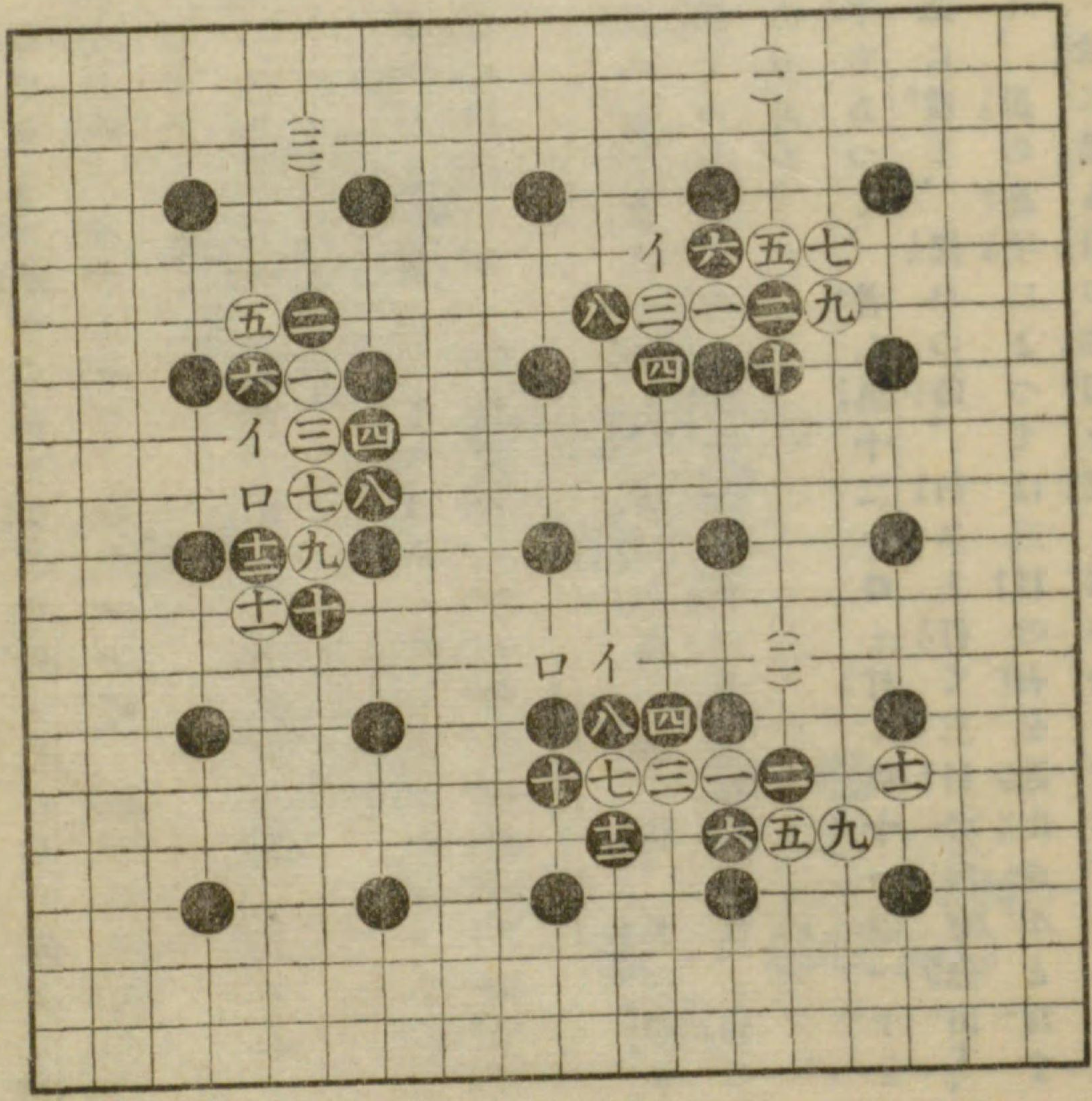
實戰第三圖

の如く白十一に出れば、黒十二と約へ、白十五、黒十六と約へるのである、而して此十六と約へし手の意味は白の一の活力を縮め併して白の出路を塞いだのである、然るに若し此手をイ或はロの處に打つとせんに此手は白の活力を縮める點は十六と同じであるが然し白に直に十六と行びられ大に其活力を增されるから黒は之れを捕うる事の出來ぬ形となるのである。

(三圖)、白四目は死、黒八の行びまでは前と同じ形である次に白九の時、黒十は白一、三以下の三子を急に提らんとはせず、徐ろに之を包圍した。依て白も止むを得ず、十一と打ち黒初めて十二と切斷し、白十三の時、黒十四と粘ぎ、白の一、三、十三、九の四子を殺したのである、而して何故此一、三、十三、九の如き石は死であるかと云ふと現在此儘の形ではまだ白全部の活力を阻止したと云ふ譯でないが到底助かる見込がない、所謂命數が旦夕に迫つた狀態に在る此の石は早晚黒に打上げらるゝのであるから之を死と云ふのである、何故なれば白若しイに逃げんとするも、黒ロと約へ又白ハに逃ぐるも黒ニと打て白は當りとなるからである。

第四圖(一)、十とイとの比較、黒四までは之亦前と同形である、扨此時白五と綽出し、黒に六と切斷せられ、白七の時、黒八と打て、白の二目を提つた、次に白九の時、黒十の粘は、此場合イと打てば、白の二子は打拔く事が出來るが、然し此形では直に、イと打拔かずとも、白の一、三の二子は全く逃路は無いから圖の如く十と粘ぎ白の五、七、九の三子を攻擊した。

(二圖)、黒八を九に打てば白七と逃げ出した時、黒は如何に應ず可きかと云ふと圖の如く八と先づ接續するを宜しとする、若し此手を九の處に打てば



實戰第四圖

白に八と出られ、黒イの時、白にロと切斷せられて黒の不利となるのである、故に先づ八と連絡を保ち次に白九の時、黒十と約へ、白十一の時、黒十二と打て白を當りとなし三目を確にとつたのである。

(三圖)、白九と行び外に逃げ出さんとした時、黒十と約へ、白十一の時、黒十二と切て白を全く包圍した。

又此內、黒十の約へは、前に說明せしと同じくイ又はロと打つよりは優つて居る、總て斯の如き形は、實戰の時常に用ゐらるゝ好形であるから特に御記臆を願つて置く。

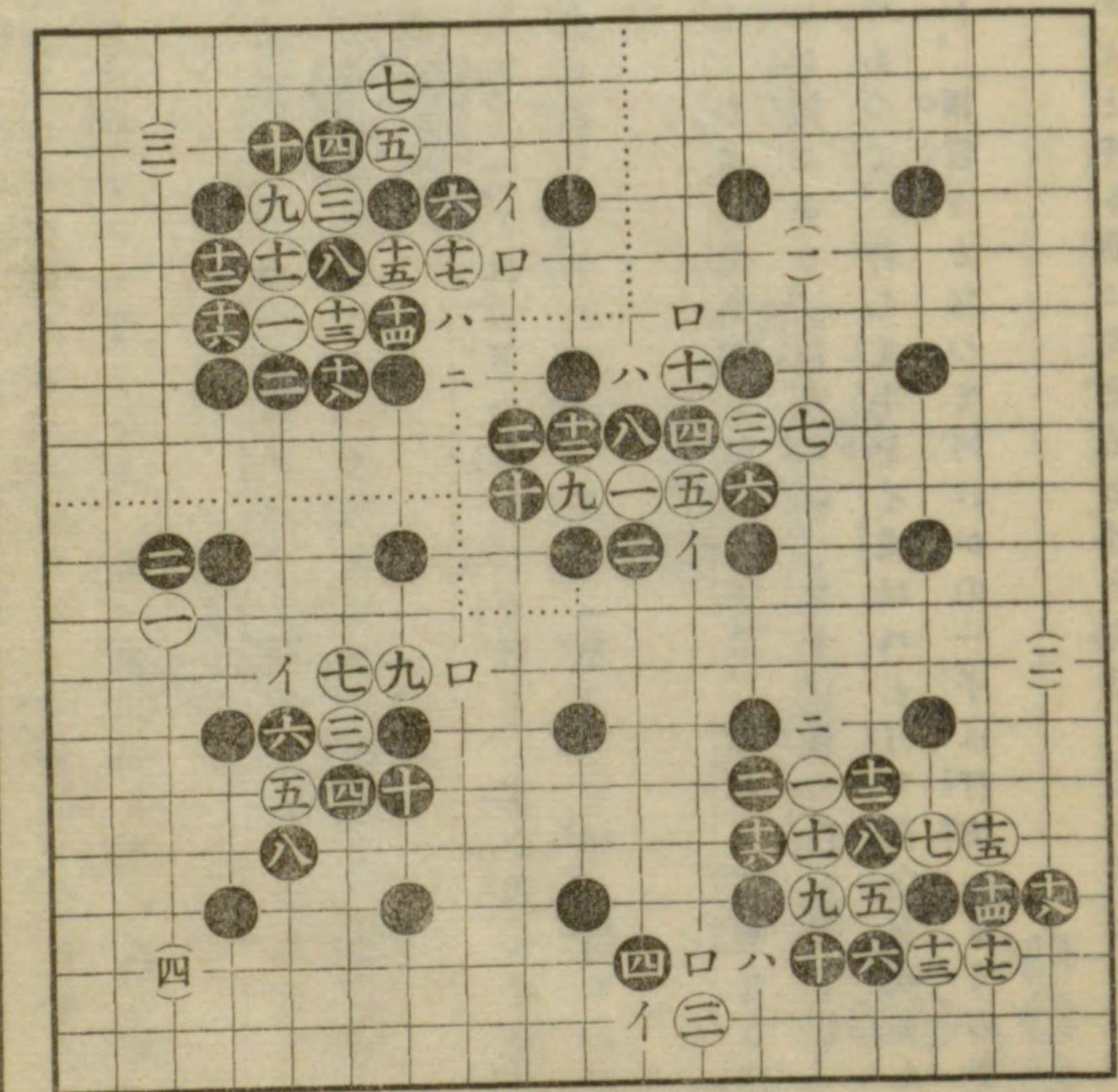
第五圖(一圖)、白十一の意味、白一以下黒八と約へ、次に白九と逃し時、黒は必ず斯く十と約へなければならぬ處であつて、若し此手をイ或は十二に打てば、白に十と打たれ四子を逃出さるゝのである。

白十一の切りは大に策のある手であつて、若し黒十二をロと打て猶十一の一子をも提らんとすれば、白先づ十二に當て、黒ハの時、白ニと打て三目の白を逃出す、斯の如きは、白先づ一子を捨て、黒の應手によつては三目の石を逃出さんと爲す可き最も巧妙なる手段である、故に黒も白の趣向を破り圖の如く十二と打て三目

を確實に圍つたのである。

(二圖)、黒十八宜し、黒二は前と同じく先づ我石の連絡を取り且白を攻擊した。

白三に對する黒四の應手を見るに、三の白は何れの黒にも密接せず、獨り飛離れて居るのであるから、黒も亦三の白には密接せずして四と尖んだ、然るに白三の手を若し、八の邊に打つとすれば、黒も亦十或はロに打て白を攻擊する事勿論である。



實戰　第五圖

黒十八の行を二と打てば、四目の白を打抜く事は出來るが、其時は、白に十八と打たれて十五と十七との二子を連續さるゝ形となる、故に圖の如く黒十八と行び白を兩分し且之を攻擊した。

(三圖)、黒十四の約は、之亦黒八の一子を捨て白を重復する形とならしめんとしたのであつて、次に白十五の時、黒十六と打て白の活力を減じ、白十七に逃し時、黒十八と之を當りとなしたのである。

此時白若しイに當れば、黒八に打て一、三以下の白五目を提る、又白若しイの手をハの處に打つとすれば、黒ロに當て、白ハの時、黒ニと當て白を征に提るのである。

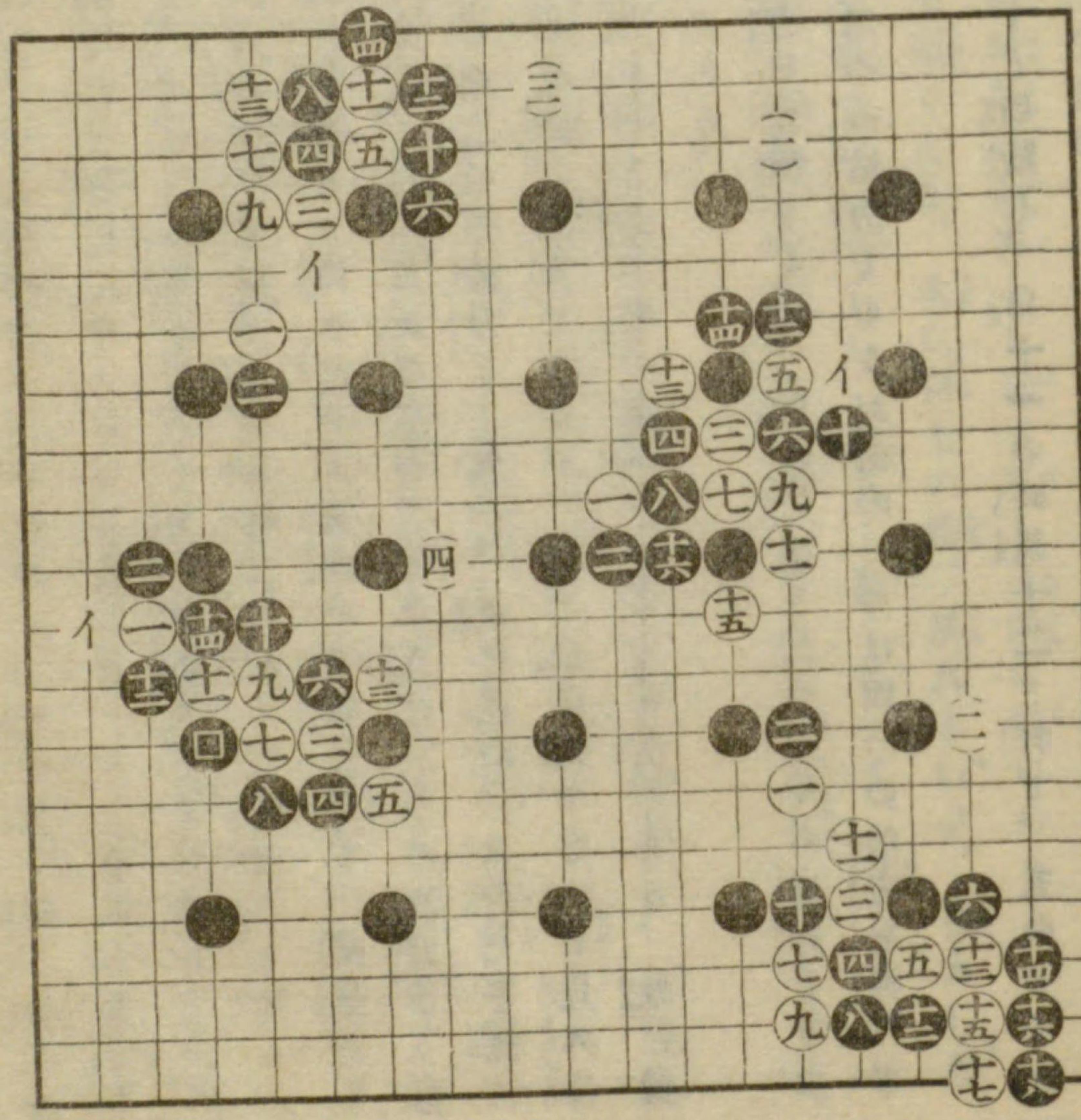
(四圖)、十と切られ兩當りとなる、白五の時黒六と切りし手は、如斯き優勢なる黒として、常に用ゆる劇しい好い手談である、白九の時、黒十は先づ自ら堅くし、後徐ろに白を攻めんとするのであつて、若し此手をイ或はハと打て猶白を攻めんとすれば、直に白に十と切られ、兩當りとなつて何れかの一子は打拔かるゝのである。

故に實戰の時は、先づ白を攻めんとする前に我缺點如何を熟視す可き事最も必要

である。

第六圖(一)其形重復す、黒四までは前圖(一)と同じである、次に白五の時、黒先づ六と切り白七の時黒八と追つて、一と三の白を分離し、白九の時、黒十と逃げて三と五の白をも分離したのである。

斯の如き形となつては、白の勢力頗る薄弱であつて、白は殘らず此三つを逃出すと云ふ事は困難であるから、此際最も大石である可き三以下の三目



實戰　第六圖

を十一と打て逃出したのである、依て黒十二と一子を提り、白十三の時、黒十四と粘いだ、然るに若し黒十四と粘ぐ手にてイと一子を提れば、白に十四と當てられ、黒は猶五の處に粘がなければならぬ事となつて其形重復するのである。

(二圖)、黒六玩味すべし、黒六の行は、前圖(二)及び本圖(二)に於ても此着手を見るが此手は、如斯き白の三及び五と切違ひし時に於ける最良の手談である、何故なれば、此際白黒の活力を比較するに、白の三及び五の二子は互に二つの活力より無く、又黒の四及び置石の二子も亦二つの活力より無い、故に此際、只白二子黒二子のみとして其勢力を比較すれば全く互角であるが、然し黒は先手を持ち且外勢も甚だ優つて居るから、尋常に打つも必ず黒の勝利となる可き筈である、故に圖の如く黒六と一方を行びたのである。

扨斯の如くなつた時再び其活力を比較するに、白は矢張り二つづゝの活力より無く、之に反し、黒は、一つは二つの活力であるが他の一つは四つの活力を持つ事となつた。

次に白九と約へし時、黒先づ十と切斷し、白十一の時黒十二と打て、五の一子を提つた。

白十三以下十七までは、只黒の應手如何を試みたのであつて、圖の如く黒に十八まで正しく應答せられては、最早白は如何とも爲す可き手談は無いのである。

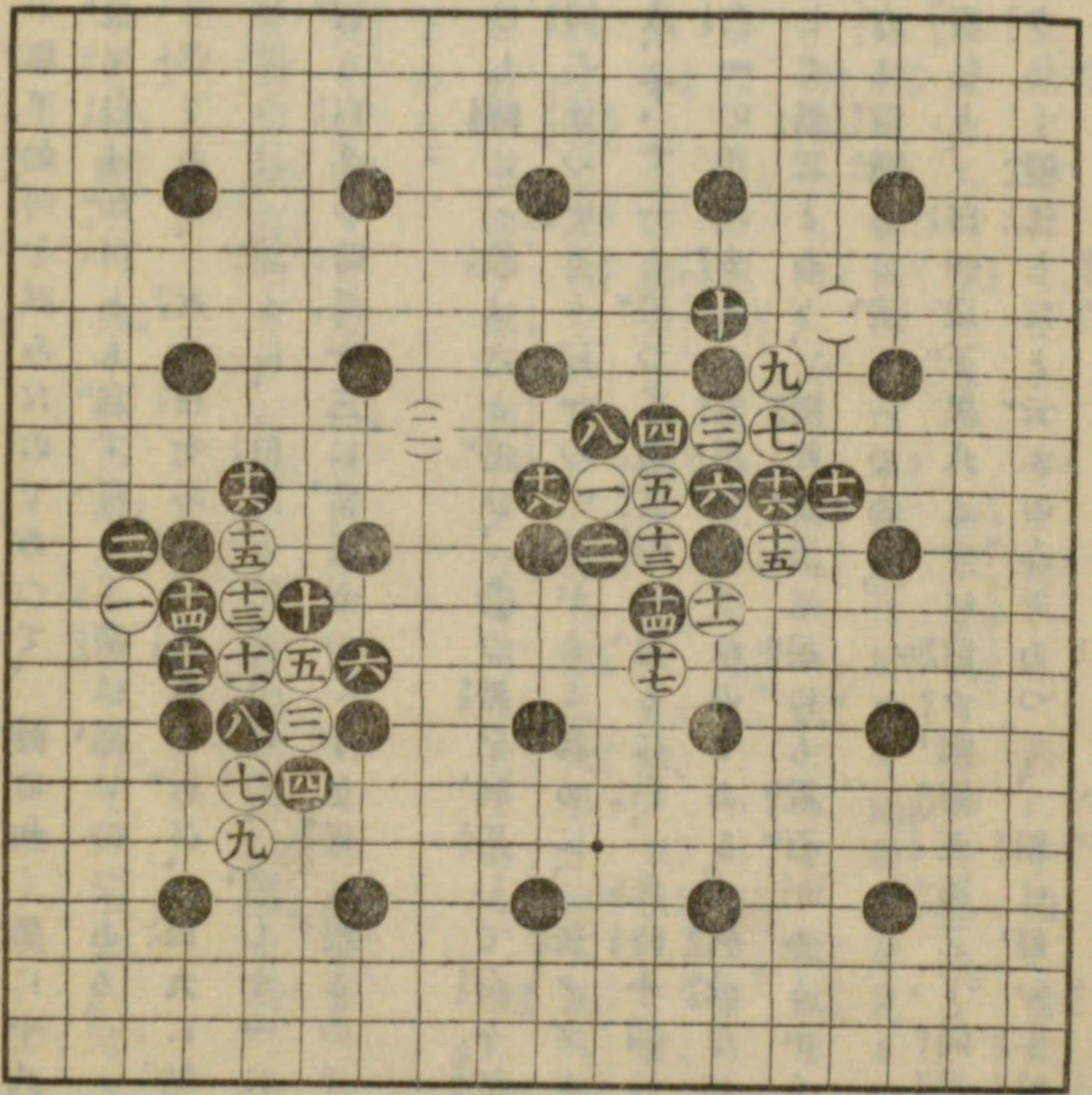
(三圖)、黒六までは、前と同じ手順である、次に白七の時、黒八と行び、白九に粘ぎし時、黒十と打て五の一子を提つた、然るに、白九と粘ぐ手にて、若し十一に打つとすれば、黒は先づ九に切り白イの時黒十三に當て七の一子を征に提るのである。

(四圖)、征の一例、白五と切違ひし時に、黒は六と追ひ、❹の黒を利用して白を征に掛けた、然し此場合では、同じ征の中でも白一の一子がある爲めに、征クズシの様にも見ゆるが圖の如く黒八、十、十二と追つて後其形を見るに白、此時十四に粘げば、黒直にイと打抜き、白一の手は少しも其用を爲さぬのである。何故なれば、白一とあるも、之れに接して黒二とあり、猶此上黒は星にも置石があるから之等の手によつて、白一の効力は消滅して居るのである。

第七圖(一圖)、黒十六必要の一着なり、白一以下黒八までは前々圖(第五圖(一)と同形である白十一と附し手は、只少しく變化したと云ふのみであつて、別に好い手談では無い、故に黒は十一の附に對しては應答せず、十二と打て三以下の三目を提

らんとした、白十三、之亦無理な手段であつて黒に十四と切斷せられ十三、五、一の三目は當りとなつたのである。

白十五の時、黒十六にて若し十八と打て三子を提れば、白十六に接續し、三以下の白を逃出すのである、斯く一以下の三子の如く、當りの形となり到底逃出す方法の無い時は、黒も急ぎ之れを打上げるの必要は無いので、卽ち白十五と當てし時黒



實戰第七圖

は十八と打抜かず、圖の如く十六と接續して三以下の白の連絡を絶つて白を攻める方が大に優つて居る。

(二圖)、白七の時に當つて黒の外勢甚だ優つて居る時は劇しく黒八と切斷して惡くないのである。

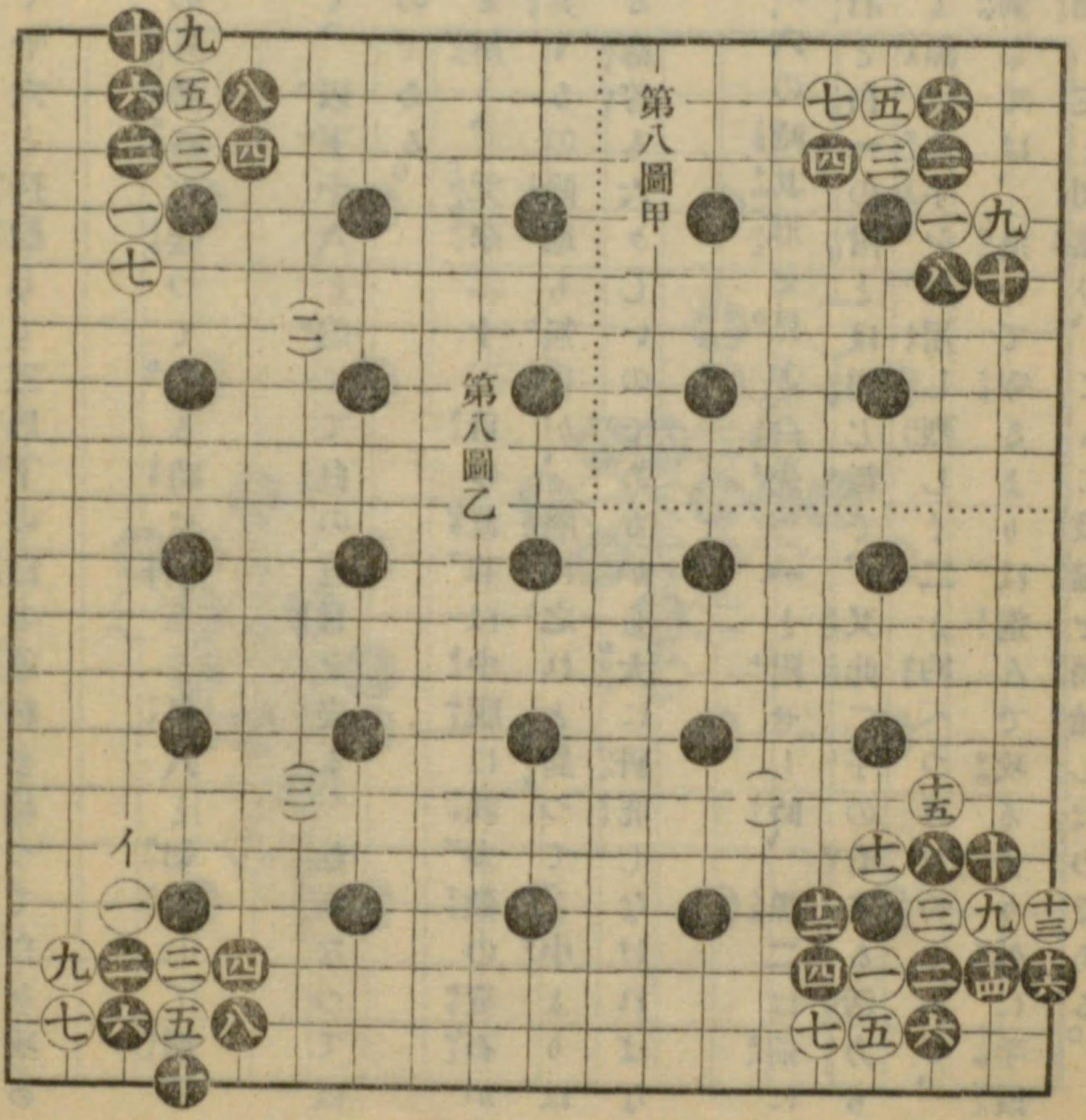
白九と行びし時黒は十と當て、以下十六と追つて白の五目を提る、如斯なつては此一戰全く白の敗に歸したのである。

次は隅に於ける戰爭の狀態を解う、元來二十五目の置碁は中腹に我多數の置石があるから、白は到底奇策を弄するの餘地も無いが、隅は之れと異つて、中よりは變化多く隨て黒の之に對する應答も六ケしいのであるから大に研究しなければならぬ。

第八圖(甲)、白一、三、五、黒二、四、六の時其形を見よ、白先づ一と附せし時、黒二は前に其一端を說明した通り、置石と白一の附とは同じ數で、又此二子の有する活力も同じく三個づゝである、依て黒は先手を利用し烈しく二と約へつけたのである、然し白も斯く多數の置碁に對しては、退いて守るよりは進んで攻るより外に手段の施しやうがないから圖の如く三と切違ひ、こゝに戰端を開始したのである。

扨此時、黒は敵の石を提らんとするには先づ我石の勢力を強くす可き必要がある。故に先づ其手段として四と當て白を五に行ばしめて六と約へたのである、此時彼我の形勢を見るに白の三及び五と、黒の二及び六とは、同じ數で、又白一と黒の置石とは同數同勢力である、然し只黒は、四の一着が多大であつて白の勢力を縮めて居るから、矢張り此形に

實戰　第八圖



於ても黒の優勢である可き事無論である。白七は萬止むを得ぬ手で、此際白の三、五と黒の二、六とは、二に對する三と云ふ活力の相違があるから止むを得ず斯く逃出した、此時黒は白一の一子と、二、六の黒二子との勢力を比較するに、石の數に於ても、又手數に於ても黒優勢を示して居る、依て八と壓迫を加へ、白九と逃出した時、黒は直に十と約へ、黒の三手に對する白を二手となしたのである。

乙圖(一)、形勢は變化して止まず、黒十までは前と同手順である、次に白十一は既に三、九の二子が捕虜の形となつたのであるから、更に方面をかへ、斯く切斷して隅の置石を提らんと計つたのである。

故に黒十二と連續し、白十三の時、黒十四と約へ、何處までも黒は三手、白は二手と云ふ形に押しつけて居る、白既に三、九、十三對二、六、十四の戰は不利なりと見て、今度は八及び十の二子に向て十五と攻擊を開始した、扨此時に當つて、双方の形を熟視するに、黒二、六、十四對三、九、十三の爭は轉じて白三、九、十三と黒八、十との爭となつた、卽ち敵の來る處隨所、戰の中心となる譯で、形勢は時々刻々變化して止まぬものであるから、碁は其れに適應すべき手段を取る事最も必要であ

る、

此時第二の戰鬪狀態にある、黑白共に手數は二手づゝであるから、黑は白の十三には頓着なく十六と壓迫して白を全滅せしめたのである。

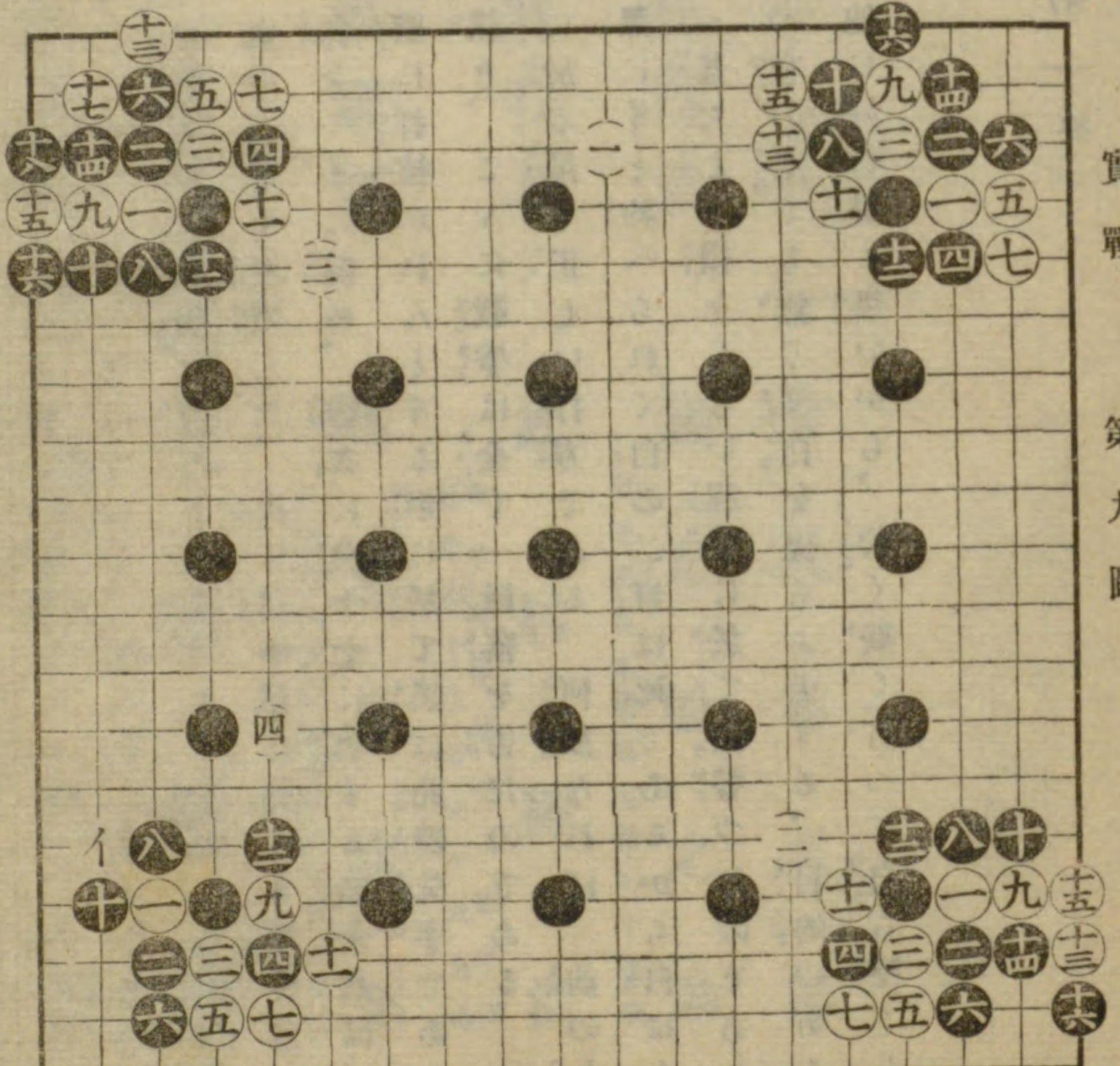
(二圖)、白七よりの變化で、前圖に於ては白七を八に行び、黑に一の方面に打たれたのであるから、今度は白五と一子を逃出した、扨此場合に於ては云ふまでもなく黑八と約へ、白九の時、黑十と打て用捨なく三以下の三子を提つたのである。

(三圖)、白七の時其手數を見よ、白は前圖(甲)及び(一、二圖)の如く打つも不可であるから、今度は直に七と迫り、黑の二、六の二子を提らんとした、然し黑は此際双方の手數を算するに、黑二手(二、六)に對する、白二手(三、五)で黑は先手を持つて居るのであるから、直に八と約へ、黑の二手に對する白を當りとなし、三及び五の二子を提つたのである。

第九圖(一圖)、攻合の實例、黑十までは前の(一圖)と同形である、扨此時に白十一と切るも黑は十二と粘ぎ、白十三の時、黑十四と打て白の手數を一手に縮めた、次に白十五の時、黑は白の唯一の活力と恃む十六の一點に下して之を打上げたので之等は攻合に於ける平易なる實例である。

(二圖)、白十一と切た時、黑は四の一子を捨て、隅の置石を救ふ可く十二と粘いだのである、次に白十三の手は別に深い考へのある譯では無く、只黑をして此次の着手を迷はしめんとするのみである。此時黑は直接一、九の白二子に肉迫して十四と當て、白十五の時、黑十六と打て白の四子全部を當りとなしたのである。

(三圖)、白の手數を縮む、白に十三と綰られし時、



實戰第九圖

今迄は白の二子と黒の二子とは二に對する三と云ふ手數であつたのが、白に十三と綽られし結果、各其活力は二つづゝとなつたのである、然し隅に於ける黒の二目は猶活動す可き餘力を持つて居るから、黒は自己を保護すると同時に白の手數を縮める可く十四と打て一、九の二子を壓迫した、次に白十五に對する黒十六は白二手黒二手であるものを、白を一手に縮め、猶次に白十七に對する黒十八は、白一手黒一手であつて何れが將に打拔かれんとする形に於て黒は此際先手であるから十八と打て白の三子を打拔き、こゝに戰爭は全く一段落を告たのである。

(四圖)、白九の切違ひは、此際に於る最も正しい打方である、何故なれば、前の如く白九の手にて十と逃るも、黒にイと約へられて白の二目は死であるから白は九と切て次に十一と打拔き、先づ甚だしき損をしない程度に於て振替つたのである。黒十二の約へは此際急いで打つ程の處でも無く又白を提らふとする、目的のある手でも無い、只此場合では、他に好着點も無いから、暫く斯く打つて自ら堅くし白の手段を待つたのである。

新式圍碁寶典 第一 終

202
437

大正五年五月十五日印刷
大正五年五月二十日發行

圍碁寶典第一
定價金六拾錢

著作權所有

著者 鈴木爲次郎
發行者 東京市日本橋區北䩭町十番地 濱井松之助
發行者 東京府荏原郡入新井村新井宿千三百七十九番地 武居勝治
印刷者 東京市京橋區新榮町四丁目三番地 高橋赤次郎

發行所 東京市日本橋區北䩭町十番地 振替東京一三七五番 大阪屋號
同 東京市神田區南神保町九番地 振替東京二七七二三番 模範棋書發行所 斯文館